

genocidertale

上新粉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは不条理な世界を理不尽に塗り潰し続けた少年の烏澁がましく滑稽な物語である。

※※※※※※※※注意喚起（必読）※※※※※※※※

*本作は同タイトルのSS及びAU作品があつたとしても作者が知らないので全くの無関係です（もし同様のタイトルを見た方がいらつしやいましたら純粋に興味があるので教えて頂けると幸いです）

*本作の中で一部端末及びブラウザにてリリースする話がある為、該当する話には「※」をタイトル右につけておりますので長文作品を開いた際にリリースする症状が発生する方は「※」のついた話の閲覧はご注意下さい。（何らかの対応は検討しております）

*本作はルート路線の為、ルートが解らない方ならびにルートが苦手な方は戻られるのが賢明です。

追記

本作は一部AU作品の登場人物が出てきますのでご理解下さい。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

＊ここまで進んでいる方は大丈夫かと思いますがネタバレ注意です。

すでになまえがつけられています。

「

」

目次

	1
いいえ ※	1
はい	52
ルインズ ↓ スノーフル	62
スノーフル ↓ ウォーターフェル	67
ホットランド ↓ ラボ ↓ 真研究所	71
真研究所 ♪ ???	75
真研究所 ↓ さいごのかいろう	82
さいごのかいろう	89
謁見の間	96
謁見の間 ↓ 結界	101
結界	104
結界 ↓ ??? ↓ 結界	111
結界 ↓	118
T A L E ↓ るいんず	121
すのーふる	128
うおーたーふえる ↓ ほつとらんど	135
しん・けんきゆうじよ ↓ にゅーほーむ	140
にゅーほーむ ↓ さいごのかいろう	147
N E R V E L E S S T A L E / G E N O C I D E R T A L E	154
E	154
F A L S E T A L E	160
N E R V E L E S S T A L E	170
F A L S E T A L E ↓ ルインズ ↓	179
N E R V E L E S S T A L E ↓ るいんず ↓	188

GENOCIDER	TALE	TRUE	END	314
UNKNOWNABLE	TALE	side	Frisk	302
UNKNOWNABLE	TALE	side	フリスク	297
UNKNOWNABLE	TALE			290
UNDERTALE				281
GENOCIDER	TALE	END		273
けっかい	vs	Guster		266
けっかい	Re:	Guster		261
けっかい				256
?????				250
すのーふる	FP			245
すのーふる	C&C			240
E				229
GENOCIDER	TALE	X	NERVELESS	TAL
NERVELESS	TALE	side	C	226
217				
GENOCIDER	TALE	Sevens	soul	
hara	s			211
GENOCIDER	TALE	Genocider	V	C
GENOCIDER	TALE	???		206
a				197
NERVELESS	TALE	Frisk	vs	GChar

いいえ ※

*君は賢明だな。

*だが全く興味が無い訳でもないんじゃないかい？

*いいよ、僕は君がいずれ決意を抱き『はい』と選択するその時までゆっくりと此処で待つ事にするさ。

*この文字数なら上から戻る方が早いかな？

*それじゃあね、またどこかで。

?

*はあ、何を期待してるのか解らないけれどこの先には何も無いよ

*分かった、君の決意には負けたよ。

*この作品の本当の作者は上新粉っていうんだ。実はアナグラムになってるんだよ。

*どうだい？とても無駄で無意味な無駄骨だったろう？

*もう上に行くのも大変だね。

*ここまで来てくれた君の為に素晴らしい方法を授けよう。

*『ブラウザバック』と言って普段君達が携帯やパソコン等でページを戻ってるだろ？

*それならこんなクソ長いスクロールを繰り返さないと済むよ。

*ま、他にも方法は幾らでもあるけどねっ。

*それじゃあ今度は作中で会おう。

*僕の生き様を見届けに来てくれると信じてるよ。

*おい「ジエノサイダー」まだ諦めて居ないのか。

*おいおい、彼らにネタバレをするなんて随分冷めた事をするじゃないか。

*ふん、こんな所まで来る様な物好きは居ない。それにどうせ塗り潰してるんだろ。

*ふふふ、君はまだ人間の好奇心を甘く見ているようだね。

*お前をもはや人間とは思わない。

*はは、酷いなあ。ただか135, 934, 267回程度化物を殺しただけで人外扱いだなんて。

*……異常者がっ。

*ま、それも次で終わりだから安心してよ。

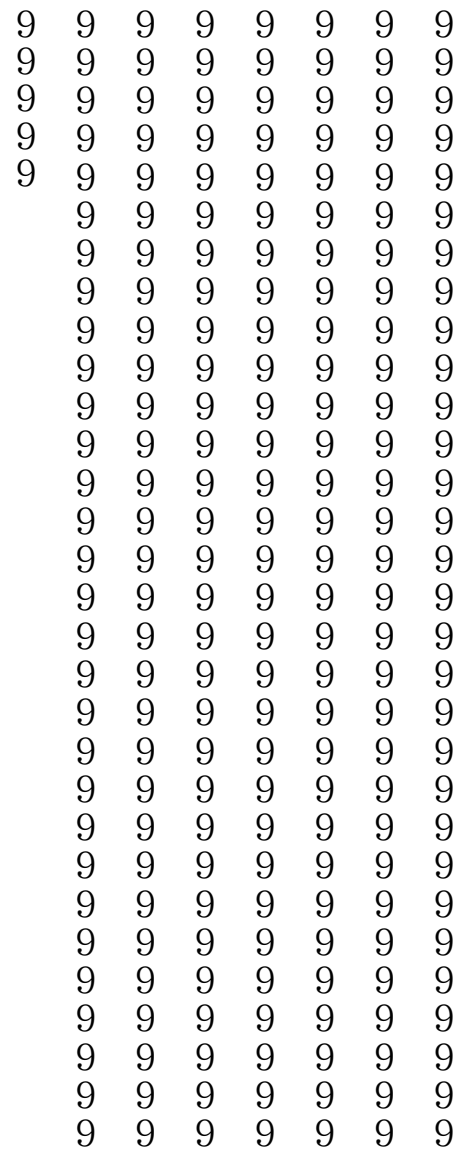
*なに？

*おっと、ここからは本編で話そう。

*………

*大丈夫、君もこれ以上辛い思いをしなくてすむよ。

*一体どういう——っておい！



はい

*やあ、初めて会う君には初めまして。
もう会った事がある君はこんにちわ。

此処にいる君達なら知っているだろうけどこの世界は君達の住む世界とは別の世界。

解りやすく言うなら君達が『UNDER TALE』と呼んでいる世界だ。

詳しく話しても良いんだけど注意喚起をちゃんと読んでくれた上で此処にいる事を信用して今回は割愛させてもらうよ。

*僕が何者かだって？そんな些細な事は別にいいじゃないか。

まあ、一つだけ伝えておくなら僕は彼であり彼女であり、そして君だ。

よく解らないって？僕も自分が何者かなんて解ってないから安心していいよ。

これが見えてる君なら何となく解ってるんじゃないかな？

*それより僕が今何処にいるかを伝えて置かないと。

此処は世^{Under tale}界が始まる前提の時間軸、つまり最初のになげんがイビト山から落ちてきた所だ。

*勿論本来であれば僕や君達が干渉出来る様な時間軸じゃない。

けどね？僕は呆れる程膨大な時間を費やして遂に干渉する手段を見つけたんだ。

*僕の目的を果たす為に。
奴がまだモブ側にいるこの時間軸で。

*ま、君達はゆっくりと物語の行く末を見守っているといいよ。
バタースコッチシナモンパイでも食べながらね？

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

むかしむかし ちきゅうには ニンゲンとモンスターという 2つのしゅぞくがいました。

ところが あるとき 2つのしゅぞくのあいだに せんそうがおきました。

そして ながい たたかいのすえ ニンゲンが しょうりしました。

ニンゲンは まほうのちからで モンスターたちを ちかにと じこめました。

それから さらに ながい ときが ながれ……
イビト山 201X年

それは 「のぼったものは にどと もどらない」といわれる でんせつの山でした。

これはそんなイビト山ですがたをけしたさいしよの にんげんのことものものがたり。

※※※※※※※※※※※※※※※※

「こつちからきこえたとおもったけどな……」

意識がまだはつきりしないが、遠くから聴き馴染みのある少年の声が聞こえる。

これは……アズリエルか？

いや、まて。どうしてあいつの声が聞こえる？

これまで奴がずっとモンスターを皆殺しにしては世界を壊し続けていた筈なのに。

頭を働かせて居る内に私は一つの大きな違和感を覚え始めていた。

自分の視線の位置がおかしいのだ。

いつもならフリ……奴を背後から見ているはずだった。

だが、周囲を確認しようとするらしい姿はない。

私が奴を見失ったというのか!? ばかなっ!

しかしそれ以外に考えられない。

「……つち、拙い事になったな」

奴を野放しにしてしまつては手に負えない事態になつてしまう!

「けがはない? だいじょうぶ? ……たてる?」

アズリエルの心配そうな声かふと耳に入り私は慌てて返事をした。

「っ……うん」

「よかつたあ。えっと、はじめまして、ぼくはアズリエル。きみのなまえは?」

安心したように息を吐いてから自己紹介を始めるアズリエルに私は遠い昔の記憶から呼び覚まされた既視感を感じていた。

これはもしかして……私が初めて落ちてきた時の。

しかしいまいち信じられない。

決意の力でリセットしたとしても奴が落ちてきた時までしか戻れない筈だ。

というのも元々私の決意ではセーブとロードは出来てもリセットは出来ない。

奴の決意を利用して何とかリセットを行っているに過ぎないのだ。

私と違い奴ならば単体でリセットが可能だが自身が地下世界に存在しない所までは戻せない筈だ。

さてよ? もしかして私が最後にセーブした地点が此処で……ないな。

これ以上考えるにも情報が足りないか。

今出来る事としてはあの時を再現しながら情報を集めるしかないか。

それにあんまり放っておくと目の前のフワリン Jr が泣き出しそうだしね。

「キャラ」

「え?」

「私の名前」

「あ、キャラっていうんだ！いいなまあだねっ」

私が名前を名乗るとついさつきまで涙目になっていたアズリエルは一転して溢れんばかりの笑顔で答えた。

「アンタは名前負けしてるけどね」

「ええっ!?そ、そうかなあ……」

人の気も知らないでアホみたいな笑顔を向けてくる毛玉にちよつとイラツと来たのでからかってやる。

思った以上にへこんでいたので私は満足しつつ話を進めていく。

「(こごと?)あの世?」

「えっと、くわしくはおうちにむかいながらはなすね?あるける?」

「わかった」

たしかこんな感じの事を言っていた……つけ?もうちよつと愛嬌があつた気がするけど、まあいいや。

へえ?信じられないね。

この世界の事やママ達の事についての話を適当に聞き流しながらアズリエル先導のもとギミックを抜けていく。

途中アズリエルが見えない道で何度も落ちていた時は置いて行こうかとも思つたものだが、ともあれ無事ルインズのママ達の家に着いたのだった。

「ママッ……この子倒れてたの!どこかけがしてるかもしれないからみてあげて!」

「まあ大変……こちらにいらっしやい、すぐに見てあげるわ」

私は言われるがままに近付いて行くとママのまほうと暖かい抱擁によつて身体の痛みや疲れを癒してくれた。

懐かしくも優しいママの匂い、とても安心する。

本当はこんな事をしていない場合じゃない。

けど……今だけは……この、まま……。

今だけは全てを忘れて私はあつさり意識を手放した。

*うん、頃合かな？

その日から私は再びママとパパとアズリエルの四人での暖かい日々が始まる……そう願っていた。

だが、私にはその資格は無かった。

この世界や観測者がそれを許さない。それにママ達が奴に無惨に殺されるのを見てる事しか出来なかった私が幸せになるなんて許せない。

だが、何よりも……

*おはよう！いい夢は見れたかい？

くそっ……やっぱいいやがったかつ！この時間軸まで戻したのは貴様の仕業か！

*まあね、君には苦勞を掛けるからね。

このフリスク君がお礼に君が1番幸せだった時代に招待して上げたってわけ。

お前がフリスクだと？寝言は寝ていえ、ヒトの皮をかぶった化け物め！

*ふふ、君も多くの者からすれば化け物だろ？僕と君は似たもの同士さ

ふざけるなっ！私は違う！私の敵は薄汚い人間だっ！！

確かに自分の復讐の為にママ達モンスターやフリスクを利用しようとしたが、お前の様な目的を持たずにモンスターを殺し回る怪物と一緒にするなっ！！

*……あれ？僕がいつ目的も無く殺戮を繰り返していると言ったのかな。

はっ、貴様の行動に目的があるとでも言うつもりか？

*あはっ、どうだろうね？まあどちらにしろ君の存在は邪魔だからここらで退場してもらおうよ。

「あぐうつ!? な……に……う？」

奴を前にして油断など I d o t もしていなかった。

だが、奴の腕は突然私のソウルを掴んで胸を突き破る様に伸びてきたのだ。

*安心してよ、この身体は僕が大事に使ってあげるからさ。

「や……やめ……ろっ！」

胸から伸びる奴の腕を両手で掴み引き離そうとするが力が入らない。

突き破られた胸からが赤い液体が止めどなく流れ落ちていく。

失血により霞んでいく視界でどうにか捉えたその顔はどうしようもなくフリスクそのものである事に憤りを感じ、最期に力を振り絞って言葉を放つ。

「これ……以上……だ、れも……死なせ……な……い」

*願うだけなら自由だよ。それじゃあ、お別れだねキャラ。

ママ……パパ……アズ……生きて。

…G……r……聞こえてんなら……き……全てを……皆に！

パリーンツ

※※※※※※※※※※※※※※※※

ざんねん、キャラの冒険は此処で終わってしまった！

なんてね？ 彼女は充分過ぎるほど頑張ったよ。

流石の僕も何度心が折れそうになった事か。

けれどそんな彼女ももう居ないからね。

あと気を付けなきゃ行けないのは監視員の骨と世界の観測者とか
思い込んでる白いの位かな？

「さて、部屋も服も汚れてしまったしロードでもして綺麗にするかな？」

最後のセーブポイントは……死ぬ直前かあ、最期までやってくれるね彼女は。

困った、これじゃあ綺麗に出来ないや。

僕は身体を動かしつつこれからどうしようかと考えていると部屋の扉が乱暴に開けられた。

「ん？君は……アズリエル……だよな？」

さつきまでより二回りも三回りも大きくなってる。

んーと、強いて言えば遙か昔に見たアズリエル・ドリーマーの時の様な……

「シヨツカー・ブレイカー!!」

「うわあ!」

僕が尋ねた瞬間、アズリエルと思われるモンスターは一切の容赦無く雷撃を放ってきた。

僕は唐突の不意打ちになす術も無く黒焦げにされてしまった……なんてことは無いけどな。

僕が今までどれだけLOVEを上げてきたと思っっているんだい？

例えばアズドリ君だろうと殴り合えるだけのステはあると自負しているよ。

殺す事は出来ないけどな？

「もう、いきなりそんな事するなんてママはどんな教育をして来たのかな？」

僕は道中拾ったおもちゃのナイフを手に取りアズリエルに理由を尋ねた。

「キャラから全て聞いたよ。彼女がしてきた事も君がして来た事もね！君は危険だ！ママやパパには一歩も近付かせない！」

「はあく、流石ママ達の子供だね。そんな今日初めてあったヒトの話信じるとはね」

「キャラは僕に全てを託してくれた。信じるのにそれ以上の理由は要らないね！」

そう言つてアズリエルは双剣を具現化し振り掛かってくる。

あくあ、こっちは話してるって言うのに一方的に攻撃してくるなんて……モンスターなんてろくなもんじゃないね。

「ま、最初から殺る気だったし別に良いんだけど！」

アズリエルが振り回す双剣を軽々と避けながらおもちゃのナイフで右手首ごと剣を切り飛ばす。

「ぐう……大丈夫、大丈夫だよキャラ」

アズリエルは右手を庇いながら再び雷撃を放ってくる。

けどあんなもの不意打ちでもなければ掠りもしない。

僕は軽い身のこなしで近づくとき度は左の腕を肘から切り落とした。

「うう……まだ……まだだっ！」

まだ頑張ろうとしてるみたいだけど……飽きた。

「もういいや、先を急ぐとするよ。じゃあねアズ」

僕はそう宣告しおもちゃのナイフをアズリエルの心臓目掛けて振り下ろした。

「ん？」

「あ……ああ……そんな……」

しかし、振り下ろしたナイフはなんとアズリエルの前に飛び出してきたトリエルへと突き刺さったのだった。

「ママっ!？」

「うおおおおおおおおお!!」

突如叫び声が聞こえてきたかと思うといつの間にか三又の紅槍が僕の身体を貫いていた。

「パパ、それは流石に痛いよ」

「キャラには申し訳ないと思ってる。だが、我が子達を護る為なら非情にだつてなつてなれるさ」

アズゴアは続けざまに無数の炎を浴びせてきた。

この数から察するにトリエルも加勢している様だ。

本当に驚きだよ。

致命傷を受けているのにまだ攻撃する力があるだなんて。

けど……未だ僕が五体満足のままだなんてやっぱり甘ちゃん親子だよ君達は。

僕は突き刺さった槍を握り、素早くアズゴアへと押し返す。

「うっ……ぐう……い！」

アズゴアの槍の柄の部分が鎧すら貫きアズゴアの身体を串刺しにした。

「アズゴアッ！」

アズゴアの苦悶の声に反応したトリエルが振り向く。

と、同時に手に持っていたおもちゃのナイフをトリエルへと投擲する。

しかし、そのナイフはアズゴアの伸ばした腕に刺さり止められてしまった。

「トリイ……アズリエルを連れて逃げるんだ。それと……皆にも隠れる……ように」

「隠れたって無駄だよ。どうせ皆死ぬ事になるんだからね」

僕はアズゴアに刺さったナイフを掴んで勢い付けて振り下ろす。

アズゴアの腕が大きな音を立てて床に落ちるがアズゴアは痛みに耐えながらも僕の右腕を全力で掴んだ。

「トリイ！アズリエル！早くっ!!」

「面倒だから逃がしたくないんだけど、なあ！」

僕はすかさずアズゴアの左腕を切り落とそうとするもアズゴアが最期の抵抗とでも言わんばかりにシオルダータックルをかましてきたお陰で床にすっ転んでしまった。

「ああもう……面倒だな。さっさと死んでくれないかなあ？」

「ああ、そろそろ駄目だな。けど、二人を逃がすくらいは耐えて見せるよ！」

左手に持ったおもちゃのナイフを幾度もその身体に突き刺すが未だ塵にならずに原形を留めている。

そして漸くその全てが塵に還った時にはトリエルとアズリエルの姿はそこには無かった。

「……仕方ない、ルインズを出るとしようか」

王様に格好を付けられてしまった僕は少し不満を抱きながらもルインズを後にすることにしたよ。

ああ、途中扉が壊されたのはちよつと困ったけどね。

まあでもリセットせずに解決できて良かった良かった。

リセットは今の状態だとリスクが大きすぎるからね。

※※※※※※※※※※※※※※※※

*さて、どうだったかな皆さん！

え？圧倒的過ぎてつまらない？

*おいおい良く考えてみなつて。

僕はここまで来るのに途方もない数のモンスターを殺し続けてきたんだよ？

LOVEなんてカンストしてるし普通ならあいつらの攻撃なんて当たる道理が無いんだよ。

*それなのに苦戦しろなんて中々無理難題を言ってくれるねえ？

*でもまあ色々バグらせ過ぎた弊害は出てるからどうなるか解らないけどね。

*それとアズリエルは要注意だね。あそこで殺せなかったのは今回最大の失敗だと思ってるよ。

数少ない僕が殺せなくなりうる存在だからね。

*ま、気まぐれでやってくから続くかどうかは解らないよ。

そうだね、取り敢えずは観測者ののべ人数が200を超えたら続けるって事にしようかな。

*勿論しゅうりょうしたヒトの人数は含まないけどね？

*それじゃあまた会える時を楽しみにしているよ！

ルインズ↓スノーフル

ああ全く、幾ら繰り返してもルインズを出た時の温度差は慣れないものだね。

*あなたはさむさにたえる決意をいただいた。
なんて自分で言うのは寒いだけかな。

それよりいつもならあの骨がやって来る頃何だけどな。

僕はキヨロキヨロと周りを見渡すがそれらしい気配はしなかった。
そして直ぐに気付いた。

ここは僕が擦り切れる程に繰り返した世界じゃないんだった。

きつと今の僕をキャラが見ていたら『私の顔でそんな顔するな気持ち悪い』なんて言われていたに違いない。

僕はこれから何が起こるか解らないという記憶に無いくらい久しぶりに感じた【未知】に心から歓喜していた。

「あ、でもそうするとあの骨とかは居るのかな？」

「呼んだか？」

「え？」

突然背後から返事が帰ってきてびっくりした僕が振り返ろうとした時、膝カツクンをされたかのように視線が一気に降下していく。

僕は咄嗟に手を着こうと両手を床へ伸ばしたけれど、その腕も僕を支える事をせずにひとりでに倒れていった。

「うぐっ……だれ……だれ……だれ……」

今僕の四肢を躊躇いもなく切り落として見せた存在は見た目だけなら僕が目が眩むほどの回数殺し続けた何時もの骨だ。

「久しぶりだな、化け物」

だが深く被ったフードの奥から深紅の瞳を光らせるそいつは何時ものとは言えないが朧気ながら記憶に残っていた。

「ああ、いつぶりかは覚えて居ないけど久しぶりだね、屑」

あいつは星の数ほどある世界線の中でも随分と厄介な世界のサンズだ。

奴は僕（最初は僕じゃなかったかも知れないけどに）を止められず

に殺され続けたという記憶を持っている。

その末に僕と同じ道を辿りLOVEを上げ続けた化け物だ。

「つっても今更話す事もねえしどうせリセットやらロードやらで復活するんだろうからさっさと殺らせて貰うぜ」

そう言つて奴は止めとばかりに僕の身体を無数の赤い骨が貫いた。

ああ、しまった……こんな事ならスノーフルに出た時に気紛れにセーブしなければ……今度こそアズリエルを殺せたのに。

パリーン

逃がすと思うか？

僕は再びラインズの門の前に立つ。

それにしてもまさかあいつが来てるなんてタイミングが悪いなあ。けどま、出てくるタイミングさえ分かっしまえば問題ないや。

出現場所は先の橋を越えた瞬間だしあいつの攻撃も何度も見てるから避ける事はかんた……ん？

「よお、さっきさぶりだな。化け物」

「あれ？なんで……？」

まるで先程の焼き直しの様に僕の四肢を切り落としたサンズが目の前に立ち塞がっていた。

「おいおい、忘れちゃったとは悲しいねえ。俺は全ての記憶を持つちまってるんだぜ？」

「だから……って……」

ロード前と別の行動が取れるなんて。

その考えに気付いたのかあいつは冷酷な笑みを浮かべて答えた。

「馬鹿か？この世界線にルートなんてものがあると思ってるのか？」

その言葉で僕は納得せざるを得なかった。

「はは……それも……そうだね」

「けどな、一っただけ確かな事を教えてやる。お前がロードし続ける限

り俺はお前を殺す」

「はっ……まるで全て僕が悪いみたいない方だね？」

サンズは僕の問いに答えずに再び赤い骨を僕がバラバラになるまで突き刺し続けた。

パリーン

考える暇なんて与えないぜ

さて、どうしようか……って……。

「よお、化け物」

ロードした直後、僕の四肢は既にサンズによって切り落とされていた。

リスキルは流石に酷いなあ。

まあ愚痴ってもどうにかなる訳じゃ無いけどね。

「ねえ……僕以外にもモンスターを殺し続ける奴は居るだろう？」

「そうだな、だがそいつらはやがてこの世界に興味を失う。それはそれで嫌な話だがその世界には平穩が訪れている」

なるほどね。結局こいつもキャラと同じ事を言いたい訳か。

大丈夫だよサンズ。僕だって彼らと同じだよ。

パリーン

・
・
・
・
・

あれから何回殺されたんだろうね？

彼は今までの怒りや悲しみをぶつける様にそれはもう惨たらしく僕を殺し続けたよ。

もしアズリエルやアズゴア達にここまでやられていたら僕は諦めていたかもね。

いや、それもないか。

僕は既に諦めるなんて選択肢は選べないんだよ。

ブレーキが壊れた暴走機関車なんて言葉がピッタリかもね？

それに……………

漸く奴を殺す手段が見えてきたんだ。

*ロードしました。

さあいつでも——

「おっと！」

「……………良く反応したな」

「あは、適当に跳んだら避けられたよ？」

「適当ねえ……………」

適当に適当なタイミングで後ろに飛び退く。

ちょうどサンズの攻撃がそこに飛び込んでくれれば成功。

来なければ次の機会。

そうして繰り返し返す事に数十万回、途中で警戒して攻撃を仕掛けて来なくなる事も想定してたけど彼はどうしても此処で終わらせようとしている風だった。

あ、そうか。パピルスが居るからか。つまり避難していないって事なんだね？

「あつはは！そういう事か、彼は正に英雄の鏡だね！」

「はっ？いきなり何を……………」

「いやいや、君は本当に弟思いなんだね！」

「てめえ、何が言い——」

隙ありっ！

突然出てきた弟の話題に一瞬だけ動揺を見せたサンプズの間を付いてその骨の身体を切りつけた。

「しまっ……くそっ……野郎が……」

「野郎呼ばわりは失礼だよ？少なくともこの身体にはね？ああそうそう、このまま無念にも散っていく可哀想な君にいい事を教えてあげよ。僕は滅ぼすのはこの世界が最後だよ。それじゃね」

塵に還りながらも殺意を込めた真っ赤な瞳で僕を睨みつけるサンプズを背にスノーフルの橋を越えていく。

愚かにも聡明な彼の事だ、きっと僕の言った言葉の意味を正しく理解したんだろうね。

ま、彼が幾ら理解しようがそれが他のみんなに伝わることも無いし、伝わったとしても何か出来るわけでもないからどうでも良いんだけどね。

それよりも僕は早く彼に会いたいな。

殺されてもなお僕を信じてくれた愛しい英雄。

果たしてこの世界でも彼は変わらずにいてくれるかな？

スノーフル↓ウオーターフェル

スノーフルへ入った僕は目に付いたモンスターを片っ端から塵に変えながら邁進していた。

犬、犬、犬、犬、犬、犬……なんかいつもより犬が多かった気がするけどまあいいか。

そうして僕はやっと彼を見付ける事が出来た。

恐らく隊長に定期報告でもしてたのだろうか、彼はスノーフルとウオーターフェルの境の一本道を歩いていた。

「やあパピルス、元気かい？」

「ニヤ!?俺様は元気だが貴様は何故俺様の名前を知っているんだ!？」

「そんなのパピルスのファンだからに決まってるじゃないか」

「そ、そうかあ……俺様のファンなら仕方ないな！」

突然名前を呼ばれて不自信を抱いたパピルスだったがファンである事を告げると少し照れながらも少し心を許してくれた様だ。

ふふ、相変わらずのパピルスで安心した。

「そうだ！それよりここは今きけんなんだぞ! 『ニンゲンの姿をした危険な奴が居るから皆避難して』って若いアズゴア王が言ったのだ!」

「へえ〜? そうなんだ」

それはいい事を聞いたなあ……。

「ねえパピルス、僕も避難したいんだけど何処行けば良いのかな？」

「なんだとっ!?それを早く言えっ!大丈夫だ、俺様が直ぐに連れてってやるからな!」

パピルスは何も疑うこと無く僕を連れてウオーターフェルへと歩いていった。

このまま避難場所まで行けたら良かったんだけどねえ。

「ところで貴様の名前をまだ聞いていなかった気がするぞ!」

ん、まあ確かに名乗って無いね。

うーん……なんて答えよう。

「フ……いや、キャラって言うんだ」

「そうか！よろしくなキャラ！」

「……よろしくね！」

ま、名前なんて有って無いようなものだし別に良いけど。

「そうだキャラ！お前はニンゲンがどんな姿をしているか知っているか？」

「知ってるよ」

「ほんとかつ!? 一体どんな姿なんだ！」

「こんな姿」

僕は親指を自身に立てて自己アピールしてみせた。

「……ううむう、ニンゲンはそういうポーズを取ってるのか……」

どうやらパピルスには伝わらなかったみたいだ。

けど、もう一人にはちやんと伝わったしいつか。

「遂に正体を現したかニンゲン！」

上から声が聞こえてくると蒼い槍が僕のいた場所へ突き刺さるのはほぼ同時であった。

「隊長っ!？」

「はは、ウォーターフェルに入った時から殺気が駄々漏れだったよ」

後ろに飛び退いた事で難を逃れた僕は正面へ降りてきた甲冑姿のアンダインは僕へ槍の先端を向けている。

しかし間に割り込むパピルスのせいで手が出せないようだ。

「どけっパピルス！そいつがアズリエル王子が言っていたニンゲンだ！」

「ニエエツ!?でもあいつは避難したいって言ってたし………それに俺様のファンだって」

パピルスは僕の反応を気にするようにチラチラとこっちを見ている。

ああもう本当に愛しいなあパピルス。

僕を最期まで信じ続けてくれたのなんて君を置いて他には居ないよ。

せめてこれ以上君が苦しまない様に。

歪んでしまわない様に。

僕に失望してしまう前に。

終わらせてあげるよ。

.....ちっ。

「邪魔しないで欲しいんだけど?」

「あ.....アンダインツ!」

振り下ろされた凶刃はパピルスではなくアンダインを切り裂いた。

またこのパターンか。

いや、アンダインの行動パターンを考えれば当然かな。

ふう.....。

「グガア!逃げろパピルスツ!!」

今度こそ終わらせようと振り下ろしたナイフも再びアンダインがその身を呈して受け止めた。

「あのねえ、温厚な僕も流石に怒るよ?」

「黙れっ!ニンゲン風情に大事な部下も大切な友人も殺らせはしない!」

「アンダイン!早く傷を治さないと!!」

「良いから行け!貴様がいると足手まといだ!」

アンダインに言われて狼狽えていたパピルスだったがやがて意を決して奥の方へと走り去ってしまった。

ああ、僕の愛しい英雄を.....唯一人僕を信じてくれていた優しい英雄が.....はあ。

「.....ありがとうアンダイン」

「なに?」

「これで僕は心置きなく世界を滅ぼせる」

「はっ……くくくっ……ぬああああああっっ!!させ
るかあっ!例え神が許そうともこの私が絶対に赦さん!!」

そう言いながらもその身体は徐々に塵へと姿を変えている。

だが、次の展開が分かかってしまっている僕はおもちゃのナイフを構え直す。

「アルフィー……パピルス……私は絶対にこいつを殺してみせる!
ぜったいになああああああっ!!!」

塵と化していた身体は僕を殺す決意によつて輝きだしその姿を変えた。

「覚悟しろ!貴様の命は此処で終わりだ!」

アンダインは勇者へとその姿を変貌させた。

……ただ、それだけだ。

僕はよく知った攻撃を軽く受け止め、アンダインを切りつけた。

「ぐあ……ば、馬鹿な……」

「当然だろう?こっちは死ぬほどお前に殺されてるしその数万倍もお前
を殺してるんだからさ」

「くっ……だ……がな……この戦いを見ているアルフィーが……今頃
お前が見つけられない所へ皆を避難させている筈だ」

僕はその言葉に反応せず先へと歩き出す。

ふふ、そんな場所は一つしかないじゃないか。

僕を舐めないで欲しいな。

さて、次に進む場所は決まったね。

行こうか。ホットランドの真研究所へ。

ホットランド↓ラボ↓真研究所

流石に全員避難してるかと思いつつホットランドへ入ると驚いた事に王国騎士団の二人がラボの入口に立ち塞がっていた。

「02！アレが隊長を殺りやがったニンゲンじゃないか！」

「仇は取らせて貰う」

二人が何か言ってるけれど僕には関係ないね。

それにしてもこんな所で待ってるなんてこの先に避難させているって教えてるようなものじゃないか。

「馬鹿だなあ君達は」

「なにい！お前だけは赦さないぞニンゲン!!」

「01！挑発に乗る……なっ……!?!」

挑発？そんな事しなくても君達の首くらいこうやって正面から落とせるんだけどなあ。

「02？ゼロッ……ッ……!?!」

胴体と頭が別れを告げた02の姿に言葉を01は言葉を失っていた。

といつても実際にはその直後には01の首も自由落下しているからショックを受ける暇も無かったと思うけどね。

僕はこれでも結構焦っているんだからね？

本当なら直ぐにでもアズリエルを止めないといけないし、本来のこの時間軸の骨とか白い卵顔の人とかも始末しておきたいんだから油売ってる場合じゃないんだよね。

それに……パピルスも殺してあげなきゃいけないしね？

だけど邪魔は何時までも続くんだよね。

当然と言われてしまえばそれまでなんだけれど。

「やあ、君はこの時代には既に完成していたんだね？」

ラボに入って直ぐ目の前に立ち塞がったのは四角い超合金の身体に一つの車輪で器用にバランスを取る厄介な機械、メタトンだった。

「どうやら君はこの僕を知っている様だね？とはいえ、未来のフアンって感じもしないね？」

「その通りだよメタトン。僕はパピルスのファンだから君のファンになる事はない。そして君の夢を潰す者だよ」

おもちゃのナイフを構えてニッコリと笑みを作る。

「ふっ、そんな物で私の身体を壊せると思ってるとは。オツムはあんまりよろしく無いようだね」

「あはっ、そう思うなら受けてみたらいいさ」

僕はおもちゃのナイフをメタトンの超合金ボディの僅か下目掛けで振り下ろす。

しかしメタトンはすんでのところで後ろに下がって回避した。

「あれ？やっぱり当たったら壊れるのかい？」

勿論普通に当てただけでは壊す事はまず出来ないことはしっているが一応挑発してみた。

「ふ、やっぱりオツムは良くないようだね？当たらない武器を幾ら振り回した所で僕は壊せないって言ってるんだよ。まあ？例え当たった所で問題ないけどね！」

まあ挑発は失敗だよな。

確かに当てられなければ意味は無いし、超合金をおもちゃのナイフで切り裂く事は流石に出来ない。

だから狙いは一つしかない。

それをあのロボットは気付いているんだろうね。

僕は一足飛びで斬り掛かるもメタトンは緩急自在な動きで悠々と避けて行く。

「はっはっは！好きに動いて構わないよ！僕は君が疲れた所を捕まえるだけだからね？」

ふう、あまり体力を使うのは良くなさそうだ。

彼は今僕を殺すのではなく捕まえるって言ってたからね。

超合金の檻に閉じ込められてしまえば流石の僕もリセットせざるを得ない。

ん？別にそんな事ないか。

けどなあ……最後のセーブ地点が例のサンズを殺す前なのがなあ。

また十万単位で殺されるのを覚悟しなきゃ行けないのは流石に心

が折れそうだなあ。

だからやつぱり捕まる訳には行かないね！

「はあ……はあっ……当たらない……ものだね」

それから十数回程ナイフで切りつけようとするも一度たりとも刃が彼の身体に触れる事は無かった。

「そろそろファイナーレの様だね？」

僕は息を切らせる……フリをしながらメタトンが近付いてくるのを待った。

そして彼の手が僕を捕まえようと伸ばした時、僕は最上の笑顔で呟いた。

「やあ、アルフィー」

「なっ！アルフィー！来るなって言ったじゃ……いい」

「なんてねっ」

僕の言葉に反応して直ぐ様振り向いたメタトン。

そんな彼の足元の車輪へとおもちゃのナイフを突き立てた。

「なんて……なんて醜い！憐れだな、君の生き方には同情すら覚えるよ！」

車輪が壊れなす術もなくひっくり返ったメタトンの両腕を切断する。

色々と喚いているようだけど僕は気に留めずにメタトンを解体し始める。

「君の本体はゴーストだから殺せないけどこの身体は解体させてもらうよ」

「君はロクな生き方をしないだろうね！因果応報って奴だよ」

「……それは君達にも言える事じゃないかな？よしっ、解体完了っ」とこれ位ならアルフィーが直せば直ぐに元通りだろうけどね。

ま、直しに来れるならね？

メタトンを十二分に解体した僕はラボ内にあるエレベーターへと入って行った。

警告だかケーブル強度がどうか言ってたけど無事に真研究所に辿り着いた僕を待っていたのは部屋一面に張り巡らされた蜘蛛の巣だった。

「これじゃ進み辛いなあ」

僕は巣を切り開きながら進んでいると目の前に手と目の数が異様に多い紫色の少女がでかい蜘蛛の上に立っていた。

「あなたが暴れ回ってる迷惑なニンゲンね！商売が出来なくて迷惑なのよー！」

ええと、マチエツトだかハチエツトとか言ったかな？

まあどちらにしる唯のモンスターだから気にすることも無いね。

「ちよつとあなた聞いて——」

僕はぺちやくちや騒がしかった蜘蛛のモンスターを下にいたデカイ蜘蛛ごと縦に切り裂いた。

そのまま塵になったので塵が諸に顔に掛かってしまった。

「うへえ、どっかで顔洗いたいなあ」

僕は洗面所を探しつつ奥へと進んで行った。

真研究所 ♪ ???

*さいごのかいろう

僕を散々殺し尽くした骨が途方も無く塵となった場所。

本来なら真研究所から直接来れる筈の無い場所だ。

けれど幸いな事にそんな理不尽を行える存在に心当たりがある。

「君が研究所から連れ出したのかな？ サンズ」

僕は目の前の骨に対して声を掛ける。

だがそいつは僕が言った事を理解していないのか訝しげな表情を見せる。

「？……おまえ、サイアクな めにあわさりたいか？」

ははは、親の話くらい聞いた台詞だけど此処でも聴けるなんてね。

「それいじょうちかづくくと、こころのそこからこうかいすることになるぜ？」

よし、折角だから付き合って上げよう！

僕は何も言わずに一步踏み出す。

「仕方ないな……ごめんよおばさん。だからやくそくはきらいなんだ」

さて、もういいかな。

君の必殺技とやらは充分見飽きてるんだ。

「きようはすてきな日だ。はながさいてる。ことりたちもささえずつてる。こんな日にはおまえみたいなのやつ……!!？」

僕はほんもののナイフをサンズへと振り抜いた。

しかしサンズは辛くもその一振りを避けた。

「おっと、おまえさんも出し惜しみしないんだな」

「まあね？ 直ぐに殺せるならそれに越した事はないでしょ？」

そんな事より僕のLOVEが19になつてのが気になるね。

サンズの能力？ それとも仕掛けは回廊の方かな？

ま、目の前の骨だけならそれでも問題ないんだけど……このままじゃあ世界を滅ぼすのに支障が出るかも知れないから早い所何かしないかね。

「さつさと始めようか」

「へっ、そうだな。じゃあ……」

「さいあくなじかんをすごそうか（ぜ）」

懐かしいなあ、重力操作からの骨の連続攻撃。

僕のナイフを避けつつ青い骨と白い骨の波状攻撃。

再びナイフを避けながら距離をとり前後からのブラスターによる攻撃。

そしてサンズはいつもの様に和解を打診する……振りをしてきた。

「なあ、もう辞めにしないか？」

僕は彼の話に一切耳を貸さずにナイフを振り下ろす。

それをサンズは当然の様に避ける。

「へへ……そんな気はしてたぜ」

「そうだね、君なんかとは友達じゃないからね」

「はっ、そうか。それならなっとくだ」

サンズはそう言つて僕を壁に叩きつけて背後から骨を生やす。

僕はサンズに対して貼り付けた笑みを絶やさずに易々と避けた。

その後もショートカットやら重力操作による叩きつけを多用しながら僕を何とか殺そうと試みるも全ては徒労に終わった。

「このこうげきをのりきつたらオレのスペシャルこうげきがさくれつするからな」

そう言々とサンズは僕を壁に叩き付けて何度も骨に突き刺そうとしてくる。

僕がそれをタイミング良く飛び跳ねていると突如前後から骨が無数に現れる。

それを左右に避けていると今度は僕を遙か後方に吹き飛ばした。

「ははっ、これもいつも通りだね！」

無数に飛び出してくる骨を勝手知ったる我が家を徘徊する様に回

避しながら壁に着地すると直ぐ様その場を飛び上がって壁から生えてくる骨を避けた。

それでも彼は諦めずにショートカットと重力操作と骨を併用して僕を串刺しにしようとする躍起になっているみたいだ。

けれどそれすらも僕の身体に触れる事は無く、サンズは最後にありったけのガスターブラスターを全方位から放つ。

因みにアレって放つ順番を適当にするだけでもっと苦労すると思うのは僕だけかな？

まるで最後まで手加減をしているような、ね？

って言ってもそんな事僕には関係ないけれどね。

「さてと、スペシャルこうげきなんて無いんだよね？」

サンズは一瞬苦虫を噛み潰したような表情を見せるが、直ぐに理解したらしく答えを返してくる。

「なんだ、しつてたのか？つうことは一度はあきらめたのにまたやってきたってことだ」

そんな事は全然無いんだけど、どうせ最期なんだし水を差す事も無いかな？

「そうだね。君と話をしたかったからかな？」

「オレと？へっ、トモダチでもねえおまえとなにをはなそうっていうんだ？」

僕はこのサンズとのここまでのやり取りの中である事に気が付き始めていた。

なのでその推察を確信に変える為に一つだけ質問を投げ掛けた。

「ねえサンズ。君はパピルスの最期を憶えているかい？」

僕の問いにサンズはあからさまな殺意を向けてきた。

「おまえ、ほんとうにクソったれだな」

あはは、やっぱり僕の思った通りだ。

これが解れば後は簡単だ。

僕はそれから暫く静かにしていると疲労が限界を迎えたサンズが眠り始めた。

そうしてみんなが知ってる通りの結末にて僕はサンズの最期を看

取った。

そして僕はその次の瞬間には『さいごのかいろう』の入口に立たされていた。

やっぱりね。

最終確認を終えて僕はおもむろに目の前の扉に決意を込めてナイフを突き立てた。

*

君は余りに危険だ

？
周囲を見渡してみたけど此処は間違いなく真研究所のようだね

とはいえ、本当に元の世界かは定かじやないけどね？

兎に角元の世界だと仮定しつつ進むとしようか。

と、その時背後から呼び掛けられる様な声が聞こえたので振り返るとそこには白いお面の様な顔のレアモンスターが立っていた。

残念だ。間違いない。君は戻って来ているよ。

「ん？やあガスター！何言ってるかさっぱりだけど余り良くは思われていないようだね？」

失礼……んんっ、初めまして。とはいえ君は私の事を

知っているし私も君の事を知っているから自己紹介は不要かな？」

へえ？僕を知っているって？それはそれは……とても興味深いね。

「君はコアに飛び込んだんじゃないの？」

「ふむ、その質問の意味は図りかねるね」

天才科学者、かあ……噂通り一筋縄じゃいかなそうだ。

僕はガスターの様子を窺いながらおもちゃのナイフを構えるが彼は身構えるような素振りは見せなかった。

「君は何の為にこんな所までやって来たのかな？私は君の目的を知りたい」

ガスターは僕に話し掛けながらゆっくりと近付いてくる。

言葉からは彼が何処の存在かを探るのは出来ないだろう。

ただ、僕の事を知ったうえでこの余裕にはきつと意味があるはず。

考えられる事としては三つ。

キャラと同じく同一体としてこの世界に存在しているか。

それか観測者となった後のここまでの全てを知っている存在か。

もしくはこの世界でも既にコアに飛び込んだ後の存在。

それ以外であれば武器を構えた僕を前にして身構えないなんて考えにくい。

そこまでの考えに至った僕はそつとナイフを持つ腕を下げた。

「僕が此処に来た理由かい？それは皆をこの手で終わらせてあげたいから、かな？」

「そうか……何故かを聞いても？」

「理由は単純だよ。僕は皆が大切だからさ。大切だから殺すんだ」

「ふうむ、何か解るかと思っただがさっぱりだったよ。けどね、君の意思を否定をする気は無い……私も私の意志で君を止める事にしたからね」

直後数え切れない程のガスタープラスターが僕を囲む様に現れた。

「生憎だが、私は彼らの様な優しさは持ち合わせて居ないんだ」

そうして隙間なくドーム状に敷き詰められたガスタープラスターは余すこと無くレーザーを放った。

優しいねえ？記憶に無いだけで彼らが殺してきた人間はそれこそ僕が皆を殺してきた以上だって言うのに面白いよね？

でも実際僕も同意見なんだ。

モンスター達の中では人間は赦されざる悪だ。

あんな狭い世界に閉じ込め、更には王様の息子まで殺されているんだ。

お互いの事情？そんな事はどうでもいいんだ。

要はそれだけ憎い筈の人間が自分達の領域にまで入って来たんだよ？

殺そうと考えたって決して異常じゃないと思わないかい？

でもモンスター達は確実に殺せる手段は取らなかった。

さっきの戦いで思い出したけどあんな状況のサンズでさえ避けられる攻撃しかして来なかったんだ。

だから僕はそんな皆が大切なんだ。

……当然友達になりたくない奴はいるけどね？

さて、暇潰しにはなったかな？

そろそろレーザーが終わる頃だね。

どういう事かって？

簡単な話しさ、避けようが無いから避けなかっただけだよ。

まあ耐えられるかどうかは掛けだったけど彼のLOVEはそこまで高くないと思っただけからね。

全く疲れること無く延々と放ち続けられたらどうにもならなかったけど良かった良かった。

「はあっ……はあっ……もう、少し……身体を動かしておくべき……だったか、な」

「そうだね、LOVEが20くらいだったら死んでるけど、今の僕を殺すには程遠いね」

無邪気に笑いながら僕は膝？を着くガスターにゆっくりと近付く。

「折角話が出来たんだ。最期に言いたい事があるなら聞くよ？」

「は……は……なら今後の研究の為に……その決意を……私に刻み付けて……くれ」

「ははっ！正に科学者の鏡だね。いいよ、今後の研究の参考になる事を祈ってるよ」

僕は期待に応える様にガスターの身体に決意を込めた一撃を刻んだ。

* 良 い 取 獲 だ っ た よ

ん？今なにか聞こえたような………まあいつか！

僕は避難したモンスター達を殺す為に再び足を進めるのだった。

真研究所↓さいごのかいろう

いやあまいった。随分長い事さまよってしまったよ。

まさか今まで行く事が出来なかった場所に避難しているなんて。アンダインが僕には見付けられないと言っていたのも納得だよ。まあでもこうして無事に見つけた訳だし万事解決ってね！

僕は中に入って直ぐ辺りを見回すとそこには様々なモンスター達が一様に脅えた視線を向けてきていた。

けど、幸か不幸かそこにはパピルスの姿は無かった。

「そんなに怖がらなくても良いじゃないか。皆一緒に殺してあげるよ」

「ね、ねえ……どうしてアナタは私達を執拗なまでに殺そうとする……の?」

モンスター達を庇うように前に出てきてそう行ってきたのは恐竜の様な見た目に白衣を身にまとったモンスター、アルフィーだった。

「それはガスターに伝えたけどやっぱり理解はしてくれなかったんだよねえ」

「えっ……?ガスター博士に!?えと……じゃあ……ま、まさか……もしかして……」

彼女は僕の事を監視してるんじゃない……ああ、ガスターが何かを隠そうとしてたのかな?

僕には別段隠す事なんて無いから代わりにちゃんと教えてあげよう。

「勿論、彼ならもう居ないよ。ついでに君の自慢のロボットも邪魔してきたからラボでバラバラになってるよ」

「そ……そんな……博士とメタトンが……」

多分メタトンを直しに行こうとしたんだろうね。

咄嗟に歩き出すアルフィーへ僕はおもちゃのナイフを突き付けて止まるように促した。

「ままままっつてっ!あ、あなたの目的は本当に皆をころさなければいけないものなの!?!」

僕はアルフィーに尋ねられて少しだけ考える。

僕のLOVEは今より上がる事は無いし、地上に出る為に必要なソウルは最初にアズゴアから手に入れている。

後は地上に出て人間のソウルを六つ集めれば世界は壊せるはず。

「そうだね、君の言う通り世界を壊すだけならこれ以上モンスターを殺す必要はないね」

「じ、じゃあ……」

「でもそれじゃあ君達が可哀想だ」

「……え？」

「世界を壊すって言ったって直ぐに壊れるのか段々と壊れるのか、君達が死ぬかどうかさえ分からないんだ。最悪君達は死ぬ事が出来ないまま崩壊した世界を漂い続ける事になるかも知れない。それじゃあ僕の願いとしては不十分なんだよ」

僕が世界を壊すのはあくまでも目的を完遂する為の最終工程に過ぎないのさ。

じゃあいままで壊した世界はどうなんだって？

なにを言ってるんだい？

僕が世界を壊した事なんて一度たりともないよ？

ま、信じるも信じないも勝手だけだね。

「とにかく僕は僕の決意の元に動いてるんだ。どうしても止めたければ君の決意で止めてみるといい」

「……そう………そう、よね」

アルフィーは止められないと諦めたのかそれ以降黙ったまま動き出す様子は無かった。

だったら早く殺してあげよう。

そう考えナイフを一度引いてから勢いを付けて振り下ろそうとしたその時、僕の身体中を青いレーザーが通り抜ける。

「おっと」

僕は反射的に動きを止めるが、どうやらそれは愚策だったらしい。続けて僕を囲うように橙色のレーザーが照射される。

「残念だけど……私じゃアナタを説得出来ないみたい……なら……」

今皆を護れるのは……私しか居ない……！」

そうして彼女は決意を抱き橙色のレーザーを収束させていく。

「うくん、動けば腕や足が焼かれる。動かなくても何れ焼かれるのか」

「ええそうよっ！アナタは絶対に逃げられないわー！」

確かにダメージは避けられないかな。

だけど惜しい事にガスターの時と同じで僕を殺すだけの力は無い。

「はは、こんなんで足止めを出来ると思ってるなんて……此処に至るまで僕を見てきたにしては甘過ぎないかい？」

僕は青色レーザーに当たったままの腕を動かす。

動き始めた腕をジリジリと焼いていくも僕はそれを気にも留めずにアルファイへナイフを振り下ろした。

アルファイの身体は大きく切り裂かれ、大きく仰け反った後苦しうに膝を着いた。

「はあっ……は……あ……充分……よ……間に合った……わ」

「へえ？二、三分稼いだ位で何が変わるんだい？」

「変わる……わ……メタトンっ！」

アルファイが塵となりながらも叫んだその直後、僕の身体を激しい光が包み込んだ。

予想以上ダメージを受けた僕は直ぐさま後方へと飛び退いた。

「へえ、これは予想外だ。一体どうなっているのかな？」

僕は目の前に立ち塞がる高身長羽が生えた機械、メタトンNEOへ声を掛けた。

「アルファイのおかげさ。彼女は僕の中枢部に遠隔で起動出来る変形機構を用意しておいてくれてたんだ」

そうか、僕を足止めたのはそれを起動させる為だったのか。

僕は得心しつつ既に大部分が塵と化した彼女を見やった。

「彼女には返し切れない恩がある。だから彼女の恩に報いる為にも、君を殺し彼らを護る！」

メタトンは僕を殺す決意を抱き右腕のキャノンを構えた。

それを見て僕は疲れた風に溜息を吐いた。

「どうしたんだい？この姿を前に流石の君も恐れをなしたのかな？」

「いや、どうせ君を壊しても君は殺せないんだろう？幽霊君」

「……っ！はは、君は一体何処まで僕の事を知っているんだい？気に入らないねっ」

どうやら僕の発言は癪に障ったらしく、メタトンは僕の後ろに回り込みつつ右腕のキャノンからレーザーを放つ！

はあ、そんな直線的な攻撃が僕に何度も当たる筈が無いじゃないか。

「確かに君は強いんだろう。人間なら手も足も出ない位にね」

「勿論さ！その為の姿なんだからね！」

けど、殆どのモンスターから人間として認識されなくなった僕を止める事は出来ないんだよ。

メタトンのレーザーをしゃがむ事で避け、低姿勢のまま懐に飛び込みおもちやのナイフで斬りつける。

「ぐっ……君は……そこまでして……」

「ああそうさ、僕の決意は揺らがないよ。だがそれは君の力不足なんかじゃない。僕だって伊達や酔狂でここまで来たんじゃないって事さ」

そう、僕以外に僕を止められる奴なんて存在しないのさ！

「それじゃあ、死ねない君には済まないが他の皆を殺るとするかな」

「や、やめ……ろ……！」

悲壮感漂う表情で僕を見つめるメタトンを尻目に僕は避難しているモンスター達にナイフを向ける。

「や、やめろ！皆には指一本触れさせねえぞ！」

僕は全身を震わせつつ立ち塞がるモンスターの子供を斬り付けた後、改めて奥のモンスター達に目をやり笑顔で伝えた。

「じゃあ、さようなら」

真研究所を後にした僕は結界に行く途中にある『ほんものナイフ』と『ハートのロケット』を装備してさいごのかいろうまで来た。た。

「あく、またいるんだよなあ」

僕はこの先に居るであろう存在を思い起こし溜息を吐いた。

ただ……彼が既に接触してる可能性もあるしパピルスがこの先にいる様な気がする。

何が起るか解らないし警戒はしておこうか。

*僕はこの先に起るであろう事を考え決意を抱いた。

これでよし。

決意を固めてさいごのかいろうを進み始める事数分、そろそろ来るだろうと考えていると突然上から骨が降り注いだ。

「おっと危な……いい!」

慌てて飛び退こうと足に力を入れた直後、重力が反転した。

足を取られつつも何とか身体を捻って何とか骨を回避する事で僅かに右腕に掠る程度ですんだ。

「つ……あ……れ?ぐふつ……ごほつ……な!」

だが右腕に一発掠っただけで僕のソウルがみるみる内に削られて行くのを感じた。

うっ……ぐう……あ……そ、そうか。

サンズの攻撃に付加される『業の報い』……だったかな?

対象の業に比例してソウルを削る能力か、そりゃあ僕には痛いわけだ。

「よお、オマエはいったいなにものだ?」

柱の影から姿を表したサンズが話し掛けながら僕の身体を床に叩き付ける、と同時に胴体を無数の青い骨で貫いた。

「ぐっ……ふふ、君もこの程度で僕の動きを止められると思ってるのかな?」

僕は肉体とソウルを削られながらも半ば無理矢理に立ち上がり手足から血液が噴き出すのも構わずにナイフを手にサンズへ飛び掛る。

「ぐっ……ははははあー！じゃあ……」

「あ、れ？」

次の瞬間にはさつきと同じ体勢で床に寝そべり青い骨に貫かれていた。

「はっ、オレのことをしってるわりにはあんがいぬけてんな？」

サンズに言われて僕は漸く答えに思い至った。

そう言えばショートカットでそんな使い方をしたっけな。

僕とした事がこれは確かに抜けてたね。

うーん、そう何度も同じ事が出来る程の体力はないかあ。

まあいつか、今回もサンズは本気じゃなさそうだし次はどうかなるでしょ。

「おい、はなしがきこえないのか？」

「聞こえてるよ？ただいきなり攻撃してくる様なモンスターと話す事は無いと思ってね」

「そりやわるかったな、とでも言うと思ってんのか？テメエがしてきた事を考えりやこれでも抑えてる方なんだぜ？」

ま、ごもつともではあるけどね。

ただ弟や皆が殺されるまで何もしようとして来なかった君に責められる筋合いは無いと思うな？

「やっぱり君は好きになれないな」

「キグウだな、オレもだ」

約束があるから動けない、変わる事を信じたから見守った、倒せる状態じゃないから前に出ない、何度やつても無^リかつた事^トにされるから助けても仕方ない。

そんな口上で変える事を諦める程度の決意で他人の心を動かさうとする奴なんて好きになれるはずがないし、好いてもらおうとも思わないよ。

僕は再度立ち上がり青い骨で身体とソウルを削り切った。

「また会おうか、サンズ」

「てめ、させるかっ！」

サンズが再び僕を元の位置に戻そうとするがもう遅い。

その前に青い骨が僕のソウルを砕いた。

パリーン

さっさとこのかいろう

次は避けられる。

最初はそうやって楽観的に考えていた。

だがサンズは僕が動きをいくら変えようが青い骨を僕に突き刺すといつもの結果へと収束していった。

ショートカットの能力による物かとも考えたがそこまで途切れた様な感じはしなかったからそういう事でも無いらしい。

だが僕がどう避けようと同じように重力を反転させて天井から床へと叩き付けられ床から生える青い骨に突き刺さる。

例え着地しようと避けようとする前に生えてきて動きを封じられる。

そうして十回程殺された辺りで僕は察した。

サンズの中の諦念が微塵も感じられない事を。

いつものサンズにはどんなに殺意を抱いていようとその中に僅かな諦めがあつてそれが攻撃の甘さに繋がっていた。

それは屑の方であっても同様だった。

だが今の彼はまだ絶望仕切る前、そして僕の悪い予想が当たっていればガスターがまだ生きている。

つまり奴から全て聞かされた上で此処に立っている。

……弟を護る為に。

「なるほどな、オマエのうごきをみてるとどうやら事実みたいだな」

「は……はは……僕は君が知っているサンズとは別骨過ぎて驚いているよ」

この頃のサンズならきつとパピルスを守る為に動いたんだろうな。

「そうだな、此処とは別の未来のオレには同情するぜ。だからオレがそいつらの代わりにテメエに引導を渡してやるよ」

はは、それは楽しみだ。

僕の決意の固さを見せてあげるよ、骨っ子。

く1000回目く

状況は依然変わらない。

パターンなんて存在しない上にかなりの物量で多少の動きの変化をカバーしている。

パリーン

く1,000回目く

今度はやり口を変えてみた。

柱の陰に隠れながらサンズに近付く。

いなければ戦う場所が変わるだけだが居れば不意を付けるかもしれない。

「よおクソガキ、気付かれねえとでも思ったか？」

パリーン

く100,000回目く

柱からの奇襲自体は出来なかったものの、少しだけ攻撃パターンが変わった。

簡単に言うとう天井から床への叩き付け後串刺しだったのが壁から床の叩き付け後串刺しに変わった。

此処から活路が見いだせるかも知れない。

パリーン

く500,000回目く

うーん、叩き付ける方向が変わっただけじゃ難しいかなあ。

何処からなら切り崩せるかなあ。

パリーン

く800,000回目く

色々試してみた。

初手でナイフを投げつけて見てもサンズが躲した以外は変わらなかった。

笑顔で武器を持たずに近寄ってみただけど躊躇いなく叩き付けられそのまま串刺しになった。

油断させる為に『こうどう』してみてもサンズは聞く耳を貸さなかった。

パピルスのセリフを真似てみたら普通に串刺しまで持っていかけた後物凄い量の骨によって粉々にされた。

他にも色々やったけどどれもサンズの行動を大きく変える事は出来なかったよ。

強いていえばパピルスの真似くらいかな。

でももうちょつと探してみよう。

パリーン

く1,000,000回目く

彼女の尊厳に関わるから今まで避けてきたけどサンズの反応が気になったのでちよつと試してみる事にした。

やっぱ好奇心には勝てないよね？

僕はロード地点に立ち自らのシヤツの裾を両手で掴むとインナーごと思いつき持ち上げて勢いに任せて脱ぎ捨てた。

彼女の為にも詳しくは言わないけど子供らしいツルンでペタンでお腹が僅かにぽっこりとした一部の方々の決意が漲るような体つきだったとだけ記しておこう。

「なあっ!?ばかっ、クソガキてめ、何やってやかんだああ!？」

おお、あのサンズが明らかに狼狽えてるね。

どうやらブラコンなだけでホ○では無かったようだ。

まあこんな子供の身体で狼狽えるなんてそれはそれでアウトだと思うけどねえ？

しかしチャンスだ、サンズは僕を視界に入れないようにかガスターブラスターを放ってきた。

見ないようにしてるせいで重力操作もされてないみたいだ！

行けると思いガスターブラスターを避けて一気に突っ込んだ。

しかしナイフが届くか届かないかの所で骨に貫かれその直後にガスターブラスターによって肉体は跡形もなく消しさられてしまった。
パリーン

く1, 000, 001回目ロード中く

*次同じ手を使ったらサンズに殺される直前でセーブしてやるかなっ！わかったか？

え？それだと――

*わ・か・つ・た・な？

あはは、本気だよこの子。

わかったよ、もうしないから。

*ならばいい。

ふう、おかしいなあ？

ロード中とはいえまさか彼女の方から干渉出来るなんてなあ。

……まいった、力が強まって来てる様だね。

く1, 000, 001回目く

ま、さっきの手が封じられちゃったからね。

此処からもう少し攻略に時間がかかるかもね？

パリーン

く2, 000, 000回目く

あれ以降パピルスの真似でサンズに揺さぶりを掛けてるけど進展は遅々としたものだね。

あつちで続けてればきつと10, 000回もしない内に殺せてたと思ふのになあ。

まあその前に完全に詰んでしまうから試せない訳だけど。

彼女も何だかんだで僕に並んで理不尽な存在だからね。

だから僕は最適を捨てて殺らざるを得ない訳さ。

……それでも、見えてきてない訳じゃ無いけどね。

パリーン

く3, 000, 000回目く

はは、人間やれば出来るものだね。

遂に僕はパピルスの声真似をキャラの声帯で九割再現する事に成功した。

いくらブラコンで有名なサンズと言えど一瞬位は騙されるはずだ。

「サアアアンズ!!」

「……ちっ、何のつもりだ」

パリーン

く4, 000, 000回目く

今度は柱の陰からサンズに呼び掛けてみたんだ。

もちろんパピルスの声真似でね？

「兄ちゃん！ニンゲンが後ろに！」

「……後ろ？いつの間に！」

よし、今しかない！

僕は柱から飛び出して音も立てずにサンズへ飛び掛ろうとする……が。

「うぐっ!?ぐ、がはっ！」

「バカかテメエ？オレがアイツの声とテメエの猿真似をを聞き間違えるかよ」

くっ、流石はブラコンモンスターと呼ばれるだけはあるね。

アンダインなら三時間はそのまま話せる自信はあったんだけどな。

「テメエが幾らアイツの真似をしようが無駄だ、諦めるんだな」

パリーン

く4, 444, 444回目く

準備は万端だ。

ロードを終えた僕は一直線に回廊を走り抜けたそしてサンズか骨を降らしてくるであろう地点まで進む。

記憶通りに骨が降り注ぐのを確認してから後ろへ下がろうと左足を半歩下げる。

するとそのタイミングでサンズの重力操作が僕を天井へと引つ張った。

僕がここで近付いてくる骨を全て躲しきった所で今度は床に叩き付けられる。

それを上手く足から着地するタイミングで全身を貫く様に無数青い骨が伸びてくる。

そうしていつもの一步も動けない状況が完成した。
さて、此処からが本番さ。

僕は着地した体勢から青い骨に腕や足の肉を削られつつもサンズへ突っ込んでいく。

サンズはすかさずショートカットを使おうとするがその直前、サンズに聞こえるようにパピルスの声真似で話した。

「兄ちゃん、どうしてアンダイン達を見殺しにしたんだ!」
「なっ!?……ちっ、やかましい!」

サンズは表情を歪ませながらショートカットではなく白い骨を無数に飛ばしてきた。

僕はそれを躲しながら言葉を続ける。

「兄ちゃんならアンダインもアルファイも助けられたらどう?」

「やめろクソガキ! その声で喋るんじゃねえっ!!!」

サンズは喚きながら幾つものガスターブラスターを僕を目掛けて一斉射してきた。

だけどそれはこの状況で一番取ってはいけない手段だ。

僕は被弾覚悟で光の中を突き進む様に駆けて行った。

その為サンズからは僕の姿が一切見えなくなった。

僕はそこに止めの一言^{一撃}を以て突き刺した。

「この怠け骨め」

「ち、ちがう! オレは……怠けてたんじゃ……ちがう……オレのせいじゃ……ちがっ……ぐう!」

「大丈夫だよ、僕は君を仲間外れにはしない。君だけ生きる事もパピ

ルスだけ生きる事も無い、僕は君達に平等な終わりを与えてあげよ」

ガスターブラスターを突っ切った僕はそう言いながらそのままの勢いでサンズの身体を貫いた。

「く……そつ、やっぱ未来だろうが別世界だろうがオレはオレか。オマエを止める事は出来ないみたいだ……なんたってオイラ、骨の髄まで怠け者みたい……だから……な」

「ふふ、そうだね……でももう大丈夫だから。安心しておやすみ」
さよなら僕の嫌いなモンスター。

けど君のパピルスに対する想いだけは純粹で好きだったよ。

僕はサンズの最期を見届ける事無くさいごのかいろうを後にしたのであった。

謁見の間

さいごのかいろうを抜けた僕はアズゴア亡き謁見の間に続く扉へと辿り着いた。

何の気なしに物々しい扉を開いた僕はその光景に目を奪われていた。

本来ならモンスター大王がいる場所でモンスター大王がするかのようには花に水をやっていた僕の英雄の姿を前に、僕は何も言葉に出来ないまま近付いた。

草花を踏みしめる足音に気が付いた彼はじょうろで水を撒くことを辞め、優しくも悲しげな口調で語り掛けてきた。

「ニヤ……ニンゲンか？よく来たな……待っていたぞ」

「パピルス……」

「丁度水やりが終わった所なんだ……ニンゲンが此処に来たのは結界を抜ける為と……俺様達の為なんだって？」

僕は彼の問いに無言で頷く。

彼はその答えに対して困った様にニヤハハと笑って言った。

「お前はとってもいい奴だ……だから一人で何でも解決しようとするんだな？」

「え……？」

僕は言ってる意味が解らずに自然と声が漏れてしまった。

そんな僕の様子を見ていたパピルスはゆっくりと瞬きを一度だけすると、先程までの優しさは身を潜め彼は自身の身長位ある長大な骨を手にして構えを取った。

「俺様は怒っているのだ、だから貴様にはお仕置きをしなければならぬ……」

その言葉の通りに彼はとても憤慨している様だった。

僕は初めてみる彼の感情に理解が追いつかず思わず後ずさった。

その直後、パピルスが手に持った骨を槍のように使い僕を突き飛ばした。

「ぐっ……はあっ!?!な……なんで……？」

「ニンゲンっ、俺様は怒ってるって言っただろ？」

怒ってる……？はは……解ってたじゃないか。

アズゴアを殺し、多くのモンスターを殺した。

更には彼の目の前でアンダインを切りつけ、ガスターやアルフィーを殺した。

そして……サンズを殺した。

パピルスが何処まで知ってるか解らないけど、僕を恨む理由は充分だ。

あの時アンダインに邪魔された時から解っていた筈なのに。

いざ面と向かって敵対されるとやっぱり堪えるなあ。

「どうした、立てっ！ニンゲンっ！立たないならこっちから行くぞ！」

パピルスが構えを直してこっちまで駆け寄ってくる。

けどこれが僕が選んだ結果なら、受け入れなきゃ。

僕はナイフを握り直すと、僅かに身体を捻ってパピルスの突きを何とか躲す。

反撃にパピルスへナイフを突き返すも彼は持ち手の部分で僕の手を弾いた。

「ニヤハハハッ！漸くその気になったか！」

受け入れて……彼に否定されようとも僕は世界を壊す。

「だから、君は僕が殺すんだ」

僕は右へ飛び跳ねる事でパピルスから距離を取った。

そして彼の背後に周りつつナイフを切り付ける。

「だがニンゲンっ！貴様はまだ手を抜いているなっ!？」

パピルスは僕のナイフを手を持った骨で軽く受け止めながらそう言ってきた。

「僕が手を抜いてる？どうして……」

僕はいつも通りだ。

もう受け入れたからさっきまでの動揺なんてない筈。

彼も変な事を言うね？それを言うなら今まで手を抜いていたのは君の方だろう？

僕は彼の的を得ない物言いにも言えぬ苛立ちを覚えて何度もパ

ピルスに切り掛る。

それを彼は幾度も受け止めながら隙を突いてその骨で僕を叩きつけた。

「うつ……ぐぐ……つ」

「貴様の攻撃からはアンダイン達と戦っていた時の様な決意を感じない！」

はは、何を馬鹿な事を。

ここまで来て僕が諦めるわけないじゃないか。

僕はピルスを殺す決意を抱いた。

ほら、これで彼を切り付ければ……

18

……………なぜだ。

パピルスは避ける事なく僕のナイフを身体で受け入れた。

だがその刃は彼を僅かに傷付けるだけに過ぎなかった。

僕はその事に理解が出来ずに続けて何度も彼を切り付けるも、彼は全ての攻撃を受け入れた。

9

4

2

1

M I S S

M I S S

おかしい……どうして。

「なっ！こんなんじゃないやアンダインを倒す事はぜええつたいに無理だ！」

何が起きているんだ？僕のLOVEに変化はない。

パピルスのステータスも変わりはない。

まさか僕が今更パピルスに殺したくないなんて思ってるとうつもりかい？

「有り得ない、僕は君達を殺す事に何も感じないのに」

「だから言っただろ！貴様はとつてもいい奴だつて」

な……なんで。君は僕を恨んでるんだらう？

君は何時だつて僕を信じてくれていたからいつの間にか甘えてしまっていたけれど、本来僕は君に恨まれて当然な奴なんだよ？

そうか……なにも知らないからまだ僕をいい奴だなんて言えるんだ。

なら教えてあげよう、僕の悪意の全てを……。

「はっ、僕がいい奴だつて？君を135,934,267回も殺した僕がかい？それに君だけじゃない。君の知ってるワンボーもレッサードッグもイヌツスもイヌツサもグレータードッグもアンダインもロイヤルガード達もマフエツトもアズゴアもサンズも。他にも出会ったモンスターは片っ端から虐殺していった！それでも君は僕をいい奴だと言えるのかい？僕の業を赦せるのかなあ！」

僕はパピルスの言葉を待った。

だか彼は僕が最初に此処に来た時に見せた憂いを帯びた優しい笑みを浮かべて答えた。

「知ってる。だから貴様がいい奴だつて言っているんだ」

「なっ……何馬鹿な……」

有り得ない……知ってるのならそんな目を向けられる筈が無い！

「その一億……なん回つて言うのが何回かは解らないがものすごくすごい数つて事は分かる！それだけの間お前は俺達の為に一人で何かを成し遂げようと頑張つて来たのだろ？だから俺様は貴様を信じる事にした！」

「パピルス……ありがとう」

「ニヤハハ。だけどな、俺様はまだ怒っているぞ！」

まあ、それも仕方ないか。

どうせこの世界じゃもうパピルスを殺せない。

「少しでも一緒に居たいと思つてしまった。

僕の決意か揺らいでしまった以上殺した所で後悔が心に突き刺さり目的を果たせない。

だつたらリセットする前に彼に殺されるのもまた一興だろう。

大丈夫、後数億回繰り返し返せば今度こそ終わらせる事が出来るようになるさ。

そう思い僕は目を瞑つてその時が来るのを待った。

……しかし、何時まで待つてもパピルスからの止めはやつて来なかった。

僕は何時まで訪れない衝撃を不思議に思い目を開くとパピルスの姿が無かった。

「あれ？まさか……さつきまでののは全て僕の妄想？」

は……はは……そりやそうだ。いくら何でも都合が良すぎるじゃないか。

はあ……疲れてるな。一度リセットでもすればこの疲れも取れるかな……はは。

僕は落胆の色を隠そうともせずに見の間を後にした。

*あなたはまだこの先の事を知る由もない。

謁見の間↓結界

結界まで意気消沈ながらも何とかやって来た僕は再び驚愕の光景を目の当たりにする事となった。

「……っ！」

結界を見つめるパピルスの前に僕は思わず彼の元へ駆け出しそうになったが直ぐに思い止まった。

さっきのは幻覚であって本物の彼が僕をどう思ってるかなんて解らないんだ。

願わくば未だ僕を信じてくれていると嬉しいけどね。

*まだいつてるのかお前は。

え……キヤラ？いつの間に此処に干渉出来るまで力を取り戻したんだい？

*それを答える義理はない。それよりお前は一度も幻覚など見ていない。

え……いや、何を言ってるんだい？

あんな都合の良い事が起こるはずがないし、それを僕に教えた所で君にメリツトはないじゃないか。

それこそ君が僕に伝える義理なんて無いだろう？

*それはどうかな？少なくともお前は今その骨を殺せなくなるだろ。

あ……………。

*ふん、私はもう戻る。

彼女のその言葉を最後に辺りに静寂が帰ってきた。

……なるほどねえ、謁見の間でのパピルスとの会話が現実なら確かに僕は彼を殺せない。少なくとも今回はね。

そうなると僕に残された選択肢は二つ。

果てしない程リセットを繰り返して彼を殺す決意を固められるまでの時間を稼ぐか、パピルスを裏切って世界を崩壊させるか。

どうするかを考えている内に僕の存在に気付いた彼が僕に声を掛けた。

「むっ、やっと来たかニンゲン」

「パピルス……謁見の間での事……」

「その通りだ！俺様はとても怒っている！だがそれは貴様にだけではない！貴様が俺様達を救おうと頑張っているのに気付きすらしなかった自分にも自分達にも怒っている！」

確かにさっきの幻覚だと思っていたパピルスと姿が重なる気がする。

けれど彼が憤慨してる理由も此処にやって来た理由も今ひとつ理解が出来なかった。

「そ、それで……どうしてここへ？」

「ん？そうだった！俺様が貴様を此処まで呼んだ理由はな……」

へ？呼んだ、呼ばれてたっけ？

記憶に……無いけど多分聞き漏らしたのかも知れない。

それよりも彼が此処まで呼んだ理由を聞くとしよう。

「俺様は考えたのだ。どうすれば貴様が反省して俺様に相談してくれるか！そして天才な俺様は遂に気付いたのだ！貴様が俺様を頼りたくなるまでずっと付き纏ってやるぞ！もちろんガスター博士に頼んでどんな世界でも逃がさないからなっ！」

「……………」

ははっ、それはとても困るな……天才の名は伊達じゃないって事かな。

そんな事されたら打つ手が無いじゃないか。

でも……それも良いかも知れない。

パピルスと二人で生きて行けたらどんなに素晴らしい事だろうか。

「まいったね……………」

「そうだろう!?だから、その手に持った貴様の決意を結界の外に捨てて俺とスノーフルに帰ろう！」

……………だけど、そういう訳には行かない。

「ごめん……やっぱり君とは一緒に生きてはいけないよ」

「何を言ってるんだ！お仕置きだつてのを忘れてるだろ!?!」

僕は目が飛び出しそうなくらい驚くパピルスへ決意を握り直し一

歩、また一步と距離を縮める。

「おい、ニンゲン！話を聞いているのか？」

「ごめんよ……今諦めたらこれまで僕が此処まで殺してきたモンスタ―達、そして全てのフリスク僕が殺してきた皆を裏切る行為なんだ」「んもうっ！全然解つてないじゃないか！俺様でも無いのに一人でも解決出来ると思うんじゃない!!」

彼が本気で叱ってくれているのが解る。

もし最初から彼がそうやって叱ってくれていたならこんな事にならなかったのかな？

……いや、僕以外のフリスク僕が存在する以上結果は変わらなかったろうね。

僕は有ったかも知れない世界を思い浮かべて薄く笑った。

背中へと伝わる数え切れない罪を感じつつ僕は揺らいでいた決意を強く固め直した。

「パピルス……ありがとう。そして、さよなら」

「ニンゲン……」

優しく偉大な英雄に感謝と別れを告げて僕は決意を振り下ろした。

「そこまでだジェノサイダー」

その直後、彼女しか知らないはずの名が何処からか聞こえてきたのだ。

結界

手にしたナイフがパピルスの身体を切り裂こうかとしていたが、突如呼ばれたその名前に僕は反射的に手を止めていた。

僕の視線はパピルスから外れ、声のした方向へと目を向ける。

「……君にその名前を教えたのはキャラだね?」

僕は視線の先にいるモンスター、アズリエル・ドリーマーを殺意を込めて睨み付ける。

その質問に奴は敵意でもって返した。

「そうだよ。気に入らないのかい?自分の名前だろ?」

「ああ、気に入らないからこそ付けたんだ」

虐殺者……好き好んで付ける様な名前ではない。

だから僕は敢えてその名を選んだんだ。

決して諦めない様に……何時までもジェノサイダーでいる為に。

アズリエルは敵意剥き出しのまままで話を続ける。

「ふくん?まあいいや。僕は君と戦いに来たわけじゃない。もし君を殺せるのなら殺してやりたいけどね」

そうだね、お互いに殺し切る事は出来ないのだから時間の無駄だ。

実際それをされると僕はちよつとだけ困るけどね。

「……じゃあ何しに来たのかな」

「僕はただ役者を集めてきただけさ」

役者……?まだ他にこの世界に知り合いなんて居ただろうか?

そう思いながらもアズリエルの方を見ているとその背後から不敵な笑みを浮かべた今の僕そっくりな少女が現れた。

「こうして会うのは久しぶりだね」

「っ……ああ、久しぶりだねキャラ。けど身体は君達の家で僕が奪った筈だよな?」

しかし、見てる限り彼女の姿は本来のキャラと比べても遜色無いものであった。

キャラは僅かに目を細めたかと思うとスツと表情を戻して疑問に答えてくれた。

「……ルインズでは世話になったな。お前の言う様に私の身体はそれで間違いない。これはアズが自分の魔力で造った仮の肉体だ。私は必要ないと言ったんだがな」

「えっと、まあ……自分で動けた方が便利だろ？」

「ま、それもそうだな」

そうか……アズリエルの目的なんて別に興味は無いけど僕の知ってる彼女みたいで安心したよ。

「それで、今更君がやって来てどうする気かい？悪いけど決意を固め直した僕に干渉する事は出来ないよ」

僕は腕を下ろして彼女に目的を訊ねた。

だが彼女は余裕を崩さずに質問を返してきた。

「ジェノサイダー。前にお前が『僕以外に僕を止められる奴なんて存在しないのさ！』って心の中で言ってたのを覚えてるか？」

キャラの今言った台詞には覚えがある。

まさか聞かれてるなんて思ってたけど、だからどうしたのだろうか？

僕が無言で頷くとキャラは我が意を得たりとばかりに悪どい笑顔を浮かべて続けた。

「つまりそういう事だ。入れ『Frisk』」

僕は彼女が何を言い出したのか暫く理解出来なideいた。

だが彼女に呼ばれてアズリエルの後ろから現れた存在に僕は言葉を失った。

「な………っ!？」

そいつは紫のボーダーが二本入った青のシャツに青のズボンを着用したボブヘアの少年……この場に居るはずのない存在そのものだった。

何故お前がいる。

お前は这个世界には来れない筈だ。

「………わかった。ジェノサイダー、こいつがお前に話があるそうだ」

キャラがあいつの言葉を代弁すると、フリスクは未だ頭が追いつい

ていない僕に近付き右手を差し出してきた。

「……………は？逢いたかっただつて？」

おいおい、本気で言ってるのかい？

目の前のガキは僕に仕出かした事も忘れて手を差し出してきやがる。

ふざけるんじゃないよ。

「……………っ!？」

僕は鬱陶しい目の前のガキの心臓にナイフを深く穿った。

「F r i s k、君は僕にした事を覚えて無いのかい？」

止まることなく血液が零れ落ちる胸を抑えながらF r i s kは首を左右に一度だけ横に振る。

「……………ごめんだつて？謝って赦される様な事だとも思ってるのかい!？」

僕はこのガキを絶対に赦さない。

この世界でリセットした数だけ君を殺し続けてあげるよ。

僕は決意を漲らせてこの場でセーブを行う。

そしてF r i s kの胸からナイフを抜き、勢いを付けて再度振り下ろした。

そうして奴が息絶えたのを確認してから僕はロードを行おうとした。

だがしかし、何故かロードは失敗に終わってしまった。

「ロードが……………なぜ？」

理由は解らず目の前の絶命した存在を見るも血の気が引いて顔色が青白くなっているだけだ。

続けてアズリエルの方に目をやるが、奴は目の前の状況に開いた口が塞がらないといった様子で見ているだけだった。

ソウルレスであり現在仮の身体を使ってるキャラや普通のモンスターであるパピルスが僕の決意を阻めるとは思えないな。

……………まあいいさ、あのガキを一度しか殺せなかったのは気に入らないけれど余計な事をされるよりはましさ。

僕は気持ちを切り替えて本来の目的を進める事にした。

「パピルス、きつきは邪魔が入ってしまったが今度こそ終わらせてあげよう?」

「ニンゲン……貴様はそっちのニンゲンと何かあったのか?今の貴様はなんだか悲しそうだぞ?」

パピルス……別に君が知らなくてもいい事だし言っても理解出来ない話だろう。

けど、最期に彼の期待に答えてあげようじゃないか。

ジエノサイダーである僕なんかより最低最悪な存在がいた事を。

「僕の心のオアシスだった君の為に特別に少し昔話をしてあげよう。キャラとアズリエルも、君達が連れて来た奴がどんなニンゲンかよく聞いているといい」

あれはまだ僕がジエノサイダーと名乗る前の出来事だ。

—————

僕はその世界では最初に落ちてきた人間だった。

この世界で言う所のキャラの様な立ち位置だったんだけど、その時の名前こそが『F r i s k』だったんだ。

僕の人としての生は素敵なモンスター達に囲まれた素晴らしいものだった。

この世界とは違って我が家がルインズだったり庭に居る『ファイナル・フロギー』とかに危うく殺される所だったとか色々あったけどね。とはいえそこは本題じゃないから割愛させて貰うよ。

あの頃の僕は地下に閉じ込められた皆を解放する為に结界を壊して欲しいとアズリエルに全てを託して己の命を絶った。

まあ残念な事に彼は僕の願いを叶えてはくれなかったけどね。

それから何人かのニンゲンの終わりを見送った後、七番目に僕の前に現れたのが彼だった。

死ぬ事も誰かと話す事も出来なかった僕は暇つぶしに今までと同じようにそのニンゲンの後ろをついて行こうと近づいた。

だけどその子供は今までのニンゲンと違いじつと僕を見つめ続けていた。

*君、僕が見えるのかい？

僕の問いに子供は首を縦に振った。

初めての会話は緊張しながら自己紹介をしたら彼が自分の名も F r i s k だと答えてくれたのを覚えている。

あの時の僕は久々に他人と話す事が出来た嬉しさについて舞い上がって僕の事や皆の事を一杯話した。

きっと彼にとつてはあまり面白くもない話もあっただろうにそれでも頷いたりして確りと話を聞いてくれて相槌も打ってくれたんだ。

その時僕は落ちてきたニンゲンに初めて好感を抱いた。

以降僕は彼を助ける為に動き始めた。

だけど彼は今まで落ちてきたニンゲンの中でも圧倒的に不器用だし弱かった。

なのに誰にも曲げる事の出来ない固い決意を抱いていた。

だから僕はとても苦勞させられたよ。

そっちの君達に分かりやすくいうなら『さうだ』『せすに』『にがす』で戦いたくないと意固地になり続けたんだ。

ダミー人形にもそれをやり出した時は僕もママも同じ気持ちで彼を見てただろうね。

だから僕は何度も彼に言ってやったし、身体を借りてやって見せたりもしたんだ。

それでも彼は自分のやり方を変えようとはしなかった。

その事で何度も口喧嘩をした、僕だって彼が無意味に傷付く姿を見たくなかったからね。

だが彼は一步も譲ろうとはしなかったよ。

彼の決意に負けた僕は妥協案として彼が命の危機に晒された時に

相手を殺さない事を条件に身体を借りると伝えたら、彼は渋々納得してくれたよ。

身勝手かもしれないがああの際の僕はそれだけ親友である彼が大切だったんだ。

けれどどうやら親友だと思っていたのは僕だけだった。

笑い合ったり時には喧嘩しながらも僕達は長い時間を掛けてついにモンスター達を地下世界から解放する事が出来たんだ。

僕は長年の夢が叶った事で感無量だった………なのに、彼は考えられない事を言い出したんだ。

*F r i s k……冗談……だよね？

僕は笑えない冗談だとしても冗談だって言っただけで欲しかった。

だけど彼は真面目な顔で首を横に振ると、恐ろしい言葉を放った。

「この世界はやり直す——と。」

そして彼はその言葉の通り世界をリセットした……僕をこの世界に飛ばして。

—————

「それから僕は一人で……いや、正しくはキャラと二人でこの世界で生きてきた。最初の内は再び結界を壊して幸せな世界へと進んだよ。けど………どうしてか次の瞬間には僕はルインズのゴールデンフラワーに寝そべって落ちてきた穴を見上げていたんだ」

「……お前がリセットしていたのでは無かったのか」

キャラからすればそう感じるだろうね。

僕も最初は記憶を引き継いでる彼女を疑ってたからね。

そうじゃなかったって気付いたのは僕が皆を殺し回り始めて少しした頃だったかな。

「そう、僕じゃないんだ。そしてそいつが此処に来た事で犯人が漸く分かった」

「それがRiskだって言いたいのか？」

「その通りさ。とはいえ死んでしまったから理由も方法も解らないけどね？」

けれどそんな事は今更気にする必要もない。

僕を止められる存在はもう居ないのだから。

僕は死に体となったRiskの前を通り過ぎ、パピルスへと近づいていく。

「パピルス。誰も信じられなくなった僕が唯一信じられると思えたのが君だったんだ。だから本当は君を此処まで苦しめたくはなかった……ごめんね」

「ニンゲン……大丈夫だ。俺様も貴様を信じてるぞ！けど……今度は兄ちゃんやアンダインと一緒に四人でパズルとかして遊ぼうな」

パピルス。少しでも君を疑った僕に言う資格なんてないけど……ありがとう。

僕は笑顔で受け入れてくれる慈愛に満ちた英雄へと終わりのナイフを突き立てる。

そして彼の笑顔に少しでも答えられる様に心からの笑顔を返した。

結界↓???
???
↓結界

*いやだ　こわれるもんか。

僕が戻ると目の前にいた筈のパピルスの姿はなく、手に残った塵だけが彼がそこにいた事を漂わせているだけだった。

つまり僕は最後の最期に彼を見送る事が出来なかったんだ。

アイツのせいだ……アイツのせいだ……

僕は先程まで物言わぬ屍と化していたFriskを睨み付ける。

奴は当然の様に立ち上がり僕を真っ直ぐ見つめていた。

赦さない……世界が果てようと葬り続けてやるさ。

その姿が僕を更に苛立たせた。

僕はナイフを固く握りしめて再度そいつの心臓に突き刺した。

「……………」

「Frisk……え？で、でも……」

アズリエルが止めに入ろうとするがそれを止めさせたのは他でもないFrisk本人だった。

当然だろうか？これは僕と奴の問題で彼らには関係無いんだから口を出すのは無粋つてもなさ。

アズリエルも奴に言われて渋々手を下ろすが依然としていつでも動ける様に僕を警戒している。

まあ何をしようとアズリエルの攻撃なんてたかが知れてる。

僕は気にせずFriskに突き刺さったナイフを右に切り払いトドメを刺した。

「早く戻ってきなよ。僕の心をとことん逆撫でする様な君には諦める選択肢すら与えないよ」

その場で復活したF r i s kを僕はさすがに斬り捨てた。

僕に斬られたそいつは苦痛と後悔をない混ぜにした様な顔で何も言わずに再び倒れ伏した。

そして復活して……………

また殺して……………

再び復活して……………

再び殺して……………

……………

……………

……………

……………

。

どれ位の時が経っただろうか。

僕はF r i s kを殺し続けた……………回数なんて気にしていないがまだ100,000回程度だろう。

当然僕の気が済む筈が無い。

こうしてる今も奴を殺し続けている。

アズリエルは一方的に虐殺を繰り返す僕を非難し、キャラは何も言わずに呆れた顔で僕を見ている。

そして目の前のただ殺され続けるF r i s kはここまで一言も話さず、僕から目を逸らす事なく避ける素振りすら見せようとしなかった。

僕より固い決意を抱いてるのだからこの程度で諦めたりはしない事は解ってるがそろそろ恨み言の一つや二つ出ても良いんじゃないだろうか。

そうでなくとも何かしら行動を起こすのが普通だろう。

僕は奴の狙いが読めずに僅かにもやもやが残るものの再び斬り付けていく。

だが、気にしないようにしていても一度芽生えた疑問というものは徐々に心を埋め尽くしていくのだ。

遂には芽生えた疑問を抑えられなくなり、僕は僅かな好奇心を引き金に聞く必要の無かった事をつい聞いてしまっていた。

「F r i s k……お前は今僕に何回殺されたか覚えてるか？」

「1, 126, 125回……くらい、だね」

「そうか……その百万回以上もの間何もせずに僕に殺され続けているはどうしてだい？僕が疲れるのを待ってるにしても抵抗しないのは不自然だしね」

僕の質問に対してF r i s kは少しだけ躊躇ってからゆつくりと答えた。

「一つはあっちで話した通り君への謝罪のつもりかな？……例えば君に億万回殺されようと僕は君を殺したくないから」

くだらない……だったらさっさと諦めればいいじゃないか。

「……他にもあるんだろ」

「そうだね。後はどんな理由でも君から僕に話し掛けてくれるのを待ってたんだ。君が話し掛けてくれるって事は僕の話の話を少しでも聞いてくれる気になってくれた事だからね」

つまりはコイツの思惑通りって事か。
気に入らないな。けどお陰でもう君と話す事は無くなったよ。
そうして僕は何度でも彼の事を斬り裂いた。

あれから更に君達観測者には想像も付かない程途方も無い時間が経つただろう。

既に僕の記憶にあるリセットされた回数を遥かに上回る程彼を殺し続けた。

だが……それでもF r i s kは毎回襲い来る痛みを堪え弱音すら吐かずに僕に殺され続けていた。

僕はその異常な決意に寒気すら覚え、気が付くと腕を降ろして彼に尋ねていた。

「はあ……君の決意が固い事はどうしようもない位身に染みたまよ。だけど、それだけの決意なら他に幾らでも目的を果たす方法があったんじゃないかい？」

それこそこっちの世界に飛ばされてきたばかりの僕と接触する事だっただけ出来た筈だ。

けれどそれをせずにこうして僕に殺され続ける事を選んだ理由が僕には解らなかつた。

「どうして態々こんな手遅れな僕の前に現れたんだい？」

F r i s kはその質問には答えずに眉を吊り上げてずかずかと僕に近付いてくる。

僕が彼の行動に警戒しながらナイフを構え直した直後、F r i s kは僕の右手に持ったナイフを強く叩き落とした。

「なっ！」

更に彼は武器を落とされた事で動揺を見せた僕の顔へと彼は広げた右手を勢い良く振り抜いた。

直後、接触した僕の頬とF r i s kの手の平から耳を劈くような破

裂音が響く。

「……………え……………」

驚く程綺麗に入った平手打ちによって耳鳴りが酷く声が聞き取り辛くなっていた僕に、彼は聞こえるよう声を大にしてこう言った。

「君は手遅れなんかじゃない！あの頃から変わらないう君は優しいままで！君を悪く言う奴は例え君でも赦さないよ！」

……………は？訳が分からない。

僕が啞然としてる中、F r i s kは思い出したかの様にアズリエルを睨みつける。

「アズー…この世界での出会い方じゃ仕方ないから大目に見てたけど、これ以上言うなら本気で怒るからねっ！」

「ええっ!? ゴ、ゴめん……………」

F r i s kに何故か唐突に叱られたアズリエルはいつかのアズゴアの様にしよぼんと落ち込んでいた。

僕は未だに状況が掴めぬまま二人のやり取りを呆然と見ていると再び彼は眉を吊り上げたままこっちへ向いて尋ねてきた。

「フリスク、覚えてる？僕が君の力を借りて皆を地下から解放した時の事」

「ああ、もちろん」

忘れる筈が無い。

F r i s kに裏切られて頂上から地の底まで叩き落とされたあの日の事を忘れるなんて有り得ない。

それこそが今の僕の原動力でもあるのだから。

僕は彼に憎しみを浴びせながらそう答えると、彼は続けて訊いてきた。

「じゃありセットの話を切り出す前に僕が今見たく君に怒ったのは覚えてるかな」

は？そんな記憶はな……………い……………?

でも何故か前にも怒られた覚えがある気がする。

いや、だけど普段は僕が彼を叱る事が殆どだったからそんな事があつたなら覚えてる筈……………。

「やっぱりそうだよ。僕がその直後にリセットの話をしたから仕方ないよ。けどね？僕がこれだけの決意を抱いたのは君からその話を聞いたからなんだよ」

「僕が言った事……？」

まさか、僕が何を言ったって言うんだ。

僕は記憶を遡り何の話をしてたか思い出そうと試みる。

Friskがリセットの話を持ち出す前………確か………そうだ。

「僕が決意のみの存在だって話………だったかな？」

「そう、君はもう未練は無いから消えるだけだって言ったんだ。それに反対した僕を失望させようとも言った。『目を覚ませよ、僕はアズゴアを殺した約束も守れないソウルレスだぞ』」

ああ、それは言った気がする。

あの時はFriskが僕を未練に感じてリセットを選ぶ事が無いように諦めさせるためにそう言ったんだったかな。

どういう事かまさかそれが逆にリセットする決意を持たせたなんて皮肉もいい所だよ。

「まあ、君がそこで決意を抱いたって事は解ったよ。けれどそれは決意を抱いた理由でも、最初の質問の答えでもないよね？」

「僕が決意を抱いた理由は前にも言ってる……君を救いたいからだよ」

「……ちつ、また同じ言い合いを繰り返すつもりは無いよ。それで、どうして此処の僕の前に姿を現したんだ？」

矛盾した行動を理解するなんて出来るはずが無いじゃないか。

僕が舌打ちを一つしてから先にもう一つの質問を聞くと、Friskは少し残念そうな顔をしながら質問に答え始めた。

「その理由だったら君と協力出来れば僕の願いを叶える事が出来るからだよ」

「君の願いをかい？どうして僕が協力すると思うんだい？と、いうよりそれは僕がこうなるのを解ってたって事だよ……？」

僕は目を細めながらそう問い詰めるも、彼は直ぐに否定してきた。

「それはちがうよっ！本来僕一人で君を救える様に考えていた。だけ

ど君がそつちで世界を壊せるだけの力を手に入れたとガスターから聞いて急いで来たんだ」

ふうん、本来は来るつもりはなかったってわけね。

「すると僕が世界を壊さない様に止めに来たって事なんだね？」

しかし彼は首を横に振って答えた。

「そうじゃなくて、昔の様に君に僕の身体を使つて欲しくて来たんだ。君の言う通り世界を片面からしか見て来なかった僕より君の方が相応しいと思つたんだ」

「それは、僕の願いを知つたうえで言ってるのかい？」

「大丈夫だよ。どんな願いでも僕は君の選択を信じるよ」

F r i s k は僕の両手を握つて言った。

僕はそんな彼を見て誰かと重なつた気がした。

「なんで……僕は世界を壊そうとしてるんだよ？それでもいいって言うのかい？」

「うん、君が全ての世界を壊したいなら僕は一緒に見守るよ」

彼はそう言つて無邪気にはにかんで見せた。

だがそうすると F r i s k があの時リセットをした理由が解らない。

本当は世界を壊す事が目的だった？

だったら今頃僕と同じ道を進んで僕に会わずとも達成出来るはずだ。

けれど他に理由が考えつかなかった僕は自分でもビックリする位素直に聞き返していた。

「F r i s k、君自身はこの世界をどうしたいんだい？」

すると彼は不意に僕の事を抱き締めて小さな声で囁いた。

「君と一緒にならそれ以外に望むモノはないよ」

Friskは僕の望むままで良いと言った。

今更彼の言う事全てを信じるのは簡単では無いが、もし彼が僕を裏切るつもりならそれならそれでいい。

大切な親友に二度も裏切られるなんて体験はしたくはないが、裏切る事も裏切られる事も最後となるならそれでもいい。

もう繰り返すのには疲れた。

どっちにしろFriskの力を使わなければ僕が世界を壊す事すら出来ないのだから他に選択肢は無い。

………理屈をこねれば幾らでも出せるが、結局のところ僕は彼を信じたいんだ。

僕の英雄が僕を信じ続けてくれた様に。

そして目の前の彼が僕を受け入れてくれたあの時の様に。

愚直で真剣に相手を思いやれる様な、僕はそんな人間になりたいと思っただ。

「Frisk……君の話信じるよ」

僕は彼の両手を強く握り返した。

「フリスク……うん、ありがとう」

Friskも応えるように更に僕の手を強く握った。

その直後、僕の決意がキャラの身体を解放しFriskへと流れていく。

背後でキャラが自分の身体に戻っていくのを感じながら彼と一つになっていく。

僕の決意は彼のソウルと交じり合い、彼のこれまでを知る事となった。

Friskはあの時リセットした後も何一つ変わらなかった。

相手を褒めたりなだめすかす様な小細工を一切せず、ただ心から本心を伝えていた。

——戦いたくない。皆を、そして友達を救いたいと

そして彼は自分の能力の事を全員に話して回った。

聡明な君達なら解ると思うが、そんな話を信じる奴は殆ど居ない。そして信じた所で相手を警戒させる要因にしか成り得ない。

その結果何が起きたのか？

信じない者からは不審がられ、信じた者からは警戒され、スノーフル以降はほぼ全員がF r i s kと敵対していた。

それでも彼は決して戦おうとせず、にいたものだから一周の間にそれこそ数百数千とその身体は引き裂かれた。

そしてそれは二週目以降も順調には進まなかった。

原因の一つは彼が今までのニンゲンと比べ不器用で非力だったという事。

そしてそれ以上にニンゲンとモンスターの身体的持久力の差があった。

もし嘗ての僕等が行ったように和解して行けばモンスター達は戦闘中でも体を休める時間を設けてくれる。

もし今日までの僕のように虐殺の限りを尽くしたのならL O V E が上がり体力や防御を上げることが出来る。

だが彼のやり方はどちらの恩恵も受けられず、相手が分かってくれるのをひたすら待ち続ける事しか出来ない。

そんな苦行を彼は数億回と繰り返し続けてきたのだ。

……もし僕が居たら絶対に彼を止めている。

だから彼は僕を別の世界へ飛ばしたのだろうと、今なら納得出来る。

*僕を裏切った訳じゃ無かった……のか。

「言い訳するつもりはない。結果として君の手を汚させたのは僕の我儘だから」

*……………

そう答えるF r i s kだが、これまでの事も彼の気持ちも知ってしまった僕が彼を責められる筈が無かった。

「そろそろ肉体の主導権が君に移るよ」

僅かにF r i s kの身体が動かせる様になり始める。

「君が僕や世界を救せないなら全てを壊すといいよ」

「僕は……」

口から出る言葉が僕のものへと変わった。

同時に彼の言葉が頭の中に直接聞こえてくるようになる。

*でも、もし君の願いがああ頃と変わらないなら僕は……その先の世界を君と一緒に生きたいな。

Friskの身体の主導権が殆ど僕に移り変わろうとした。

*この時を待っていたよ。

「避けるフリスクっ！」

何者かの声が空間に響き、真っ先に反応したキャラが僕へ叫び掛けるも反応する間もなく僕らの視界は暗闇へと覆われてしまった。

*久しぶりだね二人共、そしてさよならだ。

T A L E ↓ るいんず

Frisk達が突如暗闇に飲み込まれその姿が消えて無くなった直後、キヤラは何も見えない虚空へ敵意を向けて呼び掛ける。

「奴らをどうするつもりだ……ガスター」

直後、その呼びかけに答えるように何も無かった空間から白いお面の様な顔を浮かべたモンスター、W・D | Gasterが姿を現した。

*今の私はモンスターとは異なる存在だよ。

ガスターは口角を僅かに上げるとキヤラの質問にこう答えた。

「勿論、彼らは特別な処で心朽ちるまで隔離させて貰うよ」

「その理由を聞いてるんだ。あいつ等を会わせるように仕組んだのは貴様だろう」

キヤラの言う通りガスターはFrisk達が途方も無く世界を繰り返している間、この瞬間の為に研究と仕掛けを延々と積み重ねていたのだ。

その理由は――

「それは……この世界『UNDER TALE』の継続。その為に彼らの存在が妨げになると判断されたのだよ」

「世界の継続？確かにジェノサイダーは世界を壊そうとしていた。だがFriskの目的は世界を救う事ではないのか？」

キヤラはガスターよりジェノサイダーとの関係と共にその話を聞かされていたからこそアズリエルの力を借りてFriskを連れてきたのだ。

先程の二人の会話に不安を覚えない事も無いが、それでも二人の誤解が解けたのならば大丈夫だとも思っていた。

だからこそガスターの行動の理由が理解出来ずに居たのだ。

「キヤラ。確かにいきなりだったとは思うけど、あのままじゃ奴が世界を壊していた可能性も十分にあったと思うし……ガスターのやつた事が間違いとは僕は思わない……かな」

この世界のアズリエルの立場を考えればそんな考えになるのも理

解してるキャラは特に言い返すことはせずにガスターの返答を待った。

「いたっ！キ、キャラ!？」

……キャラは何も言い返さずになかよしカプセルを一発だけぶつけた。

そんな二人の様子を微笑ましく見ていたガスターだが、キャラの無言の圧力に肩を竦めると漸く説明を始めた。

「まあ、彼の言ってる事も半分間違いではないさ。世界が壊されるのは私にとつても一番に避けなければいけない課題だったからね。だが……ジェノサイダー君だったかな？彼がやろうとしていたのは『UN^世DER TALE^界』そのものの破壊だったが、F r i s k君の目的は言うなれば『UN^世DER TALE^界』そのものの封印だ」

「世界の封印？ますます解らんない」

「はは、それについては君達には関係ないから気にしないでいい。君たちはこれからもリセットを繰り返しながら時空が修正されるのを待つといい」

ガスターはそういつて結界へと振り向き歩き出した。

その直後、キャラが一足飛びで具現化したナイフをガスターの背中に突き刺した。

「キャラ!?!一体何をしてるんだい!」

キャラはアズリエルの呼びかけには答えず、無表情で刺さった箇所を見つめるガスターへと声を掛けた。

「お前らの考えなんてものは知らん。だが私はお前よりF r i ……ジェノサイダーの方がまだ信じられるのでな」

「ふうむ……もう一人の方ならまだしも彼が危険なのは満場一致だと思っていたのだがねえ。それに最初に私に助けを求めたのは君じゃなかったかい？」

そういいながらガスターは何事も無かったかの様にキャラから離れていった。

「そうだな、確かに私は奴が嫌いだし奴から皆を守る為にお前に助けを求めはした。だがそれでも奴とは伊達に長い時を共に過ごしてな

いんでな。ただの腐れ縁だが少なくとも今のお前よりは何万倍も信用出来るな」

ガスターは残念そうに肩を竦めるが、やがて再びキャラ達に背を向けると間もなくして姿を消した。

「……まあ、君が何をしようが今更出来ることもないがね」

と、最後に一言だけ残して。

その言葉を受けたキャラは既に何も無くなった空間に向けて言い返した。

「はっ、私の諦めの悪さは奴からの折り紙付きだぞ？」

「キャラ……」

複雑な表情で自身を見つめるアズリエルに気付いたキャラは彼の所へ戻り、彼の右手をそつと握って言った。

「大丈夫だ、私の親友はお前だけだ」

「……………」

「……………ただし、この世界のお前じゃないからな。勘違いするなよ！」

途端に気恥ずかしさを覚えたキャラは照れ隠しにそう付け加えた。

だが、アズリエルにとつては今はそれで十分だとばかりにあどけない笑顔で彼女の手を握り返した。

「これからもよろしくね！——つていたいいたい!?!痛いってばキャラあー！」

「うるさいっ！それよりさっさと奴らを探しに行くぞ！」

アズリエルの予想外な反応に何故だか負けた気がしたキャラは腹いせになかよしカプセルを二十発程ぶつけてから結界を出ていった。

アズリエルも涙目ながら慌ててキャラに追いつくとその手を取って共に姿を消した。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※

NERVELESS TALE

※※※※※※※※※※※※※※※※※※

突然視界が真っ暗になったかと思えば次の瞬間には見覚えのある
ゴールデンフラワーに囲まれて寝そべっていた。

何が起きたのか分からないけれど最後に聞こえた声から察するに
ガスターの奴が何かしたのかもしれない。

*フリスク、大丈夫？

「大丈夫……ってFriskも来てるのかい？」

*そうみたいだね。だけど此処は一体……？

解らないけど……ここが記憶通りのルインズなら先に進めばトリ
エルの家があると思うし、兎に角進んでみようか。

取り敢えず情報を集める為に先に進む事にした。

だけど僕達は直ぐに違和感を覚えた。

*ねえ、フラウイーが居ないみたいだけど……。

フラウイーが居ないって事は最初の間人間が落ちた時か、彼を殺して
からリセットした時かのどちらかかな……けど誰も来ないのはどう
いう事だろう。

辺りを見回したり暫く待ってみたが誰かが来る事は無かったので
僕達はマイホームへと向かう事にした。

そこから今までは違う状況に僕等は戸惑いを隠せないで
いた。

フロギーやナキムシヤ達はその場に居るだけで襲ってこようとはして来なかつたり、ナプスタブルックはやる気が起きないと言って直ぐに消えてしまつたりと僕らの記憶にない事態が立て続けに起こっていたのだ。

そうして特に何かに遮られること無く僕等はマイホームへと辿り着いた。

「着いたけど……結局トリエルとは会わなかつたね」

*取り敢えず呼び鈴押してみたら？

別に開いてるし入っても良い様な気がするけど、まあそうだね。

僕は彼の言う通りに呼び鈴に手を伸ばして一度だけ鳴らして待っていたが誰かが出てくる様子は無かつた。

……どうしようか？

*うーん、もう一度押してみる？

いや、既に開いてるし中に入って怒られたら謝ろう。

F r i s kは少し困つた様な顔をしていたけど僕は気にする事無く建物へと入る。

中は掃除が殆どされていないのか床に埃が溜まり隅には蜘蛛の巣が出来ている。

埃が積もつた床には足跡はついておらずここ数年は誰も通つて居ないように見て取れた。

*マ……トリエルさんは部屋に居るのかな？

たぶんね。というか普通にママって呼べばいいのに。

*だって……恥ずかしいし……。

別にまだ恥ずかしがる様な年齢でもないけど……リセットしてるし？

*リセットしても記憶は残るんだから恥ずかしいに決まつてるでしょ!?

あはは、そんな事言つたら数百万歳の僕達は『フォツフォツ』って言わなきゃいけないのかい？

別に気にしなくていいでしょ？僕は良いと思うよ。

*……まあ、その通り……だね

あ、ほらママの部屋だよ。

忍び込む？それとも全力で開く？

*え、えと……

分かった、後者だね。

僕は彼が答える前に扉のノブを捻ると、大きな音を立てて目の前の扉を開ききった。

「えっ？だ、だれ……」

中には予想通りトリエルが部屋に籠って居たが突然の来訪に顔を上げてこつちの様子を窺っていた。

「ハウディーー！こんな所に引きこもって如何したんだい？」

「あっ………いえ、あなたこそこんな所までどうしたのかしら？おうちに帰りたいのなら扉を開けるわ」

トリエルは一瞬信じられないものを見たような驚きの表情を見せたが、直ぐに目を伏せると僕に訊ねてきた。

僕はその様子を不審に思いながらも質問に答える。

「僕は帰りたいのはあなたの思ってる所じゃないかな。けど確かめた事があるから外には出たい」

「……ええ、わかったわ。ついていらっしやい」

そういつてトリエルは僕の横を通り過ぎ扉を開けて廊下へと出ていった。

*ママ……

トリエルの様子が心配なのは分かるけど、一先ずは先に進むよ。

*分かった……けど、また戻って来ちゃダメかな？

………はあ、仕方ないな。向こうが認めてくれればね？

*うんっ！

ああもうなんだかなあ……僕一人で浮き沈みして道化を演じてたと思うと腹が立つてくるよ。

あくあ、度を超した無自覚も罪になればいいのに。

*………？

いいよ。君に言っても理解出来ないだろうし僕自身認めたくない部分もあるから気にしないで。

*えつと……

それより扉の前についたよ……つてこれは普通君が言う所だろ？

僕が Frisk の代わりにナレーター役をしている間にトリエルが魔法で大きな扉を開いていた。

「さあ、この先を進めばるいんずを出れるわ。ここは私しか開けられないから二度と戻ってくる事は出来ないけれど、ここでやり残した事は……えつ？」

僕は虚ろな目で訊ねるトリエルをギュツと抱きしめて彼女にお願いをした。

「また戻ってくるから……開けておいて……ママ、だめ？」

「フリスク……えと、何でもないわ……」

「ママ……お願い」

誤魔化すように顔をそむける彼女に僕は再びお願いする。

「……フフ、あなたはおかしな子ね？あつたばかりのおばさんの事をママだなんて」

トリエルは暫く動かしてなかったであろう口角をぎこちなく動かして微笑んだ後、僕を優しく抱きしめ返してくれた。

「解ったわ、ここは開けておくから何時でも帰っていらっしやい」

「うん、ありがとう」

そう言つてママのふんわり感と暖かさを名残惜しみながらも僕は彼女から体を離れた。

「いってきますっ！」

僕は元氣よく伝えると駆け足で扉を潜り抜けていった。

すのーふる

ルインズを離れた僕達は手足が凍えてしまいそんな極寒の地、スノーフルの一本道を歩いていった。

「……ねえ、交替しない？」

*寒いならママの所に戻ったら？

何時来ても寒いものは寒いのでFriskと代わって貰おうと思っただけけれど、彼は少しだけ拗ねた口調で突き返されてしまった。

僕はただ扉を開けたままにして貰おうと手を打っただけなのに僕だけトリエルに甘えていたのが悔しかったのだろうか。

体は君のなんだから別にいいじゃないか。

*でも君だつて嬉しかったんだろう？

そんな事……。

*………

し、仕方ないじゃないかつ。自分の選択とはいえママのぬくもりなんて記憶が薄れるほど受けてこなかったんだから！

*もう素直じゃないなあ？まだ恥ずかしがる様な歳じゃ無いでしょ？

なっ………もしかしてさっきの事根に持つてる？

*そんな事ないよお。僕は君の考えに賛同しただけで他意はないからね？

ふくん……そう言う事にしとく。つていうかほんとに替わって欲しいんだけど？

*……ほらほら、君の英雄が待ってるんだから早く行こう！

ちよつとお!?話の逸らし方が雑じゃないかな！

*はははっ、ほら！そんな事言ってる間にスノーフルの町に着いたよ？

強引に話を切られた僕は渋々諦めて前を見ると、そこはスノーフルの町だった。

うむむ………やっぱりおかしい。

僕はFriskに此処までにモンスターに遭遇したか聞いてみたが彼は首を振った。

話してて気づかなかったのだとしたら僕らは相当な間抜けだけどそれ以前にギミックを何一つ解いていないしパピルスやサンズに一度として会っていない。

僕達がこの世界に来た時から感じていた違和感は早くも確信へと変わった。

「Frisk」

*そうだね、此処は僕達の知る世界軸とは全くの別物のようだ。

「そう。僕らの現状として一番近いのはLOVEを上げ続けた層のサンズかな」

あいつ曰く、元々僕とは関わる筈の無い世界から僕のLOVEに氣付いて殺しに来たと言っていた。

どうやって来たかまでは教えてくれなかったけれど、あいつならガスターと接触した可能性は考えられるね。

そうなると今の所、僕らを此処に飛ばしたのはガスターって説が有力かも知れないね。

ただ黒幕の見当が付いた所で未だ戻る手掛かりの無い僕達は、考えを切り替えてまずはパピルス達の家に向かう事にした。

パピルスの家の扉をノックするとカンカンという軽快な音と共に直ぐに扉が開かれた。

「兄ちゃんなら部屋から出てこないぞ！用があるなら俺様が伝えて………」

中から出てきたのは元気な声でそう答えたパピルスであった。

パピルスは僕の存在に氣が付くと口を開いたまま固まっていた。

僕も心の準備が出来る前に扉が開かれたので同じように固まって

ゲンが戻ってくるのを待てば良いだけだからなっ！」

こんな何もかも僕の記憶と違う世界でも彼だけは変わらずに居てくれた事があまりにも嬉しくて僕はいつの間にか涙を流してしまっていたみたいだ。

「なっ!?ど、どうしたニンゲンのそっくりさん!何処か痛いのか!」「な、なんでもないよっ。それよりそのニンゲンについて聞かせて欲しいな?」

心配するパピルスに大丈夫であると告げて僕は目元を拭い、本来の目的である情報の収集を始めようと何とか気持ちを切り替えてパピルスに訊ねた。

「おおー貴様もニンゲンの事が気になるのか?良いぞ俺様の知ってる事ならなんでも教えてやる!」

パピルスはとても嬉しそうにこの世界に来たニンゲンについて話してくれた。

それでわかった事は三つ。

まずそのニンゲンはモンスター達が地下世界に閉じ込められてから最初に落ちてきた人間だという事。

次にニンゲンはアズリエルと共にバリアを壊す方法を地下中探し回っていたが、ある時二人揃って行方不明となってしまうらしい。

そしてそれ以降モンスター達の殆どが無気力になってしまったとの事だった。

僕は彼の説明によってこれまでの状況に納得がいった。

「そうか、それでトリエルやサンズもこんな状態なのか……」

「そうなんだ……兄ちゃんが怠け者なのはいつもの事だが最近は特に酷いんだ」

*サンズ……

……ま、アイツの怠け癖は別に良いけど、何か知ってる可能性もあるし一度会っておこうかな。

「ねえパピルス、サンズに会わせてもらってもいいかな?」

「ニヤ……それがな、さっき呼んでみたが出てこなかったんだ」

「それなら僕に考えがあるよ、任せておいて」

「ほんとかつ！流石ニンゲンのそっくりさんだな！」

唐突に感激しだしたパピルスに手を引かれて僕はサンズの部屋の
前まで連れていかれた。

「よしっ！頼んだぞそっくりさん！」

「はは、それじゃあドアがぶつかると危ないからパピルスは離れてて」
「そうだな！わかった！」

僕はパピルスを少し遠ざけて扉の前に立った。

*どうするんだい？

ん〜、トリエルみたいに洒落でも言ってみる？

*え……なにかあるの？

え、ないよ？というか駄洒落はあんまり好きじゃないからね。

*ええ〜……？

まあ僕に任せておいてっば。

僕は扉をノックすると中のサンズに聞こえるように呟いた。

「そんな所に籠ってて良いのかいサンズ、僕のLOVEを見てみなよ。
とても二人きりになって出来ないと思うけどな？」

*ちよつとフリスク!?

大丈夫大丈夫、心配しないでよ。

そう言っつて僕が心配するF r i s kを宥めっていると、不意に扉が開
き出てきた骨の手が僕を捕える。

その次の瞬間には目の前が暗転した。

「おい……何のつもりだクソガキ」

お、どうやら無事釣れたようだね？

*自分が餌って……っつていうかこれからどうすんの!?

心配性だなあ、大丈夫だよ。

サンズが警戒してるのは僕が彼の能力を知ってるっつて事だけで僕
の今のLOVEは1だからね？

屑の彼じゃなきゃ出会い頭に殺しに来るような事はしないよ。

*え？……あ、ほんとだ。

F r i s kが理解してくれた所で僕はサンズに自己紹介を始めた。

「僕は君の知らない別世界から来たニンゲン……って言えば信じてくれるかな?」

「無理だな」

あら……サンズに即答されてしまったけど仕方ないね。

僕は諦めて話を変える事にした。

「ま、そんな事よりこの世界の事と落ちてきたニンゲンについてももう少し詳しく聞きたいんだけど教えてくれないかい?」

「ニンゲンについて? パピルスから聞いてただろうが」

「盗み聞きとは感心しないねえ? でもまあそうだね。だから彼が知らない事を色々とね」

僕は含みのある笑いをサンズに見せつけてやると彼は警戒を強めて僕を見据える。

「……知らねえな」

「気が早いねえ、まだ僕は何も言ってないよ? そうだね、僕が聞きたいのは……ニンゲンの行方、かな?」

「……」

おっと、やっぱり何か知ってるようだね?

僕はゆっくりと近付き警戒するサンズへ質問を続ける。

「知ってるんじゃないかな? ニンゲンが何処にいるのか……既に死んでいるのか」

「……っ! し、知らないな。知っていたとしてもお前に話す義理はない、さっさと消えな」

サンズはこれ以上答えてはくれなさそうだった。

でも黙秘は立派な回答だからそれでよしとしようか。

此処で『最悪な時間』を過ごしたくは無いからね。

「まあ、僕からはこれ以上君に関わる気は無いから安心してよ。じゃあね怠け骨くん?」

「な……てめえ」

それだけを伝えると僕はサンズの部屋を出て行った。

リビングに出た僕は律儀に先ほどと同じ位置で待っていたパピルスに声を掛けた。

「ありがとね。パピルス」

「兄ちゃんと話したのか!? 兄ちゃんは元気だったか?」

「うん、たぶん近い内に外に出るんじゃないかな?」

「ほんとか!? ありがとうなそっくりさん!!」

僕がそう伝えるとパピルスは僕の両手を掴んでとても感謝してくれた。

ただちよつとだけ不満があったので僕はもう一つだけ彼に伝える。

「僕の名前はF r i s kだよ。次会う時はその名前で呼んで欲しいかな?」

次に会う時がリセット前だったらだけどね。

パピルスは快諾してくれたので僕は満足しながら彼らの家を後に出ていった。

*こんな時にこんな事言うのは不謹慎かもしれないけど……フリスク、楽しそうだね? 僕が楽しそう?

彼にそう言われて僕は口元に手を当ててみると、口角が上がっている事に気付いた。

言われてみれば皆と話してて楽しいと感じたのはいつ以来だろうか?

それこそ僕が生きていた時以来かも知れない。

確かに不謹慎だよな? 皆を救う為に頑張らなきゃいけない時だっというのに。

*でもさ、今まで頑張ってきた君なら少しくらい楽しんだり寄り道したって罰は当たらないよ。

はは、自分のしたい事は目的を果たしたらでいいかな。

でもそうだね、今は如何すればいいかも分からないし今回は自由に動いてみるよ。

*うん、じゃあ次は……

ま、順当に行くならアンダインに会いに行く事になるかな?

僕は滅多にしないスキップをしながらウォーターフェルへの道を進んでいった。

うおーたーふえる↓ほつとらんど

ウォーターフェル。

水音と綺麗な音楽が奏でる心休まる空間……なんだけど、今回は何時も以上に何も聞こえてこない。

原因は直ぐに分かった、人が居ない事に加えエコーフラワーからも音が聞こえてこないのだ。

「ここまで静かだと逆に落ち着かないね」

*うん、僕も思った。

何が音楽でもと思ったけれど一人で歌ってるのも恥ずかしいし止めておこう。

*ええ聞きたいなあ？

え、なに？自分の声が聴きたいって自分大好きっ子なの君。

*あうう……そう言われると恥ずかしいね。

そうだね、じゃあ早くアンダインに会いに行こうか。

まあ予想はしてたけどアンダインは草むらには現れなかったので、僕達は直接彼女の自宅に向かう事にした。

「アンダイン、起きてる〜?」

返事がない、ただの寿司のようだ。

*それはやめようよ……

残念、Friskには受けが良くなかったみたいだ。

キャラは鼻で笑ってくれたんだけどなあ。

*それはうけたの……?

どうだろ？それより今回も誰も出てこないなので突入する事に決めました。

というわけで早速ドアノブを捻って扉を開けようと引いてみる。

しかし鍵が掛かっているため残念ながら扉は開かなかった。

「開かないね。おーい！アンダイン開けてー!!」

呼び掛けながらドアノブを何度も引いてると不意に鍵が外され扉が開かれる。

中にはタンクトップ姿のアンダインが半目で僕を見ていた。

「なんだ……ニンゲンか……」

「おはようアンダイン、ちよつと話をしに来ただけでもいいかな？」

どうやら起きたばかりだったらしく目を擦りながら僕を家に招き入れてくれた。

そこまでは良かったが、何故かアンダインは不意に動きを止めた。

「ニンゲン……う？」

「ん？どうしたんだい？」

どうやら彼女は何かに気付いた様だ。

途端に目を見開いてわなわなと肩を震わせ始めた。

*あなたはイヤなけはいをかんじとった。

いや、そんな突然キャラみたいない言い方しなくても。

でも実際その通り——うわっ!!

直後、何処からか槍を取り出したアンダインが僕の喉元へ穂先を突き付けてきた。

「ニンゲンだどっ?! 貴様っ! どうやって逃げ出してきた!!」

あつぶなかつたあ……やっぱり彼女は油断ならぬね。

*反射的に下がって無かつたら当たってたね……。

彼女は僕を仕留める気だったのかまでは解らないけれど、少なくとも殺られる寸前だったのは確かだね。

僕は今にも刺されそうな状況のまま彼女の質問に答えた。

「えと、僕は君の知ってるニンゲンとは別人だけど……話を聞いてくれるかな？」

「なに、別のニンゲンだどっ？」

アンダインは変わらさず訝しげに僕を睨み付けている。

当然と言えば当然だけど、彼女に正直信じて貰う方法が思い付かないな。

「えと……どうすれば信じて貰えるかな？」

半ば思考放棄ではあるけれど、僕はアンダインに聞いてみる事にし

た。

だが予想外な事に彼女は少し悩んだ末にこう答えた。

「よし、ならばこの先のホットランドにいるアルフィーを連れて来い」
「アルフィーに？」

「ああそうだ、ニンゲンは私がアルフィーに引き渡したからな。アイツに聞けばお前があこのニンゲンか分かる筈だ」

アルフィーがニンゲンを引き受けた……これは何かキナ臭くなってきたねえ。

僕はアンダインの提案を呑み、僕達はホットランドへと向かう事となった。

ホットランドへ向かう道中、僕はアンダインの事を考えて溜息を吐いた。

この世界の殆どのモンスターに影響が出ているとはいえあんなアンダインは見たくなかったなあ。

普段の彼女なら僕を決してアルフィーに会わせようとしなかっただろうし、人の話なんて聞かずに標的である僕を仕留めようとしたはずだ。

だが、ここの彼女からはそうした熱い心が感じられなかった。

*仕方ないよ。彼女達は僕達の知ってる彼女達とは違うんだからさ。

それはそうだけど……まあ、前提から違うなら仕方ない……のかなあ。

*と、とにかく！皆から話が聞ければ何かわかるだろうし皆を救う方法が見つかるかもしれないよ？

……そうだね。とりあえず今はアルフィーに会いに行くのが先決か。

僕は一息ついて気持ちを落ち着けてから再び歩き出した。

それから十数分後、僕達はホットランド入口のウォーターサーバーの前で水を飲んでいた。

「……………つぷはあ……………はあ、暑い……………」

*身体もリセットされるから何度来ても暑いものは暑いよねえ。ねえ、寒いのは我慢したんだから此処は替わってよお……………。

*うくん……………暑いなら上を脱いだら良いんじゃないかな？

……………へ？い、いやいやいや！なに言ってるの!?!君の身体だよ!?!
脱げる訳ないでしょ！

*僕の身体だから良いんじゃないの？僕は全然構わないよ。

僕が構うの！ってどうかそれこそ君が替わるべきだってば！

*え？だってキャラの身体の時……………

ちよつ、それは忘れなさい！君がそれを知ってることをキャラにばれたら鈍器でソウルまで歪むレベルで殴られ続けるよ!?!

*……………わ、わかった。忘れる。

はあ……………まあ確かに子供の身体だし君もキャラも大差はないけどね？

でも気分的に落ち着かないしあの時だって必死だっただけで羞恥心が無かった訳じゃ……………それはまあいいか。

それよりも研究所は直ぐ近くだし急いで行くとしようか。

研究所は自動ドアだったので気にせず中に入ると中は少しだけ涼しかった。

奥に進んだ僕はアルフィーを探し始める前に冷蔵庫の中の即席麺をポーチにしまった。

*ドロボウっ！

いやいや君だつて………あ、ごめんなんでもない。

そう言いながら彼の記憶を見返した僕は言葉を失った。

彼は人の物を持っていかない所か、モンスタ―が落としたりお金もキツチリ返すわ落ちてる物は全てロイヤルガード達に届ける程のお人好^ホしだったのだ。

そんな持ち物が終始パイと包帯とぼうきれだけの彼に言われてしまつては言い返しようがない。

それに言い返しても一步も引かないのが解っているので、僕は諦めてポーチからそつと即席麺を冷蔵庫にしまう。

*あ、そういえば物音は聞こえないしこのフロアには居ないんじゃないかな？

どうやら僕が冷蔵庫を漁っている間に聞き耳を立てていたらしく、僕が即席麺をしまったのを確認した彼は満足そうに頷いてからその事を伝えてくれた。

このフロアに居ないとすると何処にいるだろうか。

僕は周囲を見渡しているとふとガラス扉が目にとまった。

「他の所も考えられるけれど……アルフィーと言えば此処かあそこかなつて気がしないかな？」

*そうだね……後はウォーターフェルのゴミ捨て場だけど、この世界では考えにくいかな？

あゝ、まあそつちはあそこに居なかつたら行ってみようか。

僕はガラス扉を開いてエレベーターの中へと入っていく。

さあ！いざゆかん真研究所へ！！

*おー！

しん・けんきゆうじよ↓にゅーほーむ

真研究所に入った僕達はこの世界に来て何度目かになる自分の知ってる世界との違いに戸惑っていた。

ここの研究所は廃墟みたいな雰囲気があると聞いていい程感じられず、真研究所というより新研究所という方がしっくり来るほどであった。

照明も真つ白な壁や床に反射してとても眩しい。

さて、何処にいるかな？

取り敢えずいつもの部屋から探して行こう。

*ねえ、あつちから誰かの話し声が聞こえるよ？

決意抽出機へ向かう廊下で F r i s k がそう言った。

君は前からそんな耳が良かったのかい？

*そういえば。以前はそんな事なかったと思うけど……なんでだろう？

どうやら本人も分かっていないらしい。

それじゃあ誰にも分らないし考えても仕方ないか。

僕が彼の案内に従って決意抽出機の横を通り過ぎビデオがしまつてある部屋の扉に耳を当てた。

『……………』

「うん……………だ……………うぶ……………アン……………ン……………」

この声はアルフィーかな？

誰かと話してるようだったが、電話越しなのか相手の声までは聞き取れなかった。

暫く様子を見ていたが、話し声が聞こえなくなったので僕は扉を開いて中へ入る。

「えっ!? にに、ニンゲンツ! どどどどうやってこの研究所に入ったの……………」

「へっ? 普通に研究所のエレベーターで降りてきただけだよ?」

「あ、あれっ!? ももしかして切り替え忘れてた……………そんなはず……………」

僕がここに来るのが予想外だったのかアルフィーは取り乱しながら

らブツブツと何か呟いていた。

「ねえ？そんなことよりさっきの電話つてもしかしてアンダインだったり？」

「え、ええ……そうよ。あ、あなたの話はアンダインから聞いたわ」

おお、それなら話が早そうだ。

僕はアンダインに話した事を思い浮かべながら早速話を切り出した。

「それは良かった。それじゃあアンダインには僕が君達が知ってるニンゲンじゃないって伝えて貰えるのかな？」

「……………そうね、それはあり得ない事はアンダインに伝えたわ」

ほうほう、それなら目的の一つは達成したね。

けどアルフィーにはもう一つ答えて貰いたい事があつたんだよねえ？

*えっ？

「ありがと。そしたらもう一つ聞いてもいいかな？」

「え、ええ。なな何かしら？」

僕は薄く目を開き口元を吊り上げつつアルフィーに本題を訊ねる。

「その僕に似たニンゲンはどんな最期を迎えたのかな？」

「……………ええと……………その……………」

アルフィーは青ざめた様子で目を逸らして口籠もった。

*ね、ねえ……………やっぱりやめようよ。

何を言ってるんだい？これはこの世界を救うのに必要な事だよ。

ニンゲンとアズリエルが行方不明になってからモンスター達は変わったんだ。

どうだい？この二つが無関係に思えるかい？

*た、確かに……………だけど……………

今回は好きにさせてくれるんでしょ？それとも今から替わる？

*……………そうだったね、余計な口出ししちやったかな。

別に余計だなんて思わないよ。

ただこの先に繋げる為にも此処フリスクの僕がどうなったかは知らなきやならないと僕が思ったから聞くだけさ？

僕が間違ってると思ったら何時でも言ってくれて良いからね？今度はちやんと話し合おうよ。

*フリスク……そうだね、折角こうして逢えたのにまたすれ違いたくないからね。

Friskが僕へと笑い掛けたので僕はウインクで返すと、アルフィーの方へ向き直す。

アルフィーは未だに狼狽えていたが、やがて大きく深呼吸をすると伏し目がちなながらも話し始めた。

「彼女が捕まえたニンゲンは……そう、貴方の言う通り……亡くなったの」

この話をした時のサンズの動揺具合で何となく察していたけどやっぱり死んでいたみたいだ。

パピルスには話せないかなあこれは。

サンズが止めるだろうし僕だって彼にこんな事実は伝えたくない。

そんな事を考えながら話の続きを聞いていたがここから先は更にパピルスには伝えられない真実が眠っていた。

「……ニ、ニンゲンは……博士の実験の犠牲になったのよ。ただニンゲンは皆に愛されていたから私と博士とサンズ以外には行方不明って事にしてるの。アンダインにも死んだ事は伝えていないわ」

「そっか……その、博士……って？」

その言葉を聞いた僕は背筋に嫌な寒気を感じながらその名を訊ねた。

「あ、あなたが知ってるか解らない……けど……W. D. Gastor……ガスター博士の事よ」

*……っ!?ガスター……!」

ちっ、観測者もどきも本気だっけ事かな。

まさか奴が自分で世界を掻き乱すなんて思わなかったよ。

僕は苛立ちを抑えられず親指の爪を強く噛んでいた。

「ガスターね。彼の実験がどんなものだったかは聞いてるか？」

「え?ええ……確か、それぞれの時空間連続同位体の情報を共有出来る記録媒体空間の創造……って言っていたわ」

……………？

*……………？

「ええと……………ごめん、もうちょっと解りやすい言い方ってあるかい？」
「あ……………ごめん。私も全ては把握してないんだけど……………此処とは似た別の世界があると仮定して、その博士の記憶等の知識を全てを一点に集約し何時でも確認出来る空間を作る実験を行ったの。その最終段階として博士は私達の静止を振り切り抽出したニンゲンの決意、そしてモンスター達の気力と共にコアへ飛び込んで行ったわ。」
皆の無気力はその実験が原因か。

それにしても別世界の記憶の共有か……………そういえば以前本人がそんな事を話していたっけ？

あの時はガスターが元々そういつた存在なのかと気にして無かった、だけど世界を一つ狂わせてまでその空間を作りたかったのであればその理由はぼくたち僕達にあると見て相違はなさそうだね。

*だとすれば一体何時から僕達に目を付けていたんだろう？

わからない……………けど、考えられるのは最初に屑が僕の前 に現れた時か……………君が僕を飛ばした時か。

他にもあるだろうけど可能性としては後者が一番あり得るだろうね。

*えっ！そんな最初の頃から目を付けられてたの!?

たぶんね？僕達の存在に気付くような事象なんて僕が世界軸を超えた時くらいしか考えられないからね？

ただこれは想像以上に不味い状況に落とされたようだね。

僕は先の事に頭を抱えなくなる気持ちを抑えながらアルフィーにお礼を述べる。

「ありがとうアルフィー。お陰で良く分かったよ」

「あ……………あの……………ここ、こここの事は……………」

「大丈夫だよ、アンダインや他の皆には言わないから安心して？」

アルフィーの言わんとする事を理解した僕は笑顔でそう答えるとサムズアップしながら振り向き、部屋を出て行った。

アルフィーと別れ、真研究所を離れた僕はニューホームへ続く道を歩いていた。

*これからどうするの？

ん？ああ、このあとは一応アズゴアに挨拶してから暫くこの世界で何が出来るか試してみるとするよ。

結界を抜けたり壊したりしてもリセットされる可能性があるし、そもそも結界を壊すには外で人間のソウルを六つ集める以外に方法がなさそうだからね。

*そつか……そうだよね。

今までの彼はアズゴアが集めたソウルをアズリエルが使つてバリアを壊していたからその辺りの認識が薄いのかも知れない。

その事実を理解したRiskは悲しげに俯いていた。

他人を傷付ける事を拒み続けた彼にとっては少々酷な事実かもしれないが、これを暈してはいけない。

誰の犠牲も無く皆を救うなんて出来ない。

モンスター達の解放は六人の人間の犠牲を元に完遂するという事を僕等やモンスター達は決して忘れてはならない。

*彼らを救う事は……

皆を地下世界に閉じ込めて置くのなら出来ない事はないよ？

僕や君が落ちた穴を結界で閉じれば子供が落ちて来る事は無くなる。

……もしかしたらそっちの方がお互いにとって良いのかも知れないけどね。

*……そうだね。ありがとう、僕は大変な思い違いをしていたよ。うん？

*僕は君と最初に皆を解放出来た時には君さえ救えればと思っていた……けど、それまで此処に落ちてきた子達やアズリエルもあの時点では救えていなかった。

えと、だからそれは避けられない犠牲で……

*フリスク、本当は君の望みに口を挟みたくはないんだけど……僕のお願いを聞いてくれないかな。

……言ってみなよ。

*僕は……僕は全ての世界の全ての人間とモンスターを救いたい。

それは……駄目だよ。

*も、もちろん簡単じゃないだろうし……君が嫌なら強制はしないよ。

違うんだFrisk、その思想は嘗て僕がやろうとしていた事と同じだと理解してるかい？

君は僕が世界を壊さないと信じてたから身体を貸してくれたんだろうし僕も今更世界を壊そうとは思っては居ない。

けどそれが君の願いなら……僕は。

*ち、違うんだ！僕はただ……

Frisk！君が望む犠牲の無い世界というのが自分の知覚出来る範囲なら僕は協力する。

だがこの世界やその他の世界全てを望むのならそれは世界のあるべき姿に対する否定だ。

それを理解してなお君がそれを望むのなら僕は直ぐにでも全てを壊そう。

*でも……僕等や周りの皆が救われても他の世界の僕等が皆を傷付けてるのを知らないふりなんて……

知らないふりなんかじゃない、僕達は知り得ない事なんだ！

僕達はあるくまでも別次元の世界が存在する事を知っただけでそれ以上は全て想像に過ぎない！

だから……君が気に病む事じゃないんだ。

*……ごめん、少し考えてみるね？

そう言ってFriskは黙り込んでしまった。

はあ……知覚出来る範囲ってだけでも世界線を三つも跨いでるから簡単な話じゃないんだけどね。

ただまあ、本当にやるのであれば再び奴に会って話をしなければな

らないかな。

彼の事は心配ではあるけれど、一先ず放っておく事にして僕は
ニューホームへと入って行った。

にゅーほーむ↓さいごのかいろう

ニューホームへ入った僕は部屋の中を一つ一つ探索していく。しかし此処では特に収穫となるような物は無く、アズゴアもこの家には居なかった。

ハートのロケットが有ったらお守り代わりになるかと思っただけで、普通に考えれば死んだ事になってないのに部屋にあるはずないか。

仕方なく僕はニューホームを通り抜けて最後の回廊へと向かう事にした。

もし彼が僕を警戒しているのであればそこで待っている筈だ。

暫く歩いて漸く最後の回廊へ入った僕は彼が居る事を期待し決意を漲らせると奥へと進み始める。

結果として彼は何時もの場所で僕の事を待っていた。

「よおクソガキ、また会ったな」

「あは、やっぱり来てくれたんだね。サンズ」

目の前に立ち塞がるのは一部の隙もない状態で僕の一举一動を観察するサンズであった。

僕はそんな彼に両手を開いて無抵抗を示したまま一歩ずつ近づく。

「本当は君に協力して欲しい事があったんだけど、パピルスの前じや話せない内容らしいから君が来る様に僕を警戒させ——」

「それ以上近付くなっ！」

僕が用件を伝えていると突然僕の目の前に骨が柵の様に生えてきた。

即座に足を止めた事で骨が刺さる事は避けられたが、これ以上近付くそうにない。

まあでも彼が寝ぼけたまんまじゃない事が確認出来たから話を続けるでしょう。

「それで君に協力して貰いたい事なんだけどね……ガスターが行った実験を僕に施して欲しいんだ。」

「……アルフィーから聞いたのか？それとも最初から知ってたのか

？」

僕は彼の質問に前者であると答えた。

すると彼は眉間に手を当てて暫く考えていたがやがて一つ質問をしてきた。

「オマエの目的は何だ。自分らの知識を共有して何がしたい」

目的によつては此処で殺すと彼の顔にはつきりと出ていた。

ふうむ……目的か。初めはガスターと同じ次元から元の世界へ戻れないかと考えていただけだった。

しかしガスターの記憶共有能力が手に入ればFriskの願いもあるいは……いや、結局干渉しても決意を抱くのはそれぞれの僕達であつてそこまで強制出来る保証はない。

*……………

それでも、僕達がいた世界と僕が飛ばされた世界を救うくらいなら出来るはず。

*フリスク……………！

僕は考えを纏めてサンズへと自分の答えを伝えた。

「僕の目的は元の世界に帰る事、そして僕らが関わった世界への干渉だ！」

「あー………そういやオマエさんは別世界から来た設定だったな。まあそれは良いか………だが」

サンズは信じてるのか信じていないのか解らないがうんうんと頷いた。

協力してくれるのかと思ひ一安心し掛けたその時、飛んできた骨が僕の頬を掠めた。

「俺達の世界を余所から好き勝手に干渉されると解つて協力する訳ねえだろ？」

おつと、言い方が悪かつたかな？

「待ちなつて！干渉つて言つても僕は世界を救おうと——」

「へっ！はいそうですかとでも言うと思つてんのか？テメエみてえな狂ったガキは、地獄で焼かれてもらうぜ」

「……………へ？おわあ!？」

僕が後ろに飛び退いた直後、元いた場所へ二本のガスターブラスタ―が交差していた。

続けて十字に放たれるブラスタ―を左に避けつつサンズへ呼びかける。

「サンズっ!?僕は争うつもりは無いよ!話を——つてちよつと!」

だが彼は僕の話など聞く耳など持たず攻撃を続けてきた。

*だからやりすぎだったんだよ!このままじゃ協力なんて望めないよっ。

怠け骨だからLOVEが1の僕に攻撃してこないと思ってたのになあ?

何処が無気力なんだよ!いつも以上にやる気じゃないか!

*もしかして、関係者……だから?

ははっ!それがほんとなら随分と身内鼻根なモンスターなんだね?
?

だが言われてみればアルフィーとパピルスも普段と変わらない感じだったか。

そう考えればこの世界はまだサンズが諦観の念を抱く前って事だ。

………これは僕の失敗だ。

*それはいいけど……本当にどうするの?

うーん……予定は違うけど一回試しに行こうか。

最後のセーブポイントはサンズに会う前だよね?

*え、たぶん……でも本当に出来てる保証はないよ?

大丈夫大丈夫!ここでも世界の法則はきつと変わらない。

その世界で一番決意が強いものが力を使える筈だ。

僕は動きを止めてサンズが放つ無数の骨を受け止める。

この世界では業を背負って居ないので二十本刺さるのを待った。

「なっ!?一体何を考えていやがる!」

僕の行動に違和感を覚えたサンズが別の骨をぶつけて地面へ落としました。

とっさの行動にしては流石だと言いたいけど残念ながら手遅れだよ。

「また会おうね、サンズ！」

「はっ!？」

僕は走り込み床に刺さった骨へ自ら飛び込んだ。

パリーンツ

ーーーーさいごのかいろーーーー

はあ……ごめんね *Frisk*。君の身体を傷付けてしまった。

*気にしないで、そんな事より痛みは大丈夫かい？

はは……ありがとう、大丈夫だよ。

それに予想通りここから始められた。それじゃあ試しに行こうか。

僕は最後の回廊を出てホットランドへ戻ろうとした時、背後から呼び止められた。

「おい、ひとに来るように仕向けといてテメエは何処に行こうってんだ？」

どうやら僕は此処へ入った時から見られていた様だ。

僕はサンズの方へ向き直り答える。

「えくと、ホットランドのコア制御室で転んだ時に大事な物を落としてしまったようなんだ。すぐ戻るからちよつと待っていてくれないかな？」

「制御室？はあ……オマエが変な事を仕出かさねえ様に俺が連れてってやるよ。こっちだ」

お？予想外だったけどこれは楽で良いね。

「えく……くるのお？残念……まあ忘れ物は本当だからお願いしようかな」

「へっ、悪知恵を働かせたらしいが残念だったな。ほら、手に掴まりな」

ぷくくつ……今ドヤ顔されると笑いそうになるから止めて欲しい
ンだけど。

こうして僕は簡単にコアの制御室まで入る事に成功したのだった。

———コア制御室内部———

「ほらよ、着いたぜクソガキ」

*あなたは到着の早さに決意を漲らせた。

「ありがとう」

僕は《彼》に感謝を述べると、橋の手摺りに手を掛けた。

「そつちに落としたのか？じゃあコア内部に落ちて溶けちゃったん
じゃねえのか」

「そうかなあ……」

僕はサンズのセリフに反応するように手摺りから顔を出して下を
覗き込む。

下は溶岩がコポコポと音を立てており落ちたモノは跡形も残らな
いだらう事が容易に想像出来る。

*ねえ……本当にやるの？あんな所に落ちたらきつとすぐく熱い
よ？

熱いどころじゃあないだろうけどね……まあやるさ。

「ねえサンズ、ちよつと探してくるね」

「はあ!?ちよつとまておいつ!!」

僕はサンズに一声掛けると一気に手摺りを乗り越えコア内部へ落
ちていく。

だが彼は直ぐに我に返り僕を重力操作で落下を止めた。

「何考えてやがるクソガキィ！」

「邪魔しないでっ」

邪魔してくる事を想定していた僕はポーチから取り出した玩具の
ナイフを全力でサンズに投げつけた。

彼は反射的に攻撃を回避したが、慌てて避けたが故に僕に掛かって
いた重力操作が切れる。

「しまっ……！」

「また会おうねサンズ？」

別れの挨拶を済ませた直後、僕は全身を焼き尽くす痛みと共に F r i s k の身体は消滅した。

パリーンツ

……コア制御室内部く2回目く……

「ほらよ、着いたぜクソガキ」

ああ、やっぱり駄目だったかあ……ごめん。

*やっぱり協力して貰わなきゃ駄目なんじゃ。

かもね……ごめん、もう少しだけ試すよ。

*……無理はしないでね。

大丈夫大丈夫。屑とか本気サンズとかに散々殺されて来たからこれ位問題ないよ。

そう言つて僕は再度コア内部へと飛び降りて行った。

パリーンツ

……コア制御室内部く10回目く……

「ほらよ、着いたぜクソガキ」

ごめん……一旦止めよう。もう少し情報を集めてから試そうか。

リセットはせめて全員の話聞いてからにしようと思っただけど、警戒してるサンズを殺さずに抑える手間を考えるとメリット薄いしね。

*まあ、それは骨が折れるよねえ。

……え、なに？そういうの好きなの？

*……いや……まあ、ちよつとは。

ふくん？わかった。じゃあ次は君にサンズの交渉を任せるよ。

*ええっ!? 僕……ぼくは無理だつて……

大丈夫、行動は僕がするからさ？
じゃあ頼んだよ！

「おいっ、待てガキイ！」

パリーンッ

コンティニュー リセット

NERVELESS TALE / GENOCIDER TALE

※※※※※※※※※※※※※※※※

NERVELESS TALE

※※※※※※※※※※※※※※※※

あれから何度かリセットを試みたが結果的にこの世界から抜け出す事は叶わなかった。

他にも出来る事がないか行動してみたけど進捗状況は芳しくない。まずサンズ達だけは気力を失っていないという推測は外れていた。パピルス以外は誤差はあれど皆気力を失っている事が分かった。

それが分かったのは2度目と3度目の時。Friskの協力を得てサンズに警戒されずに話せるようになった所までは良かったが、その後彼は最後の回廊に現れる事は無かったのだ。

そこで僕が彼に再度ガスターの実験の施行を頼んだ所、最初と同じ様に警戒されそのまま『最悪な時間』が始まってしまった。

そこを頑張って切り抜けた僕はサンズが疲れたところで再交渉を行い何とか実験の内容を聞き出したが、彼が知ってる限りでは人間のソウルを取り込んでコア内部へ飛び込んだだけだという事らしい。

因みにアズゴアはその実験に関与していなかったので有用な情報は得られなかった。

仕方ないのでサンズの話聞いた後、僕は今度は吐き気を抑えて1,000回程飛び込んだが結局今の所有益な発見は無い。

……と、ここまでが進展が無くなって久しい今の状態である。

このまま数億回程飛び込めば何か変わるはず。

過去の実績を盲信し、それ以外を考えないようにしてたが、1、500回を越える頃には僕の心は弱り悲鳴を上げていた。

僕が彼の身体をコア内部へ放り込む度に背中から罪が這いよるのを感じる。

LOVEは上がらないのに業だけが積み重なっていく嫌な感じ。

僕の中で今まで幾ら皆を殺し尽くそうが然程感じなかった罪悪感が今は押し潰されそうな程重く押し掛かってくる。

ごめん、Frisk……僕は情けないよ。

君を殺す度に決意が鈍って行くような気がするんだ。

*気に病まないでフリスク。これは僕の意志でもあって君のせいじゃない。

僕は……僕は間違っていた。

いつか君の事を手を汚した事もない癖になんて思っていたけれど、それは僕も同じだった。

僕は何時だって他人の身体で他人を殺して来ただけなんだ。

だけど此処に来てからは間違いなく僕は自分の手で君を殺し続けている。

どちらも同じ僕の決意によるものなのに間接的に行うのと直接手を下すのでこんなに違うなんて僕は知らなかった。

*フリスク……

ごめん……ちよっとまってね……解ってる……僕達の目的の為にやらなきゃいけない事……だから……ごめんなさい。

僕が再びコア内部へ飛び込もうとした時、突然身体が動かさなくなった。

*フリスク……無理はしないでって言ったでしょ？少し休もうよ。パピルスやママの所に戻ってさ？

でも……僕達は何時まで此処に居る訳には……

*ガスターの目的を考えたら急ぐ必要は無いらろう？それに君が今無理して決意が挫けてしまったらそれこそ取り返しがつかなくなるよ。だから戻ろう？皆のもとへ。

Frisk……ごめつ……あ……ありつ……がと、う。

「アズ！今からこの時空を壊すぞ！」

「はあ!?何言ってるの!そんな事したら何処にどんな影響が出るか解らないんだよ!?危険過ぎるよ!」

私の発案に当然の様に正論で反対してくるアズリエルに若干苛立ちつつも私は冷静に理由を話してやった。

「いたっ!?死ななくても痛いんだからそれ撃つのは止めてよっ!」

ただし弾なかよしカプセルをぶっつけながら。

「馬鹿、よく考えろ!奴はこの世界を維持するのが目的だ。つまりそれを脅かす行動をとれば阻止しに来るはず!そうだろ?」

「うう………いったあ………確かに境界の役割も担ってる時空なんかを壊したらその余波が世界全体に計り知れない影響を与える事になるけど………ほんとにやるの?」

アズリエルは乗り気じゃなさそうだが別に構わない。

どうか此奴が本気で壊しに掛かったらアイツが来る前に時空が崩壊しかねないからな。

「壊すのは私一人でやる。アズはアイツが来た事を伝えるのと万が一アイツが来る前に時空が崩壊してしまう場合に私を連れてその時空を離れてくれればいい」

よし、そうと決まればさっそくやるか。

私はナイフに決意を漲らせ、虚空へと赤い斬撃を飛ばす。

「ええっ!僕まだ何も言ってないよっ!」

奴の言葉は気にせず私はどんどん虚空へ斬撃を飛ばして行く。

数十回程繰り返し返していると何処からかヒビが入るような音が聞こえて来た。

「本当に時空を壊そうとしてるのお!」

「当たり前だ」

私は止まる事無く全方位に無数に斬撃を飛ばした。

たまにアズリエルへ飛んで行く斬撃も有ったが何れも器用に避けていた。

やがてそこいらにひび割れが生じて来た時、アイツは遂に姿を現した。

「やれやれ……君の其の奇行も彼の影響かな？」

「何の事だか解らん。そんな事よりガスター、貴様がFrisk達を飛ばした方法を教えて貰おうか」

私は時空の傷を修復している目の前の奴へ直球で聞いた。

「はは、私が教えるとも？」

当然だが奴に教える気はなかった。

問題は無い。それならば力づくで聞き出すだけだ。

「アズー奴の動きを封じろ！」

「う、うん。わかったよ！」

アズリエルがガスターの方へ手を翳した瞬間、奴の周囲の空間ごとこの時空から切り離され奴の動きを封じ込める事に成功した。

「む……………？」

私は動けなくなった奴に近付きナイフを突き付けて再度訊ねた。

「もう一度聞こう。今すぐ私達に世界線を越える方法を話すか、このまま死ぬまで私に切り刻まれたいか」

先の時とは違い同じ時空に位置する存在同士である今ならこのナイフも奴の身体を切り付ける事が出来る。

奴にもそれは解っている筈だがそれでもなお余裕の笑みを崩さずに答えた。

「ふふ、私は君たちに話す事などない。無論、此処で死ぬつもりもないがね？」

「ふんつ、此処から何か出来るのなら見せて貰いたいものだ」

そう言つて私は突き付けたナイフをガスターへ振り下ろしたが……

「キャラっ！離れてえっ!!」

ナイフが奴の身体に触れるか否かのその時、アズリエルが叫びながら私の身体を押し飛ばした。

「なっ!?アズーきさ——」

「どうやら彼は気付いた様だが……遅い！」

吹き飛ばされる中、いつの間にか私の背後に立っていたガスターが両手を開いて待ち構えていた。

その瞬間、私とアズリエルはF r i s k達と同じ様に暗闇に包まれてしまった。

FALSE TALE

どこまでも続く深淵に木霊する一体の男の声。

「これで今回の異分子の隔離は全て完了した。後はこの実験サンプルを元に決意の排斥手段を確立出来れば、私の異分子不活性化装置が完成する」

男が何かを始めると、何もなかった空間に二つの映像が虚空から突如出現した。

映像の一つには一人のニンゲンの男の子、もう一つにはニンゲンの姿をした女の子とフサフサな毛並みのモンスターの男の子の二体とモンスターの方に絡みつく黄色い花が映っていた。

「さて、過ぎた決意を挫けるのは無気力か虚実の幸福か」

男は何処から取り出した椅子に腰掛け二つの映像を興味深げに眺めるのだった。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

FALSE TALE

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

窓から差し込む日差しが顔にかかる。

私は眩しさから逃れる為に近くにある毛布に顔を埋めた。

「う……………んっ……………」

毛布の暖かさに思わず頬が緩む。

暫くその温もりを感じていると突如毛布が私に降り掛かって来た。

「うぐぐ……………く……………苦し……………」

ここまで来ると暖かいというより最早暑苦しい。

私は毛布を押し退けようとするが毛布は全然動かさなかった。

「うう……ん……ぐ」

一向に動かせない毛布に苛立ち始めた私は左足で毛布を強く蹴りつけた。

「うぐう……い！」

漸く毛布は私を離れドスンという大きな音を立てて床へ落ちた。

……ドスン？

幾らなんでも毛布を落とすただけでそんな音が鳴るだろうか。

私は寝惚け眼を擦り、落ちた毛布を見下ろした。

「ううくん……あ……おはようキャラ」

「……………」

「うぐう！」

私は思わず床に転がる毛布アズリエル・ドリーマーだっただけものを踏みつけていた。

アズリエルは苦しそうに呻いた後、不満を漏らしながら上半身を起こた。

「なんだよお、酷いじゃないか」

「そんな事はどうでもいい。それより何故お前が私の布団で寝ているっ」

「……ねえキャラ、その質問も可笑しいって気付いてる？」

私がアズリエルを問い詰めていると、不意に彼の右腕から彼と似たような声が聞こえて来た。

声のする方に顔を向けてみると其処には見知った喋る黄色い花、フラウイーがジト目で私を見上げていた。

大分頭が冴えてきた私はフラウイーの指摘で漸く状況を理解し始める。

「つまり私とアズはあの後ガスターに此処まで飛ばされたと考えるのが妥当か」

「そうみたいだね。でも困ったな……どうやらこの世界に飛ばされる前に君以外のソウルは取り除かれてしまったみたい」

アズリエルから人間のソウルを取り除いたか。

ふっ、それはつまり人間のソウルを七つ揃えた状態の此奴なら世界線を越える事が可能だと言っているような物だ。

ならば此処が何処かなどどうでも良い事だ。

「アズ、準備はいいか。人間のソウルを集めに直ぐ出るぞ」

「う……うん。そう……だね」

「キヤラ、こんな甘ちゃんに頼むより僕を頼ってよ！」

私は無粋にも割って入って来たクソ花を掴み上げてはつきりと伝えた。

「クソ花がっ。私を二度も裏切っておいて良くもそんな口が利けるなあ？」

茎を握る力を徐々に込めていく。

「うぐ……ご、ごめんよ。あの時はアイツの事を君と勘違いしていたんだ」

「それはそれで不愉快だな……まあいい。どちらにしろ私は貴様を信用していない。さっさと失せろ」

私はクソ花を放り捨てる。

クソ花は寂しそうな目で私を見つめていたが、私が睨み返すと直ぐに引っ込んで行った。

「……つたく」

「あれ？でも確か親友って彼の事だって……」

「うるさいっ！余計な事考えてないで行くぞっ」

全く、面倒な奴らだ。

部屋を出たが部屋の中と同様記憶にない場所であった。

だが一つだけ解った事がある。

それは窓の外から差し込む光が人工的な照明ではなかった事だ。

「これは……まさか」

「たぶんだけど、外の世界じゃ……ないかな？」

というよりそれ以外考えられないだろう。

だがこれはある意味都合が良い。

町か村か解らないが外であるなら必ず近くに人間は存在する。

私達は人間を探しに行く為、外へ続く扉を探し始めた。

だがそんな私達を止めたのは意外な存在だった。

「おはよう二人とも、もう朝ごはんの用意は出来てるわよ？」

「え……ママ？」

私達のママ、トリエルが階段を上がって来ている所だった。

「どうしたの？まるで幽霊にでも会ったみたいな顔して」

「あ……えと」

「解った、今から行くよ」

「ええ、はやくいらっしやい」

言葉を詰まらせるアズリエルに代わり私が返事をする、ママは満足そうに階段を振り返り降りて行った。

私は未だ放心状態のアズリエルを肘で小突いて正気に戻す。

「早く降りるぞ、アズ」

「う、うん」

奴に連れて来られた世界はどうやら既に結界を壊した後だという事が解った。

だが私がこの世界のフリスクを操っている訳でもなくアズリエルも私のソウルを持ったままの姿でいる。

更にママが今の状況に何ら違和感を感じていない事から二つの推察が立てられる。

一つは元々この世界線では私とアズリエルが生存したまま地上に出る事が出来たのか。

もう一つは……可能性としてはこちらの方が高いが、ガスターによる催眠によるもの。

前者なら大した問題はないが、後者なら少々厄介だな。

私はこの後の事を考えながら久しぶりのママの手料理を堪能した。

アズから奪ったエビフライは格別に美味だった。

それから少し離れたアズゴアの家に遊びに行ったり近くの山を散

策したり時間を忘れて楽しんだ。

そして帰りが遅いと二人してママに叱られたのだった。

……違う、そうじゃない。

二日目の朝。

私は昨日の自分を振り返って思わず頭を抱えた。

そして直ぐに対策を立てる為にアズリエルを叩き起こした。

「起きろアズー！つうか私のベッドに入ってくるなって言っただろ！」

「いう……な、なに？あ……ご、ごめんキャラ」

私は寝惚け眼を擦りながら頭を下げるアズリエルに手刀をかまして話を切り出した。

「そんなことよりっ！早くソウルを集めに行くぞ！」

「え、でもママの朝ごはんを食べてからでも……」

ママの朝ごはん……いや、しかし……

「……………食べたら直ぐ出よう」

やっぱりママのご飯は美味しかった。

アズからはから揚げを一つ勝ち取った。

ご飯を食べた後は公園に行つて歳の近い人間の子と夕方まで遊んだ。

いっぱいあそんだあとにたべたママのごはんはとってもおいしかった。

このままじゃ駄目だ。

三日目の朝。

ママが今日から学校だから早く起きなさいと部屋に入って来た。

私は目を覚ますと当然の様に私のベッドで眠るアズリエルを引きずり降ろし、窓から放り投げた。

「はぐあ!?! なななに起きたの! キャラ!?! どうしたの! 何処にぐふう!」

私も窓から飛び出してアズリエルが落ちた所へ飛び込む。

これでいい。後は人間のソウルを集めてこの世界を抜け出す。

なぜだか解らないがこの世界は早く抜け出さなければならぬ気がする。

「アズ! ボサつとするな、早く行くぞ!」

「え……で、でも……」

「でもじゃない! 直ぐに此処を出るぞ」

私は視線を逸らそうとするアズリエルの手を引いて庭を出ようとした。

だがアズリエルの方を向いていたせいで背中に何かふかふかしたものにぶつかってしまった。

「うっ……こんな所に布団が干してあるなん………て?」

「……………」

「マ……マ……?」

私が前を向くとそこには仁王立ちで私達を見下ろすママの姿があった。

ママは何も言わずに下を指さした。

恐る恐る私とアズリエルは下を見ると、そこには花が土を被つてへこたれていた。

「ママ……えと……」

「二人とも、学校が終わったら真っ直ぐ家に帰ってきなさい。良いわね?」

「……………」

気まずい朝食を終えた私達はママに連れられて学校へと向かった。

周りは皆初めての学校で浮足立っていたけれど、私とアズリエルはそれどころでは無かった。

まず理事長の挨拶で出てきたママにジツとひと睨みされ竦み上がってしまった。

そのまま始業式を終えて明日からの予定を聞かされた私達は下校後、全速力で家に帰った。

そして後から帰ってきたママに花壇を荒らした事と二階から飛び降りた事を三時間しつぽりと叱られたのだった。

それでもママは最後にはもうしないという約束と引き換えにシナモンバタースコッチパイを作ってくれた。

流石にアズリエルから盗れる空気では無かったが泣きそうな程おいしかった。

なんとかしないと……

どうして？

私達は幸せなの？

解らない……

私は……

六十三日目の朝。

今日もアズリエルを私の布団から叩き落とす事から始まる。

……まあ、休みだし最近寒くなつて来たから少しくらい良いか。

そう結論付けた私はアズリエル上質な毛布に包まって二度目の眠りにつくことにした。

……

……

……

……

……

キャラ……

誰かが私の名前を呼んでいる。

起きろキャラ！

これは……アズ？なんだよ、今日は休みなんだからもう少しゆっくりしたって——

起きろバカキャラ！

……ふ、貴様が私の布団にいる事を許してやっついていれば調子に乗りやがって。

怒りで眠気が飛んだ私は目を擦りながらアズリエルを力一杯蹴り

飛ばした。

「うぎやあ！な、なに!？」

「アズリエルよ、私を馬鹿呼ばわりするとは覚悟出来ているのだろうか？」

*アズリエルに対する怒りで決意が漲った。

「き、キャラ？何を言ってるの？僕がそんな事言うはずが——」

*ナイフは何処だ。

「キャラア!?!落ち着いてっつてばあ!」

「ちよつと二人とも、僕を無視しないでくれる?」

不意に聞こえてきた声に私は足を止めて振り向いた。

するとそこには黄色いクソ花が生意気にも溜息をついてこちらを見ていた。

何か前にもあつた気がするがまあいい。

「フラウイー、まさか貴様か?私を馬鹿呼ばわりしたのは」

「だ、だってそうだろう!いつまでこんな所で足踏みしてるのさ!」

足踏み?一体このクソ花は何を言っているのだろうか。

「この世界から私が出る必要が何処にある」

「な……なにいつてんだよ。此処は君が本来居るべき場所じゃないだろう!」

その通りだ。この世界は本来私とは全く関係ない世界だ。

過程などに一切関わらず、結果だけを得ている状態である。

だが、その何が悪い?

アズリエルもママもアズゴアも他のモンスターも地上で幸せな生活を送っていて、そこに私の居場所がある。

「元の世界で今の様な事が起こり得ると思うか?」

「それは………解らない。けど、君がやろうとしているのは現実から逃げているだけだ!君はいつから偽物の幸せなんか甘んじる様な軟弱者になつたんだい?」

フラウイーは私を責めるような目で言ってきた。

……ちつ、裏切者の癖に。

「おい、貴様こそいつから私にそんな偉そうな事を言えるように

なっただんだ?」

「うう……でも、此処を抜け出すには僕だけじゃダメなんだ。だからお願いだキャラ」

クソ花は頭を床に擦り付けながら私に頼ってきた。

「どうやら私の前から姿を消した後も一人でここを出る方法を探していたらしい。」

私だって本当にこれで良いのか考える事はある。

だがこの世界の空気が私の決意を鈍らせ、幸せなママ達の存在が私の後ろ髪を引くのだ。

この気持ちはきつと私一人ではどうにもならないし、アズリエルは既にこの世界を受け入れてしまっている。

だから酷く気に入らないが、私はこのクソ花が戻ってくる事に賭けたのだ。

「おい、クソ花。ついて来い」

クソ花の茎を乱暴に握りしめ部屋を出ていく。

「ちよつ、キャラ!?! 一体何を……」

「アズはママを上手く誤魔化しといて」

「キャラツ!!」

私はアズリエルにそう伝えるとママに気付かれない様に玄関から家を出ていった。

「……どう、いくのや?」

「イビト山。地下世界を抜ける時、最後にお前に会った場所だ」

私は車に気を付けながらイビト山へと向かって行ったのだった。

NERVELESS TALE

その後、真・研究所からママの所へ戻った僕はたくさん泣いた。もう二度と彼を殺したくない……傷付けたくない。

何の事だか分かっていない筈のママはそれでも僕を受け止めてくれて優しく僕を抱きとめてくれた。

そんなママの温もりを感じ僕は更に泣いた。

僕が泣いている間、ずっとママが頭を撫でて慰めてくれた。

おかげで少し気持ちが落ち着き始めた僕は、この先どうすればいいか考え始める。

決意こそ挫けてないと思うが僕はもうFriskを傷付けるような手段は取りたくない。

だがいくら考えようと彼が傷付かないで元の世界に戻る方法なんて思い付く筈がなかった。

僕は今まで数え切れないほど繰り返す事で何かを成し遂げてきた。

その結果が今の有様だ。

僕はこの決意の力が無ければ何にも出来ない脆弱な人間の子供に過ぎない。

どうしようもない無力感が重く押し掛かり、堪え切れなくなった僕は気付けばまたママに泣きついていた。

「ママ……僕は自分が嫌いだよ。僕の行動は親友を傷付ける事しか出来ない……受けるべき傷を負う事すら出来ない最低な自分が……大嫌いだ」

「それは……辛いわね、でも私は大好きよ？あなたはとても優しい子だもの。私や皆、そしてそのお友達の事もそんなに心を擦り減ってしまいう程に思いやっているあなたの想い。きつとそのお友達だって気付いてくれてるわ。それでも辛いなら何時でも私を頼っていいのよ？」

「……ありがとう」

ママの優しさが身に沁みながらも同時に罪悪感が僕の背中から這い上がってくる。

……僕は卑怯者だ。

自分自身は一切傷付かないのにママもパピルスもF r i s kも皆僕に優しくしてくれる。

僕自身に傷付く身体がない事が今ほど恨めしく思った事はなかった。

……そうだ、こんな僕でもF r i s kの為に出来る事があつたじゃないか！

この世界でなら彼を傷付けないですむんだ。

此処の皆を救って平和な世界でどうか彼に身体を返して僕は彼を見守り続けよう。

それが彼の為であり僕の為なんだ。

*フリスク……大丈夫、大丈夫だよ。

いつしか泣き疲れた僕はF r i s kが肯定してくれた安堵感も相まって易々と意識を手放したのだった。

それからというものの、僕は皆を救う為に地下中を駆け回った。

パピルスと仲良くなり、アンダインも一緒にパズルで遊んだり。

アルフィーのところに通い、色々なアニメや漫画を見せて貰ったり時には推しについて議論を交わしたりもした。

そしてアズゴアとはお茶をしたり、それとなくママとの仲を取り持ったりもしてみた。

因みにママは当時のアズゴアが王としての仕事に追われて家庭を蔑ろにしていた事を怒っているだけで、他の世界より溝は深くなさそうだった。

そうして皆と仲良くなっていき、F r i s kが皆と幸せに暮らせる世界が現実の物となろうとしていた。

*みんながキミをしんでいる。

最後の回廊。

その場所で僕は改めて彼と待ち合わせていた。

「よおフリスク。オイラと話すのにこんな場所を選ぶなんて……一体何の話だ？」

僕はその場から動かずに質問に答えた。

「君との思い出の場所……だからかな？」

「思い出の場所ねえ？あー……そういうことか。おまえ、これで何回目だ？」

だが僕は直ぐに不用意な一言だった事に気付くも時すでに遅し、サングズの警戒心を一気に引き上げてしまった。

何てことだ、まさかこの世界でも巻き戻しに気付いてるなんて思わなかった。

ともすれば此処で下手な嘘は逆効果になる。

僕は包み隠さずこの世界でのリセット回数を伝えた。

「この世界をやり直したのは5回、いや6回だね」

ロード回数で言えばその数百倍になってしまふけれど。

「そうか、じゃあおまえは何故繰り返してる？」

「僕が繰り返してる理由？そんなの……」

そんな事決まっている。

いや、決まっていた……だけど今は。

「……わからない」

「はあ？わからない!?おいおい勘弁してくれよ。オイラ達は理由も無く巻き戻されてんのかよ……なんて、そんなジョークで済まされるところってんのか？」

サングズの表情が変わった事に気付いた次の瞬間には目の前に現れた彼に胸ぐらを掴まれていた。

「うっ……ぐう！」

「もしそれが本当ならニンゲンってのはどうしようもねえクス野郎だ

な？此処はテメエの砂場じゃねえんだ、今すぐこの世界から失せなクソガキ」

「……………はは、返す言葉も無いね。」

少し前なら反論の一つや二つ皮肉を交えて返してやれただろうけど、Friskの事を傷付けたくないと言うだけでこの世界を掻き乱そうとする愚か者には耳が痛いよ。

*違うっ！

違わないさ。僕のはただの我儘だ、サンズの言ってる事は正しいよ。

*違うっ！君は決して愚かなんかじゃない！君は自分の事がまるで分かってない！

Friskの言葉に当てられ、僕は一瞬意識が遠のいた気がした。

「サンズ……………」

「あ？」

不意に名前を呼ばれたサンズは胸ぐらを掴んだまま睨み返す。

「僕には記憶も残らずに巻き戻される君達の気持ちは解らないよ」

「あ、ああそりやそうだろうよ……………解ってるならそんな力使わねえだろうからな」

サンズは苛立ちを募らせながらも僕に答える。

対する僕も怒りに拳を震わせつつ話を続けた。

「だけど君だってフリスクがどんな思いで動いてるかなんて解らないだろー！」

「……………そんなものは加害者側の言い訳だ」

「言い訳だろうが関係ない！フリスクは皆から憎まれ、誰にも理解されずとも決して諦めずに世界に抗い続けたんだ！」

「さっきから何言って……………憎まれるような事をやったのは自分だろうが。それを理解して貰おうだなんて甘えだぜ？」

「解ってる。君に理解して貰いたいとか同情して欲しいとかそんなんじゃないんだ。僕はただ僕や皆の為に戦い続ける親友を頭ごなしに否定して欲しく無かっただけなんだ」

サンズは暫く難しい顔をしていたがやがて溜息一つ吐いて掴んで

いた手を離した。

「はあ……で？おまえは何者だ。支離滅裂しすぎて全く話が見えてこねえぞ」

「そうだね、紹介がまだだった。初めましてサンズ。僕の名はFrisk、君が今さつきクス野郎と罵った彼の親友だ！」

Friskは決意に満ちた瞳でサンズを見据えハッキリと答えた。サンズは暫く悩んでいたがやがてFriskの言葉から限りなく正解へと近い答えを導き出した。

「二重人格……いや、よく見りや一つの身体に二人分の業が見えるな。だがまさか……」

「その考えで概ね正しいよ。基本的に肉体の主導権はフリスクの方だけどね」

「なんだそりゃ。あー……まあよく分からねえが、一つだけ確かな事がある」

そう言つてサンズは徐ろにガスターブラスターを召喚した。

「それはなんだい？」

「てめえらの考えはどっちも俺達にとって最悪だつて事だ！」

サンズが言い終えるか否かのタイミングでブラスターを躊躇いなく放った。

Friskは辛うじて避けるも僅かに右腕を掠めた。

「……っ！待つてよサンズっ！僕は君とやり合うつもりはない！」

「なら潔く諦めな、その方が俺も楽だからな」

「残念だけど、それは出来ないよ！僕達は皆を救うまで決して諦めない！」

Friskは決意を抱いてサンズへ対峙する。

と、同時に彼は内側にいる僕へ呼び掛けた。

*フリスク、この戦いで君が僕の想いに気付いてくれると嬉しいな。

Frisk……何をするつもりなんだよ、早くロード……は駄目か。

じ、じゃあ直ぐにリセットを！リセットするんだ！

「……つたく、じゃあ諦めるまで俺と最悪な時間を過ごして貰うぜ」
骨がF r i s kへと無数に降り掛かってくる。

彼はそれらを何とか避けようと動くが、全ては避け切れずに腕や足に幾つも骨が突き刺さる。

「……っうー！絶対に諦めない！」

「ちっ、まるで自分が正義だとしても言いたげな顔だな」

苛立たしげにF r i s kを睨み付けたサンズは動きの鈍った彼を重力操作で地面に強く叩き付けると上からガスターブラスターを放った。

F r i s kは全身ボロボロになりながらもゆっくりと立ち上がる。

「う……ぐう……さっき言っただろ。僕は親友が罵倒されるのが我慢ならなかったただけだ。どっちが正しいなんて言うつもりは無いよ」

止めて……止めてよ！君が傷付くのは見たくないって言ってるのに……どうして！

「ああそうかい。ま、それならそれで構わねえさ。じゃあな、もう来んなよ？」

サンズのその言葉を最後にF r i s kはガスターブラスターの閃光に包まれて消えた。

もう止めてよ……君が傷付く必要は無いんだ。

僕がいくら止めようとどんなに殺されようとF r i s kはサンズと対峙する事をやめない。

なんで……どうして……どうして僕の想いを分かってくれないんだ。

どうして僕じゃなく君が傷付かなくちゃいけないんだ！

「まだ来る気か？かなり殺した筈だけだな」

「まだ四桁も死んでいないよ。それとも君はこれだけで諦めてくれる

のかい？」

「ぬかせ、テメエが諦めるまでは引かねえよ」

Friskは普段は絶対に言わないようなセリフでサンズを煽り立てる。

彼は戦いを終わらせる気が無いようだ。

いやだ……止めて……やめてってば。これ以上君が傷付くのは見たくないんだよっ！

ねえFrisk……僕が悪かったよ。

もつと頑張るから……もう諦めたりしないから……だから……止めてよ。

しかし、継る様に懇願する僕を彼は一蹴した。

*フリスク、僕が聞きたいのはそんな言葉じゃない。

分からない。彼が僕に何を求めているのか……

僕がどうしたら良いか分からずにいる中、Friskは唐突にサンズへ話し掛けた。

「サンズ。そういえば僕の親友は君の事が嫌いなんだってさ」

「そうかい、俺も嫌いだからお互い様だな」

「どうしてだと思う？」

「は？そんな事俺が知るかよ」

「力を持つ君が言い訳並べて出来る事もしないのが気に入らないんだってさ」

Friskはサンズを煽る為に今の話を持ち出したのだろうか？

それにしても脈絡が無さすぎる……他に何か目的が。

「でも僕は思うんだ。君と親友はきつと似た者同士なんだって、だから反発しあうんだってね？」

僕とサンズが似てる？Friskは一体何を言ってるんだ。

あんな怠け骨と僕が一緒なはずないじゃないか。

……有り得ない。

「そいつと似た者同士だって？馬鹿も休み休み言えってんだ」

当然サンズも否定する。だがFriskはそんな事ないと続けた。

「そっくりだよ。一人で全部背負い込んでどうにか出来ないか一人で

悩む。だから周りがどう思ってるかなんて考えようとしな
「……………」

「僕もそうだった。その所為で大切な親友に酷く辛い思いをさせてしまったんだ……だから僕はもう二度とあんな過ちは犯したくないし、君やフリスクにも同じ後悔して欲しくないんだ」

Frisk……………。

「そいつあためになる話をどうも。まあそうだな、おまえとの決着^{ケリ}をつけた後で追々考えてみるぜ」

僕はどうやらとんだ思い違いをしていたみたいだ。

今まで一人で頑張ってる気になっていた。どれだけ力を得ようと一人で見えるものなんてたかが知れてるのに。

僕は大切なものを見落としてたよ……Frisk、君はずっと僕と一緒に戦ってくれてたんだね？

「サンズ……………」

サンズはFriskの周りを囲むように大量のガスターブラスターを展開し、一斉に照射した。

だけどこれ以上奴の好き勝手にはさせない！

僕は彼と共に戦う決意を漲らせ、表舞台に帰ってきた。

「……まさかあれを凌げるとは思わなかったぜ」

「待たせたねサンズ、君の質問にちゃんと答えに来たよ」

「最初の答え？ああ、また入れ替わったのか。ややこしい奴だな……で、また分からないとか言うんじゃないか？」

僕は呼吸を整えてからサンズに聞こえるようにしっかりと声を出して言い放った。

「僕は世^{UNDEAD}界の皆を救う為に繰り返して来た！その為に君にも協力

して欲しい！」

*フリスクっ！君ならそう言ってくれらと思ってたよ！

僕が最初に決意し、別の世界の存在を知り新たに固めた決意。

それこそが皆を救う事であり全ての世界を救う事であった。

それが例え世界を否定する事であろうと僕は彼と一緒に成し遂げてみせる！

今のぼくにもう迷いはない。

「サンズ、まだ僕らと敵対したいならいくらでも付き合うよ。ただし君にはこの世界を救う為に協力してもらおうからね?」

「……………へっ、お前らイカれてんな」

普通じゃないのは事は理解してる。

僕は決意に満ちた瞳でサンズを見つめ返した。

「はあ……………分かった、お前の勝ちだ。だがもしオイラの兄弟や仲間達を傷付けるつもりなら……………今度こそ最悪な目に合わせるぜ?」

「安心していいよ、そんな手段はもう使わない。さあスノーフルへ戻ろうサンズ」

「ああ、こっちに来いよ。近道を知ってるんだ」

僕達は対策を考える為、僕達はサンズの近道でスノーフルへと向かった。

*もう大丈夫だね、フリスク?

ありがとうF r i s k。大丈夫だよ、きつとどうにか出来るさ!

FALSE TALE ～ルインズ～

先程から心の内側から何者かの強い決意が私を蝕もうとしてくる。

*ママが心配するよ？

*おうちに帰ろうよ。

言葉にすればそんなものだがその一言一言が私をこの世界へ押し止めよう重くのしかかる。

私は暖かい我が家へ戻ろうとする気持ちを更に強い決意を以てどうにか押し殺しつつ漸くルインズへと辿り着いた。

「ここは……君や奴が落ちてきた場所じゃないか。僕と君が最後にあつたのはだって……」

フラウイーは無数に生えてるゴールデンフラワーを見ながら首を傾げていた。

それも当然だ。結界を壊した時の記憶は此奴には残っていない。

Friskの決意により私と奴を除き全て無かつた事TRUE SETにされているのだから。

だがここはある時間軸では間違いなく此奴と最後に会った場所である。

厳密に言えばフラウイーの記憶の元であるアズリエルの姿だったが。

「此処でお前は私の事を『りっぱなニンゲンじゃなかった』と評した」「ぼくが？……いや、確かにそう思う事もあつたけどそれはきつと僕の勘違いだったんだよ」

「変な気遣いは要らん。私が人格者でない事は私が一番解っている。当時の私にとってモンスター達の解放など人間を滅ぼすついでだったのだからな」

私は軽く思い出話に花を咲かせながらフラウイーをゴールデンフラワーの中に放り投げる。

そして私は奴が着地し体勢を整えたのを確認すると本題へと入った。

「だからフラウイー……いや、アズリエル。私を裏切り計画を阻害した貴様の事だけは赦さない」

「え……？嘘だろ……そんな事してる場合じゃ」

私はポーチから愛用のダガーナイフを取り出し構えると、奴の話に耳を貸さずに花畑へと振り下ろした。

「戦えフラウイー！私は本気だ。私を殺さなければ私がおまえを殺すっ」

「ちよっ！待って……待ってば！何なんだよいきなり!?訳が分からないよ！」

「どうした、私が攻撃出来ないか？はっ、ソウルレスが聞いて呆れるね……そうか、ならば死ね」

私は戦う意思を見せないフラウイーを掴み上げナイフを振り上げた。

その直後、奴の背後から無数の弾幕が降り注ぐ。

私は避ける為に後ろに飛び退くが、奴は私の意識がそれた一瞬の隙を突き蔓を掴んでいる手に叩き付けて私の手から逃れた。

「はあ……君が協力してくれれば簡単なのに。ねえキャラ？本気で僕に勝てると思ってるなら今すぐ考え直す事をおすすめするよ」

「ほう？おまえこそ私に勝つ気では面白くない冗談だ」

「君達がこんな世界にうつつを抜かしてる間に僕はずつとこの世界を抜け出す方法を探し続けてたんだ。これがその成果さ！見るといい、この僕の決意の結晶を！」

そう言うとフラウイーは突然発光しだした。

あまりの眩しさに私は目を細めながら奴の方を見てみると光は徐々に形を変え始める。

「見ろ……これこそが埋まる事のない僕と君との絶対的な決意の差だよ！」

光が弾け辺りを再び暗闇が包み始めた時、フラウイーは無機物と有機物を緋い交ぜにしたような生物へと変貌していた。

「ははっ、何をしてたのかと思えば人間のソウルを取り込んでいたのか」

「そうだーこの世界の人間を六人ほどね？本当はもつと集めたかったけど中々良いのが居なかったんだ。此奴らだつて一人一人は君達の決意には遠く及ばない存在さ。だから今はまだリセットが使えない。でも君のソウルを奪う位は出来るんだ。そして僕は君の力を取り込みこの世界を抜け……そしてあのクソマッドに僕を嘗めた事を後悔させてやるのさ！」

「いちいち煩いなあ、良いから来いクソ花」

私が面倒臭そうに答えたのが気に入らなかったのか、フラウイーはモニターを怒りの表情に変えて私に仙人掌の様にトゲトゲしい腕を突き付けてきた。

「君はまだ理解してない様だね！この世界で最も決意が強いのは僕なんだよ!?だから君は大人しく僕に取り込まれていけば良いんだ！そうすればたまには僕の話相手として今みたいな姿で実体化させてやるよ！」

私は急に強気になったフラウイーに聞こえるように深く息を吐いた。

「……なんだよその溜息は。僕がその気になれば君なんか自我も残らずに吸収する事だつて出来るんだよ、わかってる？」

「おいクソ花、確かに私はこの世界に抗えなかったし抗う必要も無いと考えていたさ。だがな……ただの人間を五人や六人集めた所で私の今までの決意まで否定出来ると思うなよ？」

私はフラウイーの腕を切り付けてやる事で奴の提案を蹴ると同時に宣戦布告を示した。

「そうかよ……キミはほんとうにばかだね」

そんな私の意思を汲み取ったであろうフラウイーはそれ以上口にせず、突き付けた爪を開いて私を捕まえようとしてきた。

もう少し時間が掛かるかと思つたが、奴がソウルレスである事が幸いしたか。

私は後ろに跳ぶ事で奴の爪を避け、奴の顔へと赤い斬撃を放つ。

奴は身を護る事もせずにそのまま受けて見せた。

「どうだ！君の攻撃なんかこれっぽっちも効いちやいないんだ！」

そう得意気に語るフラウイーに対して私はにやりと不敵に笑って見せた。

「……………君はどのようにしてそんなに苦しい思いをしたいのか理解に苦しむね」

そうは言っても奴は今も私に何か逆転の一手があるんじゃないかと警戒してるだろう。

だが奴はあいつが全てを殺し尽くした時間軸の一つしか知らない。あいつが無理矢理連れてきたりイレギュラーな事が起きてる以上記憶が蘇っている可能性もあるが、少なくとも奴は結界を壊した事を知らなかった。

そして今の姿で負ける事を考えていない。

つまり奴は知らないのだ。

全ての時間軸で自分が負けてきた本当の理由を。

決意のソウルを持った人間が抗うと決めた時の本当の強さを。

そして私だって元人間だ。あいつらが出来た事を私が出来ない道理はない！

*危ないよ……………逃げ——*あなたはケツイでみたされた。

どうせ逃げる事など叶わないだろう。

それにもう十分だ、偽りでも私は最高の思いをさせて貰った。

安心しろ、礼としてこの世界線のあるべき姿に戻しそれ以上おまえらの世界には干渉する気はない。

*いやだ……………寂し——*あなたはケツイを抱いている。

それも心配するな。私がリセットしてやる。

お前らとこの世界の私達ならまた正しい道を歩めるだろう。

*でも……………キミがしんじやったら——*ケツイ。

なら私に力を貸せ、お前達が協力すればクソ花に負ける道理など存在しない。

*……………解った、ボクたちはケツイをあなたに託す。

！……………ああ、確かに受け取った。

私はいいつらの決意をその身に感じつつナイフを構え直す。

「フラウイー、おまえは私達の決意を甘く見すぎだ」

「はっ、僕が決意を甘く見てるって？ばかなこといなよ。僕ほど決意の力を恐れている奴はいないよ。だからこそ僕を前にしてなお諦めようとしないう君の蛮勇が理解出来ないといってるんだ」

「ならば私を殺してみるといい……出来るものならな？」

「言われなくても……そうするさー」

フラウイーは無数の弾で私を囲い動きを封じる。

どうやらよけられない様にしてブラスターを放つようだ。

だから甘く見てると言うんだ。

最初から私を殺しに掛ければソウルを奪うチャンスくらい有ったかも知れんのに。

私は放たれたブラスターにより、まりよくで出来た肉体は一瞬で消し飛ばされる。

続く数瞬後にはソウルが半分に分れてしまうだろう。

だが……………

パリーンツ

*d e t e r m i n a t i o n

「おい、いったいなにをした……なぜ生きてるんだ！」

「だから言っただろ、私達を甘く見すぎだと」

ブラスターも弾幕もくぐり抜けフラウイーの前に立った私は無造作にナイフを持つ腕を振り下ろした。

たったそれだけの動作で奴の仙人掌の様な腕は根元から音を立てて崩れ落ちた。

「あ……あ、有り得ない。僕の腕を一撃で切り落とすなんて出来る筈がないんだ！おまえまさかジェノサ——っ!」

奴があいつの名を呼ぶ前に私は奴の残った腕も一振り切り落とした。

「私は私だ、奴じゃない。二度と間違えるなっ」

「うう……な、ならなんでこの姿の僕をこうまで圧倒出来る……そんな事が出来るのはあの化け物しか考えられない！」

フラウイーがそう言い切るのも無理はない。

最初から負けるつもり等無かったとは言え、これは私にとっても予想外だった。

何が予想外だったかと言えば今私に託されている決意だ。

これは奴らの様な異常な決意なんかじゃない。

一つ一つは小さな想い……ハッピーエンドを願う気持ち……モンスターや落ちて来た人間達の幸せを願う気持ち。

大抵は好奇心というより強い決意によって追いやられてしまった人間達の良心がこの場所で集まり安住の地を生み出したのだ。

その不変の幸福を望む小さな決意の全てが私に託されたのだ。

フラウイーにとっては堪ったものでは無いだろうが、もはやお前に抗う術などない。

「フラウイー、お前は这个世界を抜け出すのが目的だと言ったな？」

「何を今更……君達と違って僕は最初からそのつもりだよ！」

そうだな。そしてその為には手段を選ばないお前だからこそ私は此処に連れてきた。

私があいつらのLove^愛に甘えてしまわない程の固い決意を抱くためにな。

……だが、私の目的は今やそれだけではない。

託されてしまったのなら裏切る訳にはいかないからな。

「ならばお前が奪ったソウルを返して貰おう」

「な、何を……そんな事言つて僕を油断させて殺そうとし、してるんだろ！」

「今更そんな事をする意味が本当にあると思ってるのか？」

力づくで取り返す事など容易に出来る状況でそんな小細工は必要ない。

というよりもはやあいつが持つてる人間のソウルがなくても実行するだけの決意はある。

……だがな、私を裏切りあんなクソ花に成り下がろうとも奴は私の

大切な家族なんだ。

血の繋がりがなんてものはないが、簡単に切り捨てられるものじゃない。

「最後にもう一度だけ聞けど。今度こそ私に協力してくれるならそれらのソウルを解放するんだ」

「……………わかった、どうせ目的は同じだ。それにもう君には勝てないと分かってしまったからね」

ロードでも試したのだろうか。

そういつてフラウイーは六つの人間のソウルを体から取り出して私へ差し出して来た。

私とそのソウルを受け取ると奴の体は再び光り始め、そして何時もの花の姿へと戻った。

「さあ、殺るなら今だよ。君なら一振りで僕を殺せるだろうか？」

自棄気味に鳶を伸ばして地面に仰向けになるフラウイーを私は掴み上げると自分の右肩に乗せた。

「フラウイー、私は裏切る奴が大嫌いだ」

「知ってる、だから早く——」

「私にお前を裏切らせて罪を清算しようとしても無駄だ」

「は、何を言ってるのさ？君はさっきまで本気で僕を殺しに来てたじゃないか」

勿論だ。中途半端な決意では直ぐに曲がってしまうからな。

「そうだ。だが常識的に考えてみる。協力を取り付けた相手を殺す奴が裏切り者じゃなくてなんだと言うのだ」

「なんだよそれ……………君の頭の中はお花畑かい？」

相変わらず失礼な奴だ、私からすればドリーマー家の方がよっぽどお花畑な考え方だ。

どう考えても私は一般的な常識を持った至ってまともな人外だろう。

まあ常識から外れた存在が同じ常識外の奴に常識を説くってのも変な話だな。

とにかくそんな詭弁とも取れる言い分をフラウイーに伝えて黙ら

せる。

そして私は私達の目的とあいつらとの約束を果たす為に決意を抱く……前に忘れていた事があった。

「フラウイー、悪いが家に居るアズリエルおまえを連れてきてくれ」

「ええ〜？別に良いんじゃないの、あいつはあのままでも幸せそうだし」

それは私も思わなくもないがそうも行かない理由があるのだ。

「私のソウルは今奴に繋がっているからな、この世界から離れると私が保てないのだ」

「ふくん、それって僕にデメリットないよね？」

ははは、やっぱり死ぬかクソ花？

だが私は頭の中お花畑ではないから無意味に弱点を晒す事はしていかないのだ。

「私が途中で消えればお前はガスターの奴と同じ時空から永遠に閉じ込められるだろうな」

「づつ……じゃあ行ってくるよ」

フラウイーは渋々了承すると肩から飛び降りてそのまま地面を潜って行った。

ふう……礼を言おう、お前達。

おかげで私は奴を殺さずにすんだ。

*あなたは優しい。

*力があればきつと正しい選択をしてくれると思った。

*だからあなたに託した。

私が優しいか……そんな事を言われたのは初めてだな。

本当に私が心優しい人間なら、きつと私の居た世界も此処のように優しい世界になってたかもな。

*ヒトはよわい。時に間違え、後悔し、そして願う。

*僕達私達はそんな人間達の一面でしかない。

*真に優しき人間は自分の過ちを認め、みんなの為に決意を抱き続ける事が出来る者。

はは、それは流石に買い被りすぎだ。

だがまあ……悪い気はしないな。

「おくい、何浸ってんのさ？やっぱ帰りたくないとか泣き出すつもり？」

おっと、どうやらフラウイーの奴が帰ってきた様だな。

全く……帰りたくなかったのか？などと愚問を投げてきやがって、台無しだ。

「フラウイー……私が何の為にあいつを呼びに行かせたのか忘れたのか？」

「じ、冗談だつてば！冗談だから狂氣的なその笑顔でにじり寄って来るなよお！」

フラウイーは身体を震わせながらゆっくりと後退していく。

「キヤラあく、ママが怒っ——ひ、ひいいいっ!?!お、おぼけだあー!!」

そして何故か一緒に来ていたアズリエルまで扉の向こうまで逃げ出してしまった。

おまえらなあ………流石に失礼だとは思わないのか。

苛立っていたとは言え私は笑顔で聞き返したただけだぞ？

………目を見開いたままだったのが悪かったのか？

*That's Right

NERVELESS TALE くるいんずく

僕が決意を新たに持ち直したあの日からリセットをせずにこの世界で一年が経過した。

当然ながら元の世界線に帰るのを諦めた訳じゃ無いよ。

僕達は皆を救う為にサンズやアルフィーと相談しながら様々な方法を試したり、皆と共に過ごしながらこの世界の過去について更に詳しく調べていた。

その結果、幾つかの有益な発見があった。

一つは地下世界に落ちてきた人間の数とその行方。

最初に落ちてきた人間を含めて七人。

その内の六人はニューホームでアズゴアが保護していたらしく、その六人は力を合わせて結界を抜け出した様だ。

もう一つの発見は僕達のソウルに関して。

サンズが言っていたようにこの身体には彼と僕、二つのソウルが存在している。

そんないままででは有り得なかった状況を利用出来ないか試した所、結界を壊す事は出来なかったが僕達だけで結界の出入りなら出来る事が分かった。

とは言え、人間のソウルを奪い下手にLOVEを手に入ればまたサンズを敵に回しかねないから止めておいた。

そこで僕が次に考えたのが近々落ちて来るであろう人間についてだ。

他の世界線と共通しているのであればその人間は僕達と同じく決意のソウルを持っていて可能性が高い。

だから僕はその子が来るのを待つ事にしたのだ。

本来モンスターのソウルを奪うか、この世界の六人が力を合わせて漸く出る事が出来た結界を二人で抜け出せる僕達に、もう一人決意のソウルを持った子が加われば結界の破壊も出来るのではないかと考えて。

そんな僕の考えにアルフィーとRiskは賛同してくれた。

サンズだけは苦い顔をしていたが、得に反対意見は出なかった。

——といった具合に話は決まり、今日遂に七人目の人間が落ちてきたのだ。

その日も僕達はママの代わりにルインズの庭を散歩していると、嘗て僕等が落ちてきたゴールデンフラワーの花畑に横たわる人間の子供の姿があった。

「あれって……」

近付いて見てみるとその子はとても見覚えのある黄緑色の生地に黄色っぽいボーダーが一本入ったタートルネックに、同じく黄緑色のズボンを着用した茶髪ショートボブの見慣れた女の子だった。

「キャラ……?」

いや、彼女では無い可能性があるにも関わらず私は驚きの余りつい言葉を漏らしてしまっていた。

「……だれだー!どうして私の名を知っている」

どうやら聞こえてしまった上に同名だったみたいだ。

彼女は僕に不信感を抱きつつも聞き返してきた。

さて、どう答えたものかな。

「僕の知り合いに君に似た姿の子が居たものでね?つい声が出てしまっ——」

「っ……おまえか……!」

僕は弁明を試みるも彼女は既に僕の話など聞いて居らず、僕の事を殺意の籠った瞳で睨み付けていた彼女は僕が話し終えるのも待たずに近くにあつた棒切れを握り締め、一足飛びで僕の左目を突き刺しに来た。

「死ぬ——うぐっ……これはあ!?!」

だが、僕が一瞬遅れて避けようとした時には彼女の体は後方の壁に叩き付けられていた。

「サンズっ!ありがとう。だけど此処は僕に任せてくれないか?」

僕は彼女を吹き飛ばしたであろうモンスターに声を掛けた。
すると何も無かった僕の隣に彼は突如現れこう伝えてきた。

「フリスク。奴は駄目だ、此処で殺さなければ絶対に良くない事になるぜ」

僕は一瞬彼が伝えた言葉の意味を理解出来なかったが、彼女がポーチから取り出した赤黒く染まったダガーナイフを見て納得がいった。

「成程ね……サンズ、彼女はいくつだったんだい？」

彼は彼女から目を全く離さずにこう答えた。

「奴のLOVEは99だ……殺すにしろ話し合うにしろ相当骨が折れるだろうな」

99か……あつちでなら兎も角、いまの状態でもとにも相手をするのは厳しいかな。

Frisk、彼女は協力してくれると思うかい？

*やってみよう。きっと彼女だって何か事情がある筈だよ。

うん、君ならそう言うと思ってた。

*君だってそうするつもりで聞いたんだろ？

まあ、そうなるかな？

……それじゃあ行くよ。

*僕達はキャラを説得する決意を抱いた。

「ちいつ……！ちよこまかと鬱陶しい奴め！」

「キャラ！その手を止めて話を聞いて欲しい！」

僕達は彼女が放つ一撃必殺の斬撃を紙一重でどうにか避けながら説得を続けている。

しかし彼女はいつかの自分を見ている様に飽きる事なくそのナイフを振り回し続けた。

このままでは攻撃が当たるのも時間の問題だろう。

Frisk、次の直接的な攻撃が来たら敢えて受けるから覚悟しておいて。

*僕は大丈夫だけど……君の方こそ大丈夫なのかい？

……大丈夫、即死レベルの攻撃は屑の奴から嫌という程味あわされてるからね？

「キャラ、君なら解ると思うが飛び道具は僕には当たらないよ?」

「……ふっ、既にこの戦いも幾度も繰り返してるといふ事か」

「数えては居ないけどね?」

自身の記憶に無いリセットはされていない。

きっと彼女ならそんな安易な結論には至らないだろう。

そして彼女は次に僕の言葉の意味を考える。

だが聡明な彼女は僕が飛び道具を危惧している可能性に気付く。

だから此処から僕達の正念場だ。

「だがおまえの体力は確実に私より先に底を尽く。ならばどう足掻いても私の勝ち揺るぎはしない!」

そう言うキャラの斬撃は更に激しさを増していく。

正面から飛んできた斬撃をしゃがんで躲し、直ぐに後ろへ飛び退く事で上から降り注ぐ無数の斬撃を避けた。

「まだまだ行くぞー!」

僕が着地する直前に背後から十字の斬撃が飛んでくるので身体を無理振じる事でどうにか避けきった。

*フリスク、まだ来るよ!

解ってるよ!

空中で無理に体勢を変えた僕は錐揉み状態で地面に叩き付けられるも直ぐに手足を着いて体勢を立て直し、正面から水平に飛んでくる斬撃をハンドスプリングで飛び越え足から着地してみせた。

「成程、確かに手慣れているようにもみえるな」

「ははっ、これでも結構苦労したんだからね?」

キャラに返事をしてみせたが、実際にはサンズとの戦いを幾度も繰り返した事で慣らした動きを二人の決意で補助してるに過ぎない。

彼との戦いやF r i s kの助けが無ければ今頃何度もロードし直し、屑との戦いを再現する事となっていただろう。

「だったらおまえの切れる札を全て潰せば良いだけだ」

だが幸いな事に彼女は半信半疑とはいえ、僕がリセットしている可能性を植え付ける事が出来たようだ。

キャラは何かを企む様な笑みを浮かべると再び僕の足を狙って斬

撃を飛ばしてきた。

「おっと、そんな単調な手段じゃ僕の手札は奪えないよ?」

僕は敢えて余裕を持つて飛び越えた。

すると案の定彼女は僕の体勢を崩そうと背後から斬撃を飛ばして来た。

僕が再び身体を振じりその攻撃も躲した直後、彼女は姿勢を制御出来なくなった僕を上から飛び掛る様に突き刺してきた。

「ふん、おまえがどう動こうとこれなら決して外しはしない」

「うっ……ぐふう……確かに……反応は……かはっ………出来ない……ね」

僕のソウルが音を立ててひび割れて行くのを感じる。

「まだ諦めるつもりは無いようだが、おまえの努力の全ては徒労に終わる。此処で諦めた方が身の為だぞ?」

「は……は……邪魔者である僕の心配をしてくれるなんて君は優しいんだね」

「っ、馬鹿な事を……もういい。さっさと死ね!」

そう言つてキャラは突き刺したナイフに更に力を込めて僕のソウルを呆気なく突き割った。

キャラは確実に目の前の人間のソウルを砕いた事を確信していた。

しかし彼女は直ぐにその表情に曇りを見せた。

「何故生きてる? おまえのソウルは砕け散った筈だ。それに涙を流している理由も解せぬ」

確かに彼女の言う通りソウルは砕け散った、僕が涙を流しているのならそれが理由に違いない。

辛うじて親友のソウルが霧散する前に保護出来たからまだ生きて

いるが、一步間違えれば取り返しのつかない結果にだってなり得たのだから。

でも今は大切な親友が作ってくれた機会を無駄にしない様に僕はしっかりと彼女の右腕を捕まえた。

「漸く君と落ち着いた話が出るね」

「くっ……どうするつもりだ」

彼女は僕の手を払おうと必死にもがいているが僕達の決意を振り払う事は出来ない。

僕は彼女の腕を掴んだまま聞いた。

「君はどうしてここまで来たんだい？」

唐突な質問に彼女は怪訝な目で僕を見るが、やがて呆れた様子でこう答えた。

「初めはこの山の地下にモンスターが封じ込められている噂を聞いてな。目の色が他人と違うというだけで私を差別し虐げてきた人間共に復讐する為に奴らを地下から解き放とうと考えた」

僕やフリスクも外では近い境遇だったから人間に不信感を抱く気持ちは解らなくも無かった。

「でも……この皆は……」

「そうだ……全員腑抜けだった。だから私は計画を変え奴らを殺し、力を手に入れ人間を滅ぼすつもりだった……だが奇跡が起きたのだ。それまではその骨に邪魔をされて殺された後はまた此処に戻されて居たが、今回は私が人間共の町にいた頃まで戻っていた」

その原因は恐らく僕等がこの世界にやって来た事だろう。

そうか、だから彼女のLOVEが……

「だから私は国ごとその町の人間を殺し尽くした。そしたら他の国からも追手が掛かってな。身を隠す為に仕方なく此処に降りてきたんだが……ふふ、お陰でおまえという障害を取り除く機会に恵まれた」
「っ……君が今までどれだけ酷い目にあってきたのかが解るなんて簡単には言えない。けど人間もモンスターも皆悪い奴ばかりじゃないと思わないかな」

人間もモンスターも間違いは起こす。

けどその理由は心の弱さから来るもので、周りが支えてあげればきつと改める事が出来るものなんじゃないかなと僕は思う。

けれどそれはやっぱり簡単な事じゃ無くて、だから争いは簡単には無くならないのだとも思う。

「くく……くく……あはははははー！」

「！」

「おまえはどうやら考え方までガキの様だな！」

その直後、キヤラは僕に刺さったナイフを左手で引き抜くとそのまま自分の右腕を二の腕から切り落とした。

「なんて事をつー！」

「ふんっ、貴様を殺せるなら右腕の一本くらい安いものだ！」

そう言つてキヤラは僕から距離を取ると斬撃を飛ばして来る。

それは僕が尻餅を着いた事で運良く避けられた。

フリスクが身体を張つて作つてくれた機会を活かせなかった……

僕では彼女の攻撃を避けきる事など出来やしない。

もうロードし直すしか……いや、でも彼女の記憶が残るなら状況を悪くするだけかも知れない……どうしよう。

「なんだ、おまえの切り札はあんな安い説得だけか？随分と呆気ない幕切れだな？」

キヤラはそう言つてつまらなそうに斬撃を無数に放つてきた。

この状態からじゃ躲す事も出来ない。

僕は直ぐに訪れるであろう痛みを受け入れる覚悟を決めて、次に託す事にした。

……………？

しかし、いつまで経つてもその衝撃はやって来なかった。

僕がゆっくりと目を開くと、辺りは真っ白な骨に囲まれていた。

「サ……ンズ？」

「おまえさんの親友とやらから託されちまったんだ。奴の欠片だけで何処までやれるかは分からねえが……時間を稼がせて貰うぜ」

そう言つてサンズはキヤラの斬撃に合わせる様に骨を飛ばして相殺しきつた。

「今更骨が出しやばった所で何が出来る！」

キャラはサンズへと一直線に斬り掛かるがそれを易々と躲し反撃とばかりに四方から彼女目掛けて骨を飛ばす。

煩わしそうに躲して行く彼女だったが、その内の一本が右肩を掠めた瞬間に顔色が一変した。

「貴様あ……何をした！」

「はは、どうやらおまえさんはオイラの事なんか眼中に無かったらしいな」

キャラが憎らしげにサンズを睨み付けている理由は、恐らく彼の能力の意味を理解したからだろう。

僕は知らなかったけれど親友が彼の能力をこう呼んでいた。

『業の報い』と……。

「オイラの攻撃は相手のKR値、つまり業の深さに比例して追加ダメージを与える事が出来る。おまえさんみたいなクソガキを地獄に突き落とすにはうってつけの能力って訳だ」

「ちつ……今の私には無視出来ない能力という事か。ならば望み通り貴様から葬ってやろう！」

そう言つてキャラは再度サンズへと駆け出した。

目にも止まらぬ速度で振り抜かれたナイフをサンズはショートカットで回避し先程と同じ様に反撃を行おうとした直後、既に二刃目を振るっていたキャラによって中断され、彼はもう一度ショートカットを使い距離を取った。

「ちつ、オイラの行先を読まれたつてののか？」

「ああそうだ。これこそが私の決意の使い方だ！」

サンズの疑問にそう答えた彼女は既に彼の目の前でナイフを振り翳していた。

「クソつたれが！吹っ飛——なにい!？」

「サンズっ!!」

辛うじて反応したサンズが左目を青く光らせキャラを床に強く叩き付けた。

だが地に伏した筈の彼女はいつの間にか手に持ったナイフでサン

ズの事を切りつけていた。

「モンスターなどに私の決意が敗れるものか」

「サンズっ!!」

どうしよう、サンズ……サンズが……!

「さて、邪魔者は後はお前だけだ人間」

キャラが近付いてくる。

フリスク……フリスクッ!

返事は無い……サンズも死んでしまった……どうすれば……どうしたら。

……リセット……いや、ロードをすればサンズもフリスクも無事だった時まで戻れる。

きっとキャラの記憶も引き継がれるだろうけど今よりはマシなはずだ。

僕は彼女が来る前に世界を巻き戻す決意を固めようとした。

その時……

*あきらめるな!

*ケツイを ちからに かえるんだ……!

僕の心に聞き覚えのある言葉が響いた。

フリスクの声よりもずっと低く厳かな声……だけど僕が諦めそうになった時に何時も支えてくれた優しい声。

誰が何処から呼びかけているのかも解らないけど、この人の励ましが僕に勇気をくれるんだ。

わかった、逃げたりしないよ。

フリスクもサンズも僕を信じてくれたんだから僕はそれに答えなきやならない!

「フリスク、サンズ……見てて……僕は負けないよ!」

「今更だな、これで終わりだ」

拳を握り立ち上がろうとする僕の前に来ていた彼女はそう言って頭上に掲げたナイフを僕へと振り下ろした。

僕へと振り下ろされたナイフは僕の身体の数センチ右を通り過ぎて行く。

キャラは攻撃が外れたのを確認するとゼロフレームで横薙ぎに切り替え僕の胴体を斬り裂いた裂く前に僕は後ろへ飛び距離を取り、その二撃目も躲した。

彼女は一瞬だけ不思議そうな顔をしていたが、直ぐに不気味な笑みに戻ると今度は目にも止まらない速度で突っ込んで来た。

「死ねっ！」

彼女の叫ぶ声に反応して身構えた次の瞬間、目の前から彼女が居なくなっていた。

僕は慌てて振り向こうとしたその時、彼女のナイフが僕の背中に突き刺さった刺さる直前で身体を捻ってそのナイフを持つ手を掴もうとした。

けど僕の手は彼女を捕らえる事を出来ずに虚しく空を切った。

いつの間にか距離を取っていた彼女は独りで何かを呟き始めた。

「やはりか……厄介な力だが先程間々と比べれば大した動きではないな……ならば詰ませる事は容易い」

流石にキャラはたった数度見ただけで僕がやっていた事に気付いたようだ。

彼女は再度距離を詰めるとナイフで僕の肩を斬り裂いたがあつた場所を一瞬遅れて通り抜けて行った。

続けて彼女は直ぐ様刃を返して僕の腰から肩へかけて斬り上げた斬り掛かってくるのを何とか避けたがその刃は僕の胸に突き刺さっていたがやはり刃は僕の胸へと突き刺さっていた。

あれ……？おかしい……こんなはずじゃ……。

予想外の事態に困惑する僕を樂しげに見つめる彼女は僕の疑問に答える様に話し始めた。

「おまえは恐らく短い間隔でセーブをしながら私の攻撃を受けた後に直前のセーブ地点に戻る事で攻撃が当たらない位置に動いていたのだろうか？」

「うっ……」

彼女が直ぐに気付くのは分かっていた。

だけどこんなに早く対策されてはこれ以上時間を稼げない。

「サングズ戦での私の動きからその答えに辿り着いたのは流石だが、おまえと私では経験が違うんだ」

確かに僕のは付け焼き刃だけど……けど……僕は……僕の決意は君に負けてはいないんだ！

「これで終わりだっ」

「あ……い」

その時僕は閃いたんだ……彼女を止める事の出来る唯一の手段を。

~~~~~

続けて彼女は直ぐ様刃を返して斬り掛かってくるのを何とか避けたがその刃は僕の身体を貫いていた。

「無駄だ、幾ら巻き戻そうがこの一撃はお前には躲せん」

問題ない、躲す必要なんてないんだ！

僕は決意を抱きキャラの左腕をがっしりと掴んだ。

「なっ……!?!」

「へへへ……僕だけじゃない、君にとっても此処が避けられない一撃ってことさ」

僕が時間を巻き戻せる、つまりこの世界で今一番強い決意を抱いているのは僕という事になる。

そうなる彼女がどうやってロードみたいな事をしているのか？

その答えが分かったからこそ、僕は彼女を捕まえる事が出来た。

「君は僕とは違い自分の身体だけをロードしなおしてるんだね？だから自分以外の誰かが君に干渉しているとロードが出来ないんだ」

「ふん、これで私を捕らえたつもりかっ！」

そう言うのと彼女は僕を後ろに押し倒し、そのナイフを持つ腕に体重を掛けてきた。

「離さないのならおまえを殺せば良いだけだ！さあ死ねっ！」

「う……………っぐう……………」

僕の胸にナイフが少しずつつ呑み込まれて行く。

このままじゃ後何分も持たないかも知れない。

けれど今は彼女の時間を稼ぐ為にもここでロードを使う訳には行かない。

僕は一分一秒でも時間を稼ごうと両手でキャラの腕を掴み押し戻そうと抵抗した。

「無駄だ、そんな細かい腕で私は止められん！」

「か、か細いのはお互い様だ……………それに……………こ、この腕には僕等の夢が賭かっているんだっ！」

「ぐぐぐ……………無駄な足掻きをっ！」

キャラも負けずと力を込めて押し込もうとしてくる。

負けるもんか、絶対に負けない！

「ぐぬぬぬ……………諦めろ……………」

「嫌だ……………諦めない！」

胸元から流れ出る血液と共に全身の力が少しずつ抜けていくのを感じる。

それでも僕は最後まで足掻いてみせる！

親友が戻って来るのを…………

\* F r i s k、君の決意の勝ちだ。

親友の声が聞こえて来た次の瞬間、僕の身体からフリスクが持つ赤

いソウルがキャラの方へ飛びだして行ったのだ。

「なっ!？」

彼女が反射的に躲そうとするのを僕が残り僅かな力を振り絞って引き止める。

フリスクのソウルが彼女の身体へと入ると、彼女は僕の腕を振り払い後退りし始めた。

「ぐっ……何のつもりだ……こんな記憶を植え付けてどうするつもりだ！」

彼女にフリスクが植え付けている記憶、それは多分フリスクがよく知る彼女の記憶だと思う。

けど、一体どうするつもりなんだろう？

親友の意図は解らないが既に立ち上がる事さえ出来ない僕はフリスクの事を信じて待つ事にした。

――――

何なんだこの記憶は……!

世界を壊そうと決意を抱き続ける彼奴フリスクとそれを阻止しようと決意を抱き続けた私キャラ。

果てしなく繰り返されるその構図は今とはまるで正反対だ。

\*君は復讐心に囚われていてモンスターの心をまだ知らない。  
くだらん、興味無いな。

\*だろうね……けど、今君が見た記憶の中の僕やキャラキャラは一見両極端に見えるけど根本には二人とも同じ想いを抱いて居たんだ。

\*二人ともモンスター達を救いたいという固い決意があったからこそ僕は今此処に存在しているんだ。

自分の為では無くモンスターの為だと？ますますくだらん話だ。

私の邪魔になるだけでこんな奴らなんか救う価値もない。

\*それが君の本心とは思えないけどねえ……まあいいや、君には少し落ち着いて考える時間が必要だね。

なに？おまえっ、何をする気だ！

\*大丈夫、君の身体を暫く借りるだけさ。

馬鹿な、そんな事出来る筈が無い。

奴の戯言に違いない、そんなものに耳を貸すだけ無駄だ！

\*はは、君の言う通り本来ならそんな事は出来ないよ。けど今の心に迷いのある君になれば息をするより簡単な事さ。

「こんな風にね？」

「……っ!!？」

\*おっと、Friskを驚かせてしまったかな？

ば……馬鹿な……ありえん。

貴様！返せっ、これは私の体だ!!

\*分かっている、傷付けるつもりはないよ。

\*それに君の決意一つで簡単に主導権を取り戻せるさ。

何を訳の解らん事を……私の決意は本物だ、中途半端だとは言わせんぞ！

\*……ま、彼女の記憶やこの世界の皆を見て改めて自分の本当の気持ちを考えて見ると良いさ。

\*奴の動きは気になるけど、暫くはここに居るつもりだから君もゆっくりするといい。

くそがっ……覚えていろ、貴様だけは必ず殺す。

\*あはは、まさかこっちでも君から殺害予告を受けるとは思わなかったよ。

\*さて……そろそろFriskに報告しなきゃね。

\*……信じてるよ、キャラ。

—————

「お待ちせFrisk」

キャラの様子を窺っていた僕だったが突然彼女が僕の名を呼んだのでまさかとは思いながらも訊ねてみた。

「え……フリ……スク、なの？」

「そうだよ、まだ彼女とは和解出来ていないけどね？」

彼女は肩を竦めつつそう答えた。

僕はフリスクが無事だった事に安堵しながらもその後の言葉に僕は疑問を覚えた。

「それって……無理矢理身体を乗っ取ってるって事？」

「ま……まあ、そうなる……かな？」

フリスクは明らかに目を逸らしながら答えた。

ええ……なにやってるんだよ。

そんなのまんま悪役のやり方じゃないか……。

「フリスク？他人の身体を勝手に使ったら和解どころじゃ……」

「そうだよねえ……いや、悪いとは思っただけどね？」

何か言い訳を考えようとしているのだろう。

多分何か意味があつてやったんだろうけど、衝動的な思い付きである事も想像出来た。

普段は色々考えているのにたまに抜けてるんだよなあ僕の親友は

……まあ、そんな所もフリスクらしいかな。

「……それで？これからどうするつもりなの？」

フリスクにこれからの予定を聞いてみる。

「それなんだけどねえ……彼女の答えが決まるまでは此処に居ようかなって思っ」

「そっか……じゃありセットをし——」

「いや、リセットは無しかな。恐らく僕達がこつちに来た時まで戻っちゃうから」

あ……確かにその通りだ……でも……。

僕はサンズが倒れている方に目を向ける。

リセットをしないという事はどういう事か……きつとフリスクは

分かった上で言っているのだろう。

でも、僕は……

そんな僕の様子を見ていた彼女も僕の視線の先のサンズを見つめ、口を開いた。

「あ、もう起きても大丈夫だよサンズ」

「……………え？」

僕は一瞬フリスクが言った言葉の意味が理解出来なかった。

だが次の瞬間にはサンズが何事も無かったかの様に立ち上がって来たのだ。

「つたく、なんつー事させやがるんだ。下手すりゃ死んでただろおい」

「大丈夫、彼女は何かんだ言っても僕とF r i s k以外を殺すつもりは無かったはずだよ……彼女を否定してるけどね？」

え……………うそ……………!!? 本当に？僕は夢を見てるんじゃない……………。

「あれ？F r i s kも気付いて居なかったのかい？」

僕は言葉に出来ずにただただ頷いた。

未だに何が起きたのか解らない。

だってサンズは僕の目の前でキャラのナイフに斬られて……………。

僕の疑問に答えるように彼女は答え合わせを始めた。

「F r i s kは僕の記憶で見たと思うけど、肉体の殆どが魔力で出来るモンスターは皆死ぬと塵になるんだよ？」

「あ……………」

そう言えばフリスクの記憶にあった気がする……………。

「だから僕は彼が斬られた瞬間に失った魔力を直ぐに僕の決意で補ったんだ。補い切れるかは正直賭けだったけど上手く行って良かった」

「ひでえはなしだぜ……………ところでよ。おまえ、本当にフリスクか？」

良かった……………！じゃあ皆無事なんだ……………え？サンズ、何を言……………

いや、そんなはずない。間違い無くフリスクだよ。

僕は慌ててサンズの方を見るが彼の表情からは考えが読めない。

再びフリスクの方を見ると彼女は俯いたまま僅かに肩を震わせていた。

「ふっ、ふふ……………この私か？笑わせるなよ凡骨がっ」



そんなっ!?まさか……本当に……?」

「フリス——」

「ちっ、下がってるFrisk!」

僕の声を遮る様に叫んだサンズが僕を骨の壁で守ると先制して骨で彼女を囲んだ上でガスターブラスターを放った。

そんなサンズの様子を窺っていた彼女は目を閉じて軽く微笑むと周囲の骨を悠々と切り裂き、ガスターブラスターを避けた。

「感心したよサンズ、真っ先にFriskを守ってくれるなんて僕は君を好きになれそうだよ」

「はあ?……:……こっのクソガキが、笑えねえジョーク言いやがって。やっぱり俺はおまえが大っ嫌いだよ」

「はは、ごめんごめん。君が突然本人かなんて聞くからつい悪戯心がね?」

何故か解ってる様子のサンズとは違い、僕は状況が今一つ理解出来なかった。

つまり、今はフリスクだけどきつきのはキャラで……ええと……?」  
「Frisk?どうしたんだい?」

えと、キャラだけどキャラじゃなくてフリスクじゃないけどフリスクで……:……」

「キャラ?フリ?」

「それはカップリングかい?想像するのは構わないけどキャラが凄い顔で睨んでるから口にはしない方が良いと思うよ?」

「え?違って……その……今は?」

未だ考えが纏まらない僕の言葉を拾って彼女は納得したように答えてくれた。

「ああ、僕はずっと僕さ。キャラの物真似はそんなに似てたかい?と言っても本人の身体だから当然だよね」

物真似?……良かった……そうだったんだ……:……」

僕はフリスクの説明を聞いて漸く理解した。

けど……なんか釈然としないなあ。

僕は眉を顰めてフリスクの事を見つめた。

「あは、は……ごめん、ちよつと悪ふざけが過ぎたよ」

「……はあ、しようがないなあ。次やったらほんとに怒るからね？」

「うん……」

反省してるようだから良いけどさっきのは流石に悪質だと思う。

それにもしサンズが信じてくれなかつたら大変な事になつてたかも知れないんだから、フリスクは衝動的に行動するのは控えた方がいいと思うな。

「まあ、とにかく彼女が落ち着くまではゆつくりしようか？」

「うくん……まあそうだね」

フリスクのやり方はちよつと強引だけど今は彼女が考え直してくれる事を信じよう。

「じゃあ、お家にもどろうか」

「そうだね。サンズ、マイホームまでの近道を案内してよ」

「へっ、悪いな？この近道は二人用なんだ」

そう言うとサンズは僕の手を取って明後日の方向に歩き始めた。

「あつ！僕の親友を攫って何処でナニをする気だこのヘン——」

サンズはフリスクの話最後まで聞かずにショートカットでマイホームへ帰って行った。

# GENOCIDER TALE

く???

暗闇に佇み二つの映像物語を観測していたガスターは驚きと喜びが入り混じったような表情で椅子から立ち上がった。いた。

「ははははははっ、これがケツイの力か……！副産物ですらこれ程だとは面白い！この分なら彼らが来るのも時間の問題だろう！」

ガスターは二つの映像が生み出す灯りだけが照らす深淵の中で高らかに笑い声を上げていた。

普段は冷静沈着なマッドサイエンティストであるガスターを知る者なら本人かどうかすら疑うレベルである。

ひとしきり笑い終えた彼は落ち着きを取り戻し闇の中を歩きだす。本当ならこのまま観察をしていたかったガスターだったが、直ぐに来るであろう彼女達を迎える為にガスターはF r i s k達の映像を自身の右眼にうつしながら虚空に出現させた扉の中へと入って行った。

「さて、この辺りかな？」

ガスターはその先で待機していると突然空間に亀裂が走る。

亀裂は段々大きくなり、やがて空間が割れる音と共に飛び込んで来たキャラ達にガスターは落ち着いた様子で訊ねた。

「やあ、漸く手にした幸せを捨ててまで君達は何しに来たんだい？」

ガスターの純粋な興味から出た問いに、紅く染まったダガーナイフ構えたキャラと彼女の肩に乗ったフラウイーが口を揃えて答えた。

「お前をぶちのめす為だ!!」

「そうかそうか、それは楽しみだ」

そう言いながらも何食わぬ顔で手を空に掲げたガスターに即座にキャラが反応しナイフで斬り掛かった。

だが、その刃がガスターへ触れる寸前で突如空間が歪みだし彼女の一振りは虚しくも空を切った。

「アズツ！」

「駄目だよキャラ！ソウルが戻ってない」

キャラはすぐ様アズリエルに援護を頼むが、彼まだ力が戻っていない

い事を告げる。

そんな首を横に振るアズリエルを尻目にガスターはニヤリと笑みを浮かべながら別の世界線へ飛ばす際にアズリエルから奪ったソウルの一つを出して見せた。

「実験の邪魔はされたくないからね。君達には次の実験をやって貰う事にするよ」

「ちっ、次の実験だと?」

キャラはガスターの一挙一動を見逃さぬ様に警戒を強めながら聞き返す。

「なに、簡単な話だ。ジェノサイダーの影響を受けて異分子となり得た君達が奴自身に打ち勝つ事が出来るのかというものだ」

「馬鹿な、奴らと私達の敵は今やお前一人だ。そんな無駄な事をする気は無い」

Friskの心を受け止めた奴ならば同じ様に考える筈だと。

ジェノサイダーの過去を知った今、彼女はどのように考えていた。だがガスターの下に既に決意のソウルを含めた七つのソウルが揃っている事を知らないキャラ達は続く彼の言葉に驚愕を浮かべる。

「君の言う通り今のアレが君達と戦う事は無いだろう。だがFriskやパピルスに説得される前の奴ならどうか?」

「なっ……ありえん。私達は存在ごと時間軸を越えているはずだろう!」

「ほう?よく勉強しているね」

「時間だけは腐る程あったからな」

ジェノサイダーを止め続けていたとは言えキャラには暇な時間などそれこそ掃いて捨てるほどあった。

そこで彼女はその時間を対策の為の情報収集に充てた。

その結果彼女達が当たり前の様に行っているリセットが齎す事象について一部理解するまでに至ったのだ。

だが同時にその事象すらも覆す力が存在する。

「だが決意を含めた七つのソウルを手にした私ならばその事象すらも覆す事が出来るのだ!」

「なんだと!?!何故貴様が決意のソウルを!」

「ふふふ、私は全ての世界と通じているのだよ?この程度造作もないさ」

そう言つて大仰に掲げたガスターの手からは無形である筈の闇が形を成していく。

そしてその影が徐々に薄くなり姿を現したのはキャラと瓜二つの全く別の存在、ジエノサイダーの姿であった。

「……フリスク!」

「キャラ?やっぱり生きてたんだね。にしても珍しいな、君が僕をその名前で呼ぶだなんて」

彼女達にはLOVEなんてものは見えないが、それでもその瞳から滲み出る決意が紛れもなくジエノサイダー本人である事を示していた。

キャラは苦虫を噛み潰したように顔を顰めつつも万が一を願い問い掛けてみる。

「フリスク、私はおまえと戦うつもりは無い。私と協力して後ろの奴を倒さないか?」

「後ろ?」

不用心に振り向くフリスクにアズリエルが襲い掛かろうとするのをキャラが慌てて止めたので彼がその事に気付くことはなかった。

「やあフリスク、またあつたね」

「あー……君はさっきのとは別の奴かな?」

「いかにも……とはいえ、私がどの世界線の私かなどどうでもいい事だ」

フリスクはガスターの姿を暫し観察するとニンマリと口角を吊り上げた。

ガスターがそんな彼女の様子に疑問を抱いた直後、彼の腹部を横切る一筋の軌跡が走った。

「……………ああ、これは予想外だ」

「そうかい?厄介な存在は真っ先に消す。僕は当然の事だと思うけど?」

そう言った彼女の右腕は既に振り切った後を伝える様に袖が揺れ、手に持ったナイフには塵を付着させていた。

ガスターは膝を着いて彼女を見上げたまま否定を示す。

「そうではない……君の攻撃が私に届いた事が予想外だと言ったのだ」

ガスターはジェノサイダーがナイフを振り抜く瞬間に先程と同じ様に空間を歪ませる事で攻撃が届かない様にしていたのだが、彼女はそれを事も無げに修正し当然の結果として切り裂いたのだ。

「ああ、そんな事か。あんまり意識はしてないけれど空間への干渉はこの世界に此処に来た時からやってる事さ」

「そうか……そうだったな」

フリスクの言っている事が事実だという事を彼は理解していた。

だがそれでも戦闘では一度も使っていない事もあり、七つのソウルを持つ自分なら負ける筈が無いと考えていたのだ。

ガスターは足元から塵になりながらも研究者としての好奇心、そして全ての世界の自分へと伝える為にフリスクへ訊ねた。

「……その力をモンスターを殺すのに使わなかったのはどうしてだね？」

フリスクはその間に暫し考えた後にこう答えた。

「まあ、世界そのものに干渉してたからとか色々理由はあるけど……」

「けど……?」

「一番はズルいからかな?」

フリスクは満面の笑みでそう答えた。

その一言でガスターはおろか、後ろで聞いていたキャラやアズリエル、フラウイー達まで哑然としていた。

「あれ?何か変な事言ったかな?」

周囲の反応に不思議そうに周りを見渡すフリスクにフラウイーが真っ先に突っ込んだ。

「存在自体がズルみたいなお前が今さら何言ってるの!?馬鹿だろお前！」

「やだなあ?僕は刺されても斬られても貫かれても痛いしちゃんと死

ぬただ諦めが悪いだけの人間だよ」

当然言葉通りにとる者など居るはずがない。

「ははははははっ!!なるほど、どうやら私は根本から君の事を誤解していた様だ！だが次は君の思い通りにさせないさ」

だがガスターは何かを理解したのか高笑いを上げながら意味深な言葉を遺して塵へ還った。

「次か……その前に全てが終わるよ」

フリスクはソウルを回収した後、ガスターの最期を見送ると再びキャラ達の方へ振り向いた。

「さて、レアモンスターは殺したし次はボスを殺すでしょう。覚悟は良いかい？」

「ちっ、手を組む気は……無さそうだな」

キャラは舌打ちをしながらナイフを構える。

はつきり言っつて勝率はゼロに等しいが逃げる事すら出来ない……というよりフリスクが既に世界を壊す事が出来る状態にある以上此処で止めなければ先が無いのだ。

それを理解しているキャラ達は互いに頷き合うと、それぞれの武器をフリスクへ構えた。

「アズ、フラウイー！絶対に諦めるなっ！」

「もちろんっ！」

「ははっ、最終戦には相応しい相手じゃないか！精々抗うといい！」  
こうして世界の滅亡を賭けた戦いが今始まったのだった。

GENOCIDER TALE ~ Genocider VS Characters ~

私や今のアズリエルが使えるあらゆる攻撃手段も七つのソウルを手にしたジェノサイダーには効果が無かった。

「あははっ！どうしたんだいキャラ、君達は僕が世界を壊すのを止めたいんだろう？ならもつとケツイを抱き続けなきゃ！」

奴がまだ全力を出していないのが唯一の救いとは全く腹立たしい話だが、奴の気が変わる前に手を打たなければ選択肢すら無くなるというのが今の状況だ。

「キャラ……」

「解っている」

アズリエルが言わんとしてる事はわかる。

だが私達が打つ手が無いと言って諦める訳には行かないのだ。

私達が此処までやって来た事も、奴が漸く考え直した事実も全て無駄になってしまう。

だから私は考える事を止めない。

それに七つのソウルを手にした存在を見たのはこれで三人目だが、前の二人を見ている限りは全くもって打つ手が無いという訳でも無さそうだ。

奴から他のソウルを奪うか、奴を殺すか。

そのどちらかが出来ればどうにかなるが、後者は奴程のLOVEを無しに易々と出来る事じゃ無いし出来るなら避けたい。

そうなると今試すべきは……

「アズ、私は今から奴に入って内側から人間達のソウルを奪い返す。おまえはソウルが出てきたら直ぐに回収するんだ。フラウイーはアズが回収出来るように援護しろ」

「キャラ!? そんな事してもし君まで取り込まれたらどうするんだい！」

「そうさー！これ以上状況を悪くしてどうするんだよー！」



「ふん、今以上に悪くなるとしたら奴が本気で我々を消しに来た時だけだ。良いからやるぞ！」

私は二人を黙らせ、単身でジェノサイダーへと突っ込む。

奴はポーチから取り出したからっぽのピストルから魔力を撃ち出して来るが、それを最小限の動きで躲し最短距離を突き進んだ。

そうして奴の目の前に辿り着いた私は仮の肉体を捨ててソウル一つでジェノサイダーの身体へと向かった。

「へえ？あれを避けるなんて流石だね。でも……………ふふ、ざんねん」

私のソウルが奴の身体に接触しようかというその時、奴の不気味な笑い声と共に左からフライパンが私に叩き付けられた。

「な……………ぐっ……………う!？」

「キャラっ！」

そのまま左から右へと激しく吹き飛ばされた私はアズリエルが直ぐに受け止めてくれたので辛うじて生き延びたが砕けそうな激痛が全身を襲い動く事すらままならない。

「あはっ、内側から彼らのソウルを解放しようと考えたんだろう？思い通りには行かせないよ？」

「ぐ……………だが……………拒んだと言う事は可能性があると言う事だな？」

「ああそうさ、可能性はゼロじゃない。だから不用意に立ち入らせたりはしない」

奴は別段隠し立てする事もなく私の問いに答えた。

それは絶対に立ち入らせないという自信の表れか、それとも隠した所で意味が無いと判断しての事は不明だが……………。

賭けるのならそこしかないだろう。

考えを纏めて私はアズリエルに声を掛ける。

「アズ、どうにかして私のソウルをあいっぴに押し込んでくれ」

「む、無茶だよっ!君のソウルは今の一撃でもうボロボロじゃないか!そんな身体でアイツに干渉するなんて無茶だよ!」

確かにこれは分の悪い賭けだ。

途中で奴の攻撃が掠りでもすればこの身は耐え切れんし、例え干渉出来たとしても私のソウルが耐えられる保証はない……………だがほかの

方法を試せる体力的余裕も時間も無いのなら1%未満の可能性でも試す他あるまい。

「アズ、フラウイー、頼むっ！他に手は無いんだ！」

「うゝ……だけど」

「いつまでウジウジしてんだよこのクソ弱虫が！やってみるしか無いだろうっ！他に方法があれば言ってみな！」

私の案に今一つ踏み切れないアズリエルに、フラウイーが喝を入れる。

まあこいつの場合は自分の情けない姿を見てられなかったのだろうが、それでアズが決心してくれるのなら構わない。

「アズ、解つてくれるか？」

「……解つたよ。でも君を犠牲にしての勝利なんて絶対に認めないからね？」

ふっ、私一人を犠牲に世界が救えるのならそんな安上がりな事は無いんだがな……。

「ああ、肝に銘じておく」

「うん。じゃあ行こうかキャラ、フラウイー」

「絶対にキャラを殺らせるなよ弱虫」

フラウイーの言葉にアズリエルは無言で頷くと、私のソウルを落とさぬ様にしっかりと手に持ち余裕気に私達の出方を窺うジェノサイダーを見据えて足に力を込めた。

「ん？どうやら作戦会議が終わったよう——」

そしてジェノサイダーが話し終えるのを待たずにアズリエルはカオスセイバーを片手に突貫し始める。

「やああああっ!!」

「おいおい、君は相変わらずせっかちだねえ。話を最後まで聞く位の余裕は持とうよ？」

ジェノサイダーが軽口を叩きながらアズリエルに向けて銃の引き金を引いた。

銃口から放たれる魔力は一直線にアズリエルが持つ私目掛けて飛んで来る。

だがその弾は私の少し前でフラウイーの弾とぶつかり威力を相殺した所をアズリエルが剣の腹で叩き落とす事で軌道を変えて突き進んだ。

「流石に息がピッタリだな」

「あんまり嬉しくないけどね」

「おいつ、僕が合わせてやってんだ！勘違いするなよ！」

……反応が返ってくるとは思っていなかったが、まあいいか。

その後も次々と奴の弾を落として行く二人の完璧な連携を眺めながら、私は不謹慎ながらも笑いが込み上げて来るのを悟られない様噛み殺すのに必死だった。

だが、必死な私とは対照的にジエノサイダーは二人の連携を見てとても愉快そうに笑いながら弾を放つ速度を上げて行く。

「あはははは！びっくりしたよ！君達がそんなに息ぴったりだとは思わなかったよ！」

「余計なお世話だ！」

くくつ……テンプレみたいな事を……ふふつ……するんじやないっ。

私は笑いを堪えている間にも奴の銃口から放たれる弾の間隔は更に短くなっていく。

最早マシンガンの様に放たれる弾丸にアズリエルも流石に押され始めて来た。

「ふふふ、そろそろ限界かな？もう少し早くしてみようか」

「ぐつ……くう……！」

更に攻撃が激しくなった時、ついにアズリエルの足が止められ守りに入らざる負えなくなった。

「キャラ……ちよつと中に入れてくれるかい？」

「まて、どうする気だっ」

アズリエルは私を自身の体に隠すと、もう一つの剣を取り出して両手で奴の弾を落とし始めた。

その際にチラツとフラウイーの方を見ていたのを奴も見逃さなかった。

「はは、彼に何を託したのか知らないけど……僕に気付かれないように上手くやるべきだったね」

「そうだね、でも僕が君を止めれば関係ない!」

アズリエルは気取られても焦りを見せずにジェノサイダーの頭上からシヨツカーブレーカーを落とした。

ジェノサイダーは頭上から降る雷撃を軽く躲し、今度はおもちゃのナイフとフライパンの二刀流でアズリエルに接近した。

「その通りさ! 僕を止められるならね?」

「くっ、やってやるさ!」

アズリエルは降りかかって来たナイフを左手の剣でいなして右手の剣で斬りかかる。

だが体勢を崩したジェノサイダーはそのまま右手を床に付き、足に履いたバレエシューズでアズリエルのカオスセイバーを蹴り飛ばした。

「無駄だよ、君一人じゃ僕は殺せない。そして警戒している僕に不意打ちは通用しないよ?」

そうして奴は体勢を戻すのに併せて右手のナイフでアズリエルの左手に持った剣を弾き飛ばした。

「さあ、まずはチェックだね?」

「くっ……!」

奴がアズリエルの喉元にナイフを突き付けてとどめを刺すと宣誓したその時……。

「隙だらけだ化け物おおっ!!」

ジェノサイダーの背後から突然現れたフライウィーは蔓の先を何かで包んでおり、それを奴へと振り降ろした。

だが、奴の視線は既にフライウィーを捉えていたのだ。

「やあ、僕に隙があると本当に思っていたのかい? これでチェックメイト、だね?」

「づっ!?!」

待っていたかのようにフライウィーに笑顔を向けたジェノサイダーは蔓の先の塊を振り抜いたフライパンで吹き飛ばした。

「なっ……なんで……」

「君の性格を知ってれば来るタイミングなんて簡単に予想出来るさ」  
ジェノサイダーは自身の脅威を取り除けた事から得意気に語って  
見せる。

その為か奴は気付いて居なかった……いや、気に留めて居なかった  
のだ。

アズリエルが私を持って突っ込んで来る事に。

そして二人は表情を一変させしたり顔で口を揃えてこう言った。

「なんでそこまで隙を見せられるんだい？」

「あ、しまっ——!？」

奴が理解した時にはもう遅い。

既に私は奴の肉体の中に入り込んだ後であった。

キャラが中に入ってから彼女がピクリとも動かなくなった。

フラウイーの奴が今なら倒せるんじゃないかなんて言っていたけどキャラが居るのにそんな事出来るわけじゃないじゃないか。

だから僕としてはジェノサイダーが動かない状態が続いてくれれば良いと思っていた。

だけどそう上手くは行かないらしい。

「っ！おい弱虫、何時でも動ける様にしとけよ」

「解ってるよ」

僕はゆつくりと顔を上げる奴の一挙一動を見逃さないように神経を集中させる。

だが、奴は動き出す事無く不満げに顰めた顔でフラウイーを睨み付けてながら訊ねた。

「君はキャラを散々裏切っておいて今更媚へつらつたからって赦して貰えるとも思ってるのかい？君は何れ彼女に殺されるだけなのにどうして手助けするんだい？」

「赦してもらおうなんて思っていないし、お前の言う通り何れは殺されるのかも知れない。それでも僕にはキャラがお前に殺された世界よりは数倍マシだと思っうね！」

「そうか、やっぱり協力は得られそうに無いね。なら……お別れだねっ！」

そう言っつてジェノサイダーは僅かに姿勢を低くしたかと思うと、一気に加速し、フラウイーの茎にダガーナイフを振りかぶった。

「させないよー！」

僕は直ぐにフラウイーとジェノサイダーの間に割って入り、奴のナイフを二つのカオスセイバーで受け止めた。

「ぐっ……………ぐぬぬっ……………」

これ……………人間とは思えない力だ！



て行く。

「おい、お前らが取り込まれた人間達だな？」

「な、なんだっ!?何度言われようと僕は協力しないぞ!」

不屈のソウルを持つ少年が立ち上がり前に出てきた。

む?随分と嫌われているな……まあそれについては心当たりが無い訳では無い。しかし、これまでに協力を頼んだ憶えはないのだがな。

「酷い怪我……」

「近づいちゃ駄目、僕の後ろに隠れて!」

私のソウルを見て心配そうに見つめる親切のソウルを持つ少女を正義のソウルを持つ少年が前に出て引き止める。

後ろで立ち上がって見ている三人もそれぞれ誠実、勇気、忍耐のソウルを持っているのが見て取れた。

この状態ではコイツらから協力を得る事は容易ではないだろう。

ならば聞き方を変えようか。

「そうか、ならお前らはどうしたい?」

「僕達が?」

彼等にとっては意外な質問だったらしく隣同士でひそひそと話し始めた。

さて、なんて答えるかな。

私が彼等の返事を待っていると暫くして誠実のソウルと親切のソウルの少女達が前に来て答えた。

「ごめんなさい……私達勘違いしていたわ。私達は解放されたいの。あなたならきつと出来るのでしょうか?」

「あなたはこの身体の主人格ではないのだとそのボロボロのソウルを見て理解しました。だからこそ聞かせて下さい。私達を殺してソウルを奪ったのは彼女なのか……それともあなたなのか」

彼女達と協力すれば全員を解放する事は容易い。

そして誠実の少女が訊ねた事の答えも当然知っているし、言い逃れるつもりもない。

「お前らのソウルを奪ったのは全て私の指示だ。それが間違いだった



とは思わんが仕方無かつたなどと正当化するつもりも無い」

私の意志が六人のソウルをその生命と共に奪った事は変えようのない事実なのだ。

例えそれで協力を得られなくなるとしてもその事実を曲げる様なことは絶対にしない。

「私を恨みなければ好きにするといい。赦されるとは思って居ない、だが……それでも協力してくれるのなら私はお前達を此処から解放したい」

「……………」

六人は皆で相談を始める。

ま、いきなりこんな事言われても戸惑うだろうな。

だがこいつ等に拒絶されれば私の目的を果たす事が困難になるのも事実だ。

それをこいつ等にどう言う気は無いがその後の事も考えねばなるまい。

私はこの後の事を想像しているといつの間にか話し終えたのか、親切のソウルを持つ少女が私の前まで歩いて来ていた。

「む、答えは決まったのか？」

私がそう訊ねると少女は一度だけ首を縦に振り、私の胸に手を翳した。

「これは……………」

彼女が翳した所から徐々に私の傷付いたソウルが癒されていくのが解る。

「私達の生命を奪ったあなた達を私は赦せない……けれど自分の願いを犠牲にしても私達の事を思ってくれるその優しさを私は信じるわ」  
続いて誠実のソウルを持つ少女が私の手を取った。

「あなた達の罪は赦されるものではない。でも、それを理解した上で真実を話してくれたあなたの誠実さを私は信じます」

今度は不屈のソウルを持つ少年と勇気のソウルを持つ少年がその上から手を重ねて続ける。

「僕は強大な存在を前にしても決して諦めずに抗い続けるその不屈さ



んだ」

「諦める？・僕は一度たりとも諦めちやいない！現にここまで来ているし君をどうにかすれば願いが叶う！」

フリスクはポーチからダガーナイフを取り出し私目掛けて振り下ろして来る。

私はそれを左へ少し身をずらす事で躲しながらも続ける。

「お前はそれしかないと思ひ込んでるだけだ！誰も殺さずとも目的を達する事は出来ない！諦めてな！」

「うるさいっ！僕だって色々やってたのは君だって知ってるでしょ！？それでも駄目だったんだからこうする以外に皆を救う方法は無いんだよ！」

奴は私を黙らせようと感情のままにナイフを振り回す。

今のアイツに説得は通じそうにない……だから他の方法を探すか？

それではアイツと変わらない。

自分が最良の結果だと思つたのなら決して妥協しない。

それを可能とするのが己の決意なんだ。

「本当にそうか？お前が勝手に出来ない！と諦め、世界を壊し良い事も悪い事も全て無かつた事にしようとしてるだけじゃないのか？」

「違うつ、それこそが実現可能な唯一の方法なんだ！君のはただの夢物語に過ぎないよ！」

夢物語で結構、実現可能なんて言葉は所詮妥協案に過ぎない。

私は依然ナイフを振るい続ける奴の手首を掴み言い聞かせる。

「実現可能かどうかなんて誰が決めた？お前が経験して勝手に諦めただけだろう！」

「そ、そんな事はっ！」

「無いと言うのか？ならば誰が出来ないと言つた。誰がそれを証明したんだ！」

私が掴んでいる奴の右腕が僅かに震えている。

私はその手を離し、一步前に踏み出して訊ねる。

「なあフリスク、お前はたった数百回試しただけで不可能だと諦める

様な奴だったか？お前がやってきたこれまでだって初めは形の無い夢物語だったと私は思うがな」

「う、うるさい……僕が此処にいる。それは変えようのない事実だ」  
幾ら強がっても無駄なんだよ。

お前自身が随分と前から気付いていたのだから。

それでも自分より意思の弱い者の話など聞かないとずっと誤魔化して来たんだろう。

だからF r i s kや今の私の様な相手の言葉を戯言だと聞き流す事が出来ない。

「本当は誰に言われるまでもなく解っていたんだろ？あの時私を生かしたのもアズリエルを逃がしたのも全て止めて欲しかったからじゃないのか？」

「……………」

腕を下げて肩を震わせるフリスクに私は近付きそつと手を伸ばす。

「お前はさつきお前に味方が居ない様な事を言ったな？」

「ああ言ったさ、だから何だって言うんだい？まさか君が味方に付いてくれるとでも言うのかい？」

「いや、済まないが私の仲間是他にいるんでな？だが、お前の元の時間軸に戻ればお前を本当に大切に思ってる仲間が直にやってくるさ」

私は口角を吊り上げて笑顔で伝えてやった。

「はは……なんだよそれ。そんなサイコパスみたいな顔で言われて信じてろって言う方が無理だよ」

フリスクはそう返しながら当て付けのように同じ顔で柔らかくはにかんで見せた。

「ちっ、失礼な奴め。お前みたいな奴はさつきと自分の居た場所に帰れ」

「あははっ、そうだね？どうやら此処にいるよりは安全そうだし僕は帰るよ」

そう言って後ろを振り向き歩きだそうとするフリスクを私は呼び止める。

「さて、一人で帰れるのか？世界線はアズなら解るし送ってやるぞ」  
「遠慮しておくよ。知らない人とサイコパスにはついて行くなってママに言われてるんだ」

こいつは本当に失礼な奴だな。

それと後ろで頷いてる二人、後で覚えてろよ？

フリスクは先程までの空気など一切気にすることなく腕を大きく振って暗闇に消えていった。

……さて、後はお前らを解放してやらないとな。

\*キヤラ、あなたの願いはなに？

ん、私の願い？そうだな……自分の居場所を見つける事かな。

誰かの代わりとしての場所ではなく、自分の居場所だと言える場所をな。

\*そっか、ねえキヤラ。あなたのその願い、私達にも手伝わせて？

な、なにを言ってる！お前達は自分達の居場所に戻れるんだぞ？

それに私はお前達にとって加害者だ、私に協力する義理などないだろう。

\*確かにあなたは私達に酷い事をしたのは変えられない事実です。

\*でも君は僕達を彼女から解放してくれたし、ちゃんと約束を守ろうとしてくれた。

あ、ああ……それがお前達との約束だったからな。

私としてもおかげで奴を説得出来たしお前達には十分助けられた。

\*そう、だから此処からは僕達が決めた事だ。

\*あなたの思い描く願いを私達にも見せてほしいの。

\*君が嫌じゃなければ私達にも協力させてくれないか？

………本当に人が良いなお前達は。

ありがとう、私からも是非お願いする。

\*うん、よろしくねキヤラっ。

ああ、よろしく頼む。

ええと………すまん、名前を聞いて居なかった。

\*ふふ、後で教えるわ。それよりあなたのお友達がさつきから心配そ

うに見てるわよ？

へ？ああ、そういえば随分と話し込んでしまったな。

私が意識を表に向けて見ると心配そうに私の両肩を掴むアズリエルと足元で次々と弾をぶつけてくるフラウイーの姿が視界に入った。此奴は反省するという言葉を知らんのか？ここは少々きつい灸をすえる必要がある様だな？

「キャラ!?大丈夫かい!どこが悪い所があるのかい!?ねえ!」

「立ったまま寝てるのかよ。えいつ……えいつ……すげえなコイツ、全然起き……あ……」

「アズ、私は大丈夫だ。それよりもそのクソ花を捕まえてくれ」

私は奴の蔓を踏みつけてアズリエルに捉えるように頼んだ。

アズリエルは素直に私が言った事を実行に移してくれた。

「ちよちよちよまつ!?!キ、キャラ?よかった、気が付いたんだね?」

「よし、アズはちよつと目を瞑って耳を塞いでくれるか?」

「う、うん。わかった」

私はアズリエルからクソ花を受け取ると少しだけ離れて、奴を地面に押し付ける。

「あ、あのね?聞いているかいキャラ……?あれは、ちよつとしたお茶目で……やめ……殺さないで……」

「殺しはしない。今から貴様に灸をすえてやるだけだ。だが……動いたら命は無いと思え?」

そう言っ私はポーチからダガーを取り出し奴の花弁と花弁の間の隙間に突き刺した。

「ひ……や、やめ……て……」

「どうした、まだ始まったばかりだぞ?」

「ひ、ひい……ひぎやああああああっ!!!」

\*……ほんとについて行っても大丈夫かしら?

NERVELESS TALE (side C)

……あれからフリスクの奴は私の身体を乗っ取ったまま骨どもの家で暮らし始めた。

奴の片割れはるいんずの家で暮らしてるらしいが頻繁にこつちに来ている。

その間私はと言うと奴からどうにか身体を取り返そうと何度か試みたのだが、何れも上手くはいかなかったのだ。

その上奴に植え付けられた記憶が頭から離れずに私は得も言われぬ感情に振り回されていた。

私は記憶の中の奴私みたいな甘ちゃんではない。

だが、億を超える程繰り返し返される世界の中で果たして私は奴等の様に決意が挫けずに居られるだろうか？

違う！きつとそんな事を考えているから奴から身体を取り返せないのだ。

あんな甘ちゃん共に出来る事が私に出来ない等ありえんのだ！

……他に原因があるはずだ。

私の身体が奴に奪われてからそろそろ1ヶ月が経とうとしていた。私は未だに身体を取り返せないし、奴は奴で長身の骨とデートとか言っつて他のモンスター達の所にしょっちゅう遊びに行っている。

果たしてそれをデートと呼ぶのかはさて置き、奴らは何も無い日常を満喫していた。

「来たかパピルス！ニンゲン！ならば今日も料理の特訓をしてやろう！」

「おねがいます！」

今日はアンダインの所で料理の特訓のようだ。

どうでもいいがこいつらは過去10回の特訓の内10回とも家を火事で全焼させている。

それでも次の時には楽しそうに料理？を始めるのだからどうかしている。

だが、そんな事よりも気になる事がある……私の知っている奴らはもつと無感情だった筈だ。

笑顔などその骨以外ではトリエルやアズゴアの疲れきった笑み位しか見た事がなかった。

なのにどうして今は……。

\*それは君が皆と一線を引いていたからだよ。

……聞いてたのか、嫌らしい奴め。

\*人間達に復讐する事しか頭に無かった君は皆と必要以上に関わろうとしなかった。

\*でも別にモンスター達を恨んでた訳じゃ無かっただろう？

ふん、余計なお世話だ。

私は役に立たん奴らなどに興味など無い。

奴らなど私の決意の糧となれば良いのだ。

\*ふうん？でも君は――

「ハハハ、またやってしまったな！」

「さすがアンダイン！カッコイイー!!」

\*おっと、今回も彼女の自宅に炎grillbyが住み着いてしまったようだ。毎回飽きもせず良く燃やすなお前らは。

\*はは、僕も料理はちよつと分からないからね。

「おいニンゲン！そろそろ出ないと焼けてしまうぞっ」

料理とかそういう次元では無さそうだが……兎に角外に出たらどうだ、それとも此処で焼け死ぬ気か？

\*いや？そんな事はないよ、すぐ行くさ。

奴はそれだけ答えるとドアを開けて待つアンダインの所へ駆け出して行った。



アイツらと関わるか………私には必要のない事だ。  
私は少しだけ浮かび上がって来た雑念を振り払い、自身の意識を奥深くへと沈める。

奴から肉体を取り戻し、今度こそ目的を果たす為に……。

d e t e r m i . . . . . n a t i o n ?

# GENOCIDER TALEX NERVEL ESS TALE

この世界のキャラが地下に落ちて来てからそろそろ2ヶ月が経とうとしていた。

そんな僕は今日も今日とてスノーフルにあるパピルス（とサンズ）の自宅で憧れの彼と甘い一時を過ごしていた。

「起きろキャラアアアツツ!!朝だぞおおおつつつ!!」

「んくう……む……」

布団は一気に剥ぎ取られて肩を掴まれ激しく揺さぶられる僕は寝惚けるフリをしながらパピルスへ左手を伸ばす。

因みに彼が混乱してしまうのを防ぐ為に僕は身体の持ち主であるキャラを名乗っている。

「ニヤッ?何だまた寝惚けて居るのかあ……仕方ない奴だ」

「ん……う……」

すると彼はいつもの様に優しく僕を抱き上げてくれた。

ああ……幸せだ。彼女も一度味わえばきつと病みつきになるのになあ。

僕は早打つ鼓動を抑えながら落ちないように彼の首にそつと左腕を回す。

起きている事を悟られない様に自然を装って……。

「……………」

何時もならこのまま彼はリビングまで僕を連れて行ってくれるのだが、今日の彼は様子が違った。

彼は僕を抱いたまま立ち止まり、動きだす気配が無い。

どうかしたのだろうかと僕が彼の様子を見ようとそつと薄目を開けてみると……。

「……………」

「!?……………すう」

う……どうしよう。パピルスと目が合ってしまった。



く優しく微笑む。

「ありがと、もう大丈夫だよ。それと……さつきはごめん」

「お、俺様こそごめんよ！兄ちゃんがキャラに怠け癖が伝染った時  
にって治す方法を教えてくれたんだけど、上手く出来なくて……」

落ち込む彼を慰める様に頭を撫でながら何処からか見ているであ  
ろう黒幕の姿を思い浮かべる。

きつと今頃どこかで腹を抱えながら見てるんだろう？

「心配しないでよパピルス。君のお陰で怠け癖は飛んでいったよ」

「ほんとかつ!?それは良かったぞ！貴様まで兄ちゃんみたくなっ  
てしまったらどうしようかと思ってたんだ！」

安心した様子のパピルスから僕は視線を扉の方へ移す。

覗いてるなら恐らく扉の先からだろうか？

彼をどうにか懲らしめてやろうと考えていると視界に入っていた  
扉が大きな音を立てて勢い良く開かれた。

「フリ、じゃなくて……キャラ！大変だよ！あっちのキャラ……ラ……  
が……」

「……………ええと」

慌てて入って来たF r i s kだったが僕達の方を見たまま固まっ  
てしまった。

僕はその様子に疑問を覚えながら改めて今の状況を整理してみる。

仰向けに横たわる僕とその上に覆い被さったままF r i s kを見  
つめるパピルス。

そして此処までの経緯を知らないF r i s kが僕らを見て固まっ  
ている。

……うん、これは完全に誤解されてるね。

とっ、とにかく後々気まずい事になる前に今この場で誤解をとい  
ておかないとっ。

「F r i s k?これはその……」

「!?ご、ごめん！なななにも見てないから！」

僕は弁解すべくF r i s kに超えを掛けるも、彼は話しを続ける隙  
も無く慌てて部屋を出て行ってしまった。

「二?どうしたんだフリスクツ!？」

「あ、ちよつと!？」

更には突然部屋を飛び出して行ったF r i s kを追ってパピルスも同じように部屋を出て行ってしまった。

パピルスも下に降り部屋に残された僕はベッドから上体だけ起こして溜息一つ吐くと、誰もいない空間へ声を掛けた。

「……で、この状況をどうしてくれるんだい?サンズ」

僕の問いに反応するように突然目の前に現れたのは、バツの悪そうな顔をしたスケルトン。

「いや……わりい、オイラも流石にあのタイミングでF r i s kが来るとは思わなかったんだ」

「だろぅね?君も弟が心配だったんだろうしまあいいさ。ただ一つ言わせて貰うなら、僕がパピルスとそういう仲間になる事はないよ。それでも彼に余計な口出しをして僕の安らぎを邪魔するのなら……相応の覚悟をしておく事だね」

僕は紅い眼を見開いてサンズに警告を発する。

彼は暫く黙ったまま警戒する様に僕を睨み返して居たがやがて顔の力を抜いて答えた。

「お前さんの事は嫌いだが、あいつに変な事をしないつつうんなら約束しよう」

「あは?こんな子供に忠告するような事じゃないと思うけどそれは安心していいよ」

「お前さんみたいなきソガキだから忠告してんだよ……確かに聞いたからな?」

それだけ言い残すとサンズは僕の目の前で消え去った。

全く過保護なお兄ちゃんだね彼は。

僕にとつてパピルスは親しい兄のような存在だというのに。

あ、そうするとサンズは妹を虐める悪いお兄ちゃんって事になるのか……サンズが兄は嫌だなあ。

——つとそうだ!こんな事をしている場合じゃなかった。

早くF r i s kの誤解を解きに行かなきゃ!

僕はベッドから飛び降り、さつさと部屋を出ていくのだった。

僕が下のリビングに降りると予想以上に人が集まっていた。

取り敢えず初めにFriskの誤解を解く為に彼に声をかける。

「Frisk！良かった、さつきの事情を話そうと思ってたんだ」

「ああ、それならさつきパピルスから何があったのか聞いたから大丈夫だよ……その、変な勘違いしちやつて……ごめん」

そっか……彼に聞いたのか、なら良かった。

顔を赤くして俯くFriskの話聞いて僕はほっと胸を撫で下ろし、改めて周囲を見渡す。

そして僕は此処では見ない三人の内の一人に声を掛けた。

「それで君は……久しぶり、でいいのかな？」

「そうだな変態、先ずはお前が何故その姿で居るのか聞かせて貰おうか」

えっ？ 出会い頭に変態呼ばわりされる様な事をしたつもりは無いんだけど……？

と言うかアズもフラウイーも如何してそんな冷めた目でこっちを見てるんだい？

謂れのない侮蔑を受けた僕は頭を捻って原因を考えてると、心優しいフラウイー君が補足してくれた。

「おい変態野郎。こっちも暇じゃ無いんだからさつさと話せよ」

野郎……ああ、そういう事ね。

まあ別に勘違いさせたままでも良いんだけど、何かある度にこんな事言われるのは流石に心外だし正しておこうか。

「ええと、その前に一つ聞きたいんだけど……この中で僕が男の子だと思ふ人は手を上げてくれるかな？」

……5……いや、さり気無くこっちのキャラも上げてるからパピル

ス以外全員かな。

「……………」

ええ……うん、ごめん。

キャラ達はいいや、僕も明言してきた訳じゃ無いし喋り方とか一人称だけ聞いたら判断つかないだろうから。

サンズについてもまあ、いつか。

弟が男に言い寄られるなんて嫌だもんね？

けどねえ……………？

僕はジト目でF r i s kへと視線を向ける。

彼は僕と目が合うと気まずそうにゆっくりと視線を逸らした。

「F r i s k、何か言いたい事はあるかい？」

「え……あの……本当に？う……えと……ごめん。今の今まで気付かなかったよ……あ、そつか。だからホットランドの時……」

ん、ホットランド？あく、そういう事ね。

うん……………流石にシヨック大きいなあ。

はあ……でも仕方ないか、自業自得でもあるし……うん。

今後少しでも意識してくれば儲けものだと同向きに考えよう。

「別に良いけどね、君が知っていようが知らなろうが僕の想いが変わる訳じゃないし？」

「そ、そうだね！僕達はずっと親友だもんね！」

「……………」

リビングをなんとも言えない沈黙が包み込む。

……………モウイヤ、ハナシヲモドソウカ。

「ええと……ごめんごめん、話がズレちゃったね？まあここまでの経緯を話すと——」

気を取り直して僕は彼女との出会いから今に至るまでを掻い摘んで伝えた。

「——と、言うわけで僕が彼女の身体を借りてる訳なんだ」

僕が概ね説明を終えると難しい顔で考えていたキャラが僕に問い掛けてきた。

「なあ、フリスク」

「ん、なんだい？」

「思ったのだが……やはりお前は口調か一人称を変えた方がいいんじゃないか？」

「……………おかしいな、その話は終わった筈なんだけど……僕の聞き間違いかな？」

僕は再びキャラに聞き返した。

「キャラ、これまでの経緯の中で質問があるんだよね？」

「いや、話は概ね解った。だがお前の見た目でその一人称はやはり誤解を生むと思うのだ」

残念な事に聞き間違いじゃなかった。

彼女はここまで食いついて居るのだろう。

話を出した自分が言うのもなんだけどひとの性別なんて正直どうでも良いじゃないか。

と言うか口調についてはキャラにだけは言われたくないな。

「はあ……そんなこと言われても突然変えられるものじゃないし、仮に僕が自分の事を私とか言い出したら違和感があると思うよ？」

「むう……それもそうか」

どうやら彼女なりのジョークだったのかな？

ま、納得してくれたなら何よりだね。

「兎に角、こっちはそんな感じだったけどキャラ達の方も何かあったみたいだね？」

「ああ、お前には苦労させられたよ。まあ色々と収穫はあったのが唯一の救いかな」

そう言つてキャラはパピルスが用意してくれたお茶を一啜りすると、僕らがこっちに飛ばされた後の話を聞かせてくれた。

「なるほど……ぼんやりと君達と戦った記憶が有るのはそういう事だったんだね」

「ふふ、そうか。なら彼奴はちゃんと仲間に出会えたのだな」



そう呟いたキャラは何時ものサイコパスな笑顔とは違い目を細めた柔らかい笑みを浮かべていた。

\*……………

やっぱりキャラは凄いなあ、僕がしようとしてる事を既に実現させてしまっているんだから。

僕は話を聞いて鮮明になった記憶を思い浮かべながら彼女へ感謝の念を抱いていると、キャラが不意に表情を戻して話し始める。

「だが……少し不安な事がある」

「不安な事？」

「ああ、ガスターは確かに私達の目の前で死んだ……だが、最期にあいつに言った台詞が引つ掛かるのだ」

—だが次は君の思い通りにさせないさ—

ガスターは塵となる前にそう言ったらしい。

キャラ達には信じられない話だが、僕とFriskには心当たりがあった。

奴自身が言っていた事、そしてこの世界での実験が成功しているのであればガスターは死ぬことは無い……いや、正しくはどれだけ死のうと奴の記憶や存在が失われる事はないのだ。

奴は存在する全ての世界線に同じ記憶を持っている。

だから奴の妨害はこれからも有ると考えた方がいいだろう。

「Frisk……」

似たような答えに辿り着いたであろうFriskが心配そうに僕を見る。

僕は彼に目で頷くとキャラ達へ向き直り皆へこれからの動きを伝えた。

「キャラの不安の通りガスターの邪魔はこれからも入るだろうね。そして奴は全ての世界線の自分と記憶を共有しているから止める事も容易じゃない」

「馬鹿な……クソつ、奴の余裕の意味はそういう事だったのか」

「はあ!?!なんだそりゃ?じゃああの卯野郎は実質死なないって事かよ!」

納得の行かない事実にはキャラとフラウイーは苛立ちを露わに机を叩く。

アズリエルに関してはあまり実感が湧かないのか首を捻って悩んでいた。

皆の反応はそれぞれだけど正直言った僕自身ですら信じたくない話なのだから仕方ないね。

そんな中、不意にFriskが手を挙げて皆の注目を集めた。

「え、えと……考えたんだけどさ、ガスターにも協力して貰える様に話し合ってみたらどうかかな?」

「おおっフリスク!それは名案じゃないか!」

パピルスはFriskらしい提案が大層気に入ったみたいだけれど、彼とは対称的に僕やキャラ達は浮かぬ顔をさせていた。

と言うのもキャラから聞いた話やこれまでの奴の言動から察するにFriskとガスターの願いは共存出来るものではないからだ。

無論絶対には有り得ないわけじゃ無いが……それはどちらかに妥協を強いる形となるだろう。

「Frisk、君はもしガスターに『自分達以外の世界に関わらないのなら協力する』と言われたら妥協出来るかい?」

「それは……うう……」

直ぐに答えられないのが答えだろう。

悩み抜いた結果大丈夫だと答えた所で彼は幸せにはなれない。

だがガスターが言ってくる妥協点としてはそれ以上は望めないだろう。

そもそも僕らの存在を脅威に感じてるのならそれすらも許さないだろうからね。

だから僕はFriskが答える前に口を挟んだ。

「ま、実際一番現実的な手段ではあるし方法の一つとしては考えてみるさ」

「そうだな、万一上手く行けば奴の存在を全て消し去るよりは手間は

かからんしな」

キャラは椅子の背もたれに寄り掛かりながら天井を眺めつつ僕の言葉に賛同した。

他の皆も同意見らしく同様に頷いている。

さて、取り敢えずの方針はそんな所かな？

後は奴に会いに行く方法と……やっぱり僕らの目的の為に例の実験を成功させる必要があるかな？

「おい、フリスク。ちよつといいか？」

僕がどうすれば良いのか考えていると不意にキャラが真面目な顔で呼び掛けてきた。

「へ、どうしたのキャラ？」

「ややこしい……ジエノサイダー、お前だ！」

「え？あ、ちよつとま——」

「コイツと個人的に話がある、お前らは此処で待つてろ」

キャラは苛立たしげに僕を呼ぶとこの手を引っ張って家を離れた。

パピルスの家を出た僕達は嘗て彼が立ち塞がったスノーフルとウォーターフェルの境の雪道へとやって来た。

「さて、この辺りで良いか」

「個人的な話だなんてどうしたの？僕は基本的にはノーマルだから愛の告白とかはちよつと困っちゃうな？」

「黙れ、用があるのはお前じゃない」

わお、相変わらず冗談が通じないねえ？

別に良いんだけど……それより僕に用事がある訳じゃないって事はつまりそういう事だよな？

「この世界の君に話したい事があるって事だよな？」

「そうだ、一度奴に身体を返してやれ」

「……大丈夫なのかい？」

彼女は決意が揺らいでるとはいえその強さは並じやない。

今は彼女の心の隙を突いて主導権を握っているが、今の僕には一度

解放した彼女を再び取り返せる確証はない。

それでもキャラは問題ないと力強く答えた。

「……解った、じゃあ後は任せたよキャラ？」

「任せておけ」

そういう事だからね、予定とは違うけど……キャラ、君に身体を返そう。

\*ふん、私を解放した事を死ぬ程後悔させてやる。

大丈夫さ、他ならぬ君自身が任せろと言ったんだからね？

\*クズが、あんな甘ちゃんと私を一緒にするな。

僕は毒を吐く彼女の変わらない態度に苦笑しながら身体の主導権を返す。

キャラ、僕は君達を信じてるよ。

すのーふる　くC&Cく

目の前に立つ存在は先程までの巫山戯た様子ではなく私に対して敵意を滲ませた笑みを浮かべている。

「感謝しておこう、どういう訳か知らんが貴様のお陰でこの身体を取り返せた」

「私はアイツら程気が長くないんでな、さっさとガスターの奴をふん捕まえて大団円と行きたいのだ」

こんな奴が私自身だなどと認めたくは無いが、奴が私と同じなら奴のやり方では何時まで掛かるか分かったもんじゃない。

それに私が奴らに協力すれば態々コイツに協力して貰う必要も無く此処を出れる。

だから私は此処で説得する。

協力は得られなくとも邪魔しない様に言い聞かせるだけならさほど苦労は無いだろう。

「さて、お前が心を改めて生きると言うなら私はお前を見逃そう。だが――」

私が話し終える前に奴は取り出したダガーナイフで斬り掛かってきた。

私は後ろに跳ぶ事でそれを躲し、目を見開き口角を吊り上げる。

「交渉決裂で……良いんだな？」

「ふはははっ！私を見逃すだど？やはり貴様は私ではない、ただの阿呆だ！」

ふっ、確かに私はお前とは違う。

そこだけは同意してやろう。

私はポーチから木の棒を取り出し奴へ突き付ける。

「お前がその気なら私はこいつでお前の脆弱な決意をへし折ってやろう」

「貴様……そんな物で私を止められると思っているのか？」

「良いから来いよイミテーション。私が恐いのか？」

安い挑発に苛立ちを隠しきれない奴へ私は更に煽り立てる。

直後、奴は弾けるように飛び出すとナイフで私の身体を貫こうとして来た。

私はその直線的な攻撃を屈む事で躲し、反撃に奴の腹を蹴り飛ばす。

「ぐっ……甘い！」

だが、確かに蹴り飛ばした筈の奴は次の瞬間にはナイフを振り下ろしていた。

「ちいつ！面倒な奴め！」

私は右に転がる事でどうにか躲すが、奴の攻撃はまだ終わらない。距離が開いたとみるや今度は斬撃を飛ばしてきた。

「無駄だ！私は貴様の様な腰抜けとは違うのだ！」

「どつちが腰抜けだ、そこまでLOVEを得なければ骨を殺す程の決意も抱けなかった癖に！」

私は次々飛んで来る斬撃を木の棒で相殺しながら奴の琴線に触れていく。

「黙れっ！貴様らの世界と一緒にするな！」

「ふふ、下らんな。私達の世界なら簡単だったとでも？」

「でなければ貴様等のような甘ったれに出来た事が私に出来ぬはずが無い！」

なるほどな？清々しいくらい利己的な思考だ。

その傲慢さも決意が伴っていれば悪くないが、これではただの子供の癩癩だ。

まあ実際に子供なのだから仕方ないがな。

私は木の棒で奴の斬撃を捌きながら徐々に距離を詰めていく。

「お前の決意が我々を超えろと言うのなら私に示してみろ」

「ぬかせっ！私の決意が貴様らなどに負ける筈が無い！」

奴は一気に距離を詰めると我武者羅にナイフを振り回しはじめた。流星にきついが……まだ当たる訳には行かない。

奴を捕らえるまではな。

私は奴の決意を応用した攻撃に対応するべく常に三手先を読みながらナイフの軌道避けていく。

「私の動きに反応出来るとは思ったよりは出来るようだな？」

「なに、アイツに比べればお前の動きなど止まって見えるさ」

「……いちいち癪に障る奴だな貴様は！」

私の挑発と一撃も与えられない苛立ちからか奴の攻撃が段々と大振りになっていく。

「どうした？フリスクならば既に私に致命傷を与えている所だぞ？」

「黙れえっ!!」

そして遂に奴は怒りに任せて私の頭上からナイフを振り下ろした。

普通のモンスターなら受け止める事すら叶わないであろう一撃だが、今の私で有ればその程度造作もない。

私はやつの手首を掴み、何時もの笑顔のまま奴を見返す。

「ふっふっふ、どうした？貴様の決意はこんなものか」

「な、なんだと！くっ……離せえ！」

私の手を逃れようと暴れるが逃れる事は叶わない。

「いい加減気付いたらどうだ？貴様の中途半端な決意では私やフリスク達はおろか本気のサンズにすら勝てん」

「……なに？今の私が貴様らだけでなくあの骨に勝てないだど!?奴らの邪魔さえ入らなければ殺せた！それに奴と同じだけのLOVEを手にすれば貴様や奴にだって負けはしない！」

奴はナイフを持ち替えて私の肩を切り付ける。

だがその傷口は塵になる事も出血する事もなかった。

「なっ!?有り得ない！」

奴は動揺を隠し切れずも再び私に斬り掛かった。

それでも結果は変わらない。

「何故だ！何故傷付かない!?!いや、違う……最初から分かっていたなら如何して私のナイフを避け続けた!!」

「だから初めに言っただろ。お前の決意をへし折ってやるってな？お前の決意では私に攻撃を当てる事も傷付ける事も出来んだ」

私が7つのソウルを持っているからだど？

そんな物は理由にならん。

現にジェノサイダーの奴は今の私と近い状態のガスターを殺して

いるし、あの時だってガスターを殺った時のように奴が手段を選ばなければどうなっていたかなど容易に想像出来る。

だが僅かとは言え積み重ねて来たものを捨てるというのは簡単な事では無いのだろう。

「有り得ん……貴様なんかにつ……くそっ！」

奴は声を荒らげながら何度も私の肩にナイフを突き刺す。

私はそんな事も気にせず奴へと語り掛ける。

「キャラ、お前は追ってから身を隠す為に此処に落ちてきたらしいな？」

「だからどうしたというのだ？」

「それが事実ならお前はただの馬鹿だが……もしお前が私と同じ様な存在なら他に考えた事があつたんじゃ無いか？」

「ふん、知らんな」

奴は身に覚えは無いといった態度を示すが、僅かな視線の揺らぎまでは隠しきれてなかった。

「ふふ、心当たりはあるのだろうか？そうでなければお前は私に馬鹿呼ばわりされた事に怒りを示している筈だからな」

「……っ、下らん！これ以上安い挑発に乗るものかっ」

散々乗せられておいて何を今更。

「今更そんな事そんな事する必要が無い事くらい解るだろうに」  
「……………」

「そうか、答える気はないか……ならば代わりに答えてやろう。お前が本当に危惧していたのはF r i s k達がモンスターを殺し尽くし、そしてこの世界を壊してしまう事だつたんじゃないか？」

奴は何も答えない。だがこの沈黙は肯定と捉えて問題ないだろう。

なので私は気にせず話を続ける。

「だからお前は地上でLOVEを集めて奴らをこの地下で排除しようと降りてきた。違うか？」

私は奴の手を手を掴んだまま問い掛ける。

すると先程まで沈黙を続けていた奴は暫くして深い溜め息を吐きながら喋り始めた



「はあ……下らん妄想話を聞かされて興が醒めた。もういい、勝手にしろ」

興が醒めた……ねえ？

「ああ、取り敢えずそういう事にしておいてやる。我々の目的の邪魔にならなければそれでいい」

「ふんっ！」

奴は不貞腐れたようにそっぽ向くとそのままフリスクに身体の主導権譲った様だ。

こういう所は私と同じで素直なようだな。

「えっと……僕が言うのもなんだけど、強引過ぎないかな？結局彼女と和解出来た訳じゃないし」

「奴の協力は不要だし邪魔さえされなければ構わん。それよりもこれ以上あの卵野郎に時間を与える方が問題だ」

「いや……まあ、そつか……僕達を此処に飛ばしたのは時間を稼ぐ為って事も考えられるよね」

それも有るだろうが本質では無いだろう。

その証拠に奴はこれまでの事を実験と言っていた。

つまり我々のデータを元に何かを企んでいる事になる。

だからと言って弱気になってる訳じゃないが奴程の存在が私やフリスク達を止める事に躍起になっている以上慢心は出来ないのだ。

「兎に角F r i s k 達を呼んで直ぐにこの世界を出るぞ」

「……待って、それなら出る前にパピルスとサンズの二人に話したい事があるんだ」

話したい事？この世界のアイツらに何を話すつもりだ……まあそれくらいなら別に構わんだろう。

「解った。私達はg r i l l b y sで時間を潰してるから話し終えたら来い」

「ありがとうキャラ、僕達と彼らの四人で話したかったんだ」

そうして私はアズ達を引っ張り出す為にフリスクと共に骨の家に戻ったのだった。

すのーふる　　（FP）

キャラ達に席を外して貰った僕は今、Friskと二人でスケルトン兄弟と机を挟んで向かい合っている。

パピルスが興味津々で僕が話し始めるのを待っている隣でサンズは相変わらず考えが読めないニヤケ顔で僕を見ていた。

さて、どうやって伝えようか。

一歩間違えれば即BAD　TIMEが始まる様な話をしなければならぬだけでなく、僕自身も心苦しく正直伝えたくない内容だ。

……………よし、これで行こう。

一つ一つ口にする言葉を考え、そして遂に覚悟を決めた僕は漸く口を開いた。

「パピルス、僕の為に死んでくれないか？」

「……………」

「……………エエエエエエエエエエエエツツツツツツ!???」

「いい度胸してんなクソガキイ?そんなにサイアクなメにあわされたかったんだったらそう言えよ、死ぬほど後悔させてやるからよお!!」

「ま、ままままっ!?話は最後まで聞いてよ!ストオオツプ!!」

サンズが腕の前に出した直後、部屋を埋め尽くす勢いで現れたガスターブラスターが今にもエネルギーを解き放とうとする中、僕は大慌てでサンズに落ち着くよう頼み込んだ。

そのおかげかサンズが後一步の所でどうにか踏みとどまってくれたので僕は安堵の溜め息を吐きながら話を続ける。

「はあ、今のは語弊を多分に含んでいたのは解ってる。別に実際に死ぬとか消えるとかそういう事じゃないんだ」

「じゃあどういう事だ?」

サンズは伸ばした腕を降ろさずに続きを促してくる。

ふう、まずは第一関門突破って所かな。

これで後の話がしやすくなる。

「まあ簡単に言えばガスターが人間の決意を使って行った実験をして貰いたいんだ」

「おまえ……本気で言ってるのか？」

「ああ本気さ、だからってまた君と最悪な時間を過ごしたい訳じゃないからそれを引つ込めてくれないかな？」

「あの実験が成功してるかも解らんにパピルスをもルモットにするつもりじゃねえだろうな？」

「実験結果は本人から聞かされたよ。ただし今とは生きる世界が変わってしまうし全ての世界線と記憶を共有する事になるから辛い記憶や自分とは異なる考え方に性格が変わってしまう事は充分有り得るね」

それに……僕は彼に恨まれるかも知れない。

「だからパピルスやサンズが嫌なら強いるつもりは無いんだ。そのかわりしつかりと理解した上で決めて欲しい」

「それで、もし実験に失敗したらどうするつもりなんだ？」

「戻れるのであればロードして二度目はやらない。戻れない場合は………ごめん、これに関しては何が起こるか分からない以上今は答えようが無いや」

僕はサンズへ事実を正しく伝える。

彼は顎に手を当てて暫く考えると、再び質問を投げ掛けて来た。

「この実験はパピルスでなければならぬ理由は有るのか？」

「サンズ、君の気持ちは解るよ。だけど彼以外に僕の話信じて命を賭けてくれるモンスターがいると思うかい？」

「……ねえな、そもそもそんな馬鹿げた実験をする意味が解らねえ」

「そうだね。だけど僕だって理由も無くそんな事はしないさ。僕の理由はこの世界の完全な隔離。そしてもう二度と僕の様な存在を生み出さない様に今存在する全ての世界線へ干渉する事だ」

「フリスク……それって……！」

Friskが驚くのも無理はない。

何故ならそれは嘗て彼が願い、そして僕が否定した事と大差ない事を言っているのだから。

流石に全ての前提を書き換えてしまうのは前に言った通り世界を壊す事と同義だからやらないけど、今のキャラみたいに魔力で身体を

造る事位なら方法はあるんじゃないかなと思う。

だがここまでではサンズ達に關係の無い事だろうから僕は話を続ける。

「サンズ。この世界だってこのキャラみたいな考えの人間が今後落ちて来てもおかしくない。と言うか地下に落ちてくる人間は大抵上で何かがあった末に落ちてくると言っても過言じゃない。そんな彼ら彼女らが道を誤らないように僕という案内人が必要だと思ったんだ」

「……確かに、奴はお前らが居なくても奴はいつかオイラを殺していたかも知れねえしな。お前の言い分は分かった」

「サンズ……」

「だがまだ認めたわけじゃねえ。実際お前さんじゃなくてもFriskにやって貰っても良いわけだろ」

サンズとしては僕より彼の方が信用出来るみたいだ。

だが残念な事にFriskには出来ない理由があるんだ。

「Friskは僕と違ってこの世界に来るまでも含めて一度たりともLOVEを得ていないから、僕やキャラみたく心を身体から離す事が出来ないんだ」

「ごめんねサンズ」

「別にお前さんが謝る事じゃねえ。だがそうだな……それならやつぱりこの話は——パピルス？」

先程まで黙ったまま腕を組んで座っていた彼だったが今まさにサンズが断ろうとしていた所を遮る様に出てきたのだ。

「パピ……ルス？」

「二人の話は難しすぎてさっぱり解らん！だが要は貴様は皆を救いたいのだろうか？それで偉大なる俺様の助けが欲しいんだな！任せろっ！このグレートなパピルス様が全て解決してやるぞ！ニヤーハツハツハツハ！！」

えっと……しっかりと理解した上で……って、言った……よね？

「パピルス、分かっているのかい？下手をすれば皆に会えなくなるかも知れないんだよ？」

「大丈夫っ！俺様と貴様が手を組めば問題ない！」

「おい……考え直せつてブラザー、そもそもお前にメリットがある訳じゃねえんだぜ？」

「兄ちゃん！英雄は友達を助けるのに損得なんて考えたりしないものだ！」

その後も暫く僕とサンズが二人掛りでよく考える様に言い聞かせるが、すっかりその気になっているパピルスは一步も引こうとはしなかった。

「はあ……パピルス、本当に良いのか？」

「勿論だ兄ちゃん。フリスクは俺様の友達だからな！友達の力になりたいと思うのは当然だろう？」

「……はあ、俺はちやんと言ったからな」

「パピルス、僕からも最後に聞くけど……本当に良いんだね？」

「ああ！俺様は大丈夫だぞ！」

僕の最終確認にパピルスは眩いばかりの笑顔で答えた。

そんな彼の笑顔を信じて僕は強く決意を漲らせる。

「分かった、じゃあ行こうか。サンズ、コア内部まで頼めるかい？」

「……ついてきな」

浮かない顔のサンズに申し訳なく思いながらも差し出された彼の手を掴みコア内部へ向かった。

—————

ショートカットで瞬時にコア内部まで来た僕はキャラに身体を返すと早速パピルスの元へ向かった。

「おお！これがフリスクのソウルなのか！赤くてカッコイイな！」

「はは、ありがとう。それじゃあ行くよ？」

「うむ！何時でも大丈夫だ！」

僕は彼の身体を労る様に慎重に入っていく。

彼は興味津々で僕のソウルが身体に入っていくのを眺めており、特に変わった様子は無いようだ。

そうして僕のソウルが完全に中に入った辺りでパピルスに様子を訊ねてみた。

「ん？何か変わった事が無いかだつて？ん？そう言えば身体が随分軽くなつた気がするぞ！」

ここまでは成功かな。

まあ互いの意思で1つになるなら融けない事はキャラ達の一例で予想は出来ていたから想定通りと言えはそうかな？

あ、という事はもしかして……いや、流星にないかな。

僕は横に逸れた思考を振り払い本題へと入る。

「ええ……、此処に飛び込むのか……？」

まあ普通は躊躇うよね？

僕はパピルスにまだ引き返せる事を伝えるも彼は首を横に激しく振って否定した。

「心配するなフリスク！男に二言は無いのだ!!」

そう言つて彼は手すりの上に立ち上がった。

そして二、三分程下を眺めていたパピルスはやがて威勢のいい掛け声と共にコアの中心へと飛び込んで行った。

?????

ここは……？

パピルスと共にコアの中心へと飛び込んだ後、気が付くとどこかで見た事がある様な真つ暗で先が見えない空間が拡がっていた。

此処が何処なのか、僕達はどうなったのか。

だが、そんな事を考える暇もなく突然答えはやって来る。

「うっ……これは……フリスクキャの……記憶？」

突如襲い来る果てなき記憶の奔流に僕は立っていられないほどの目眩を覚え、その場に膝を着いてしまった。

うっ……なに……これ。自分の存在がぼやけて……怖い……いや……いやだ!? 止めてよっ!

……助けて、F r i s k。僕が……分からなくなる……怖い……。

僕は必死に自分自身の記憶にしがみつこうとするも、他人僕の記憶が抗う事を許さず一つになろうとなだれ込んで来る。

これが僕が望んでいた結果なの……? なんて事だ……僕は彼になんて恐ろしい事を頼んでしまったんだ……。

ごめん、ごめんなさいパピルス……お願い……謝って赦される事じゃないのは解ってる。僕の事は恨んでくれていい、だから君だけは変わらないで……!

僕は自分を確立する要因が失われる最後の時までただひたすらに願った。

例えそれが矛盾した願いだと解っていても僕は願わずには居られなかったのだ。

あれから幾許かの時が流れ僕が僕の記憶を受けるだけの器となり始めた頃、僕の目の前に見覚えのあるスケルトンが

姿を現した。

「パピルスか、君は全ての記憶を受け終えたのかい？」

「……うん」

「そうかい。それで、君はどうするんだい？」

「どうやら何処かの世界線のフリスクがパピルスへ訊ねようとしていたらしい。」

僕は霞掛かった意識の中でパピルスの返事を待った。

パピルス僕の前まで歩いてくると両腕を広げて笑いながら答えた。

「俺様は正直まだ分からない事だらけで戸惑っている。だけど、俺様は貴様が頼りたくなるまでずっと付き纏う事にしたぞ！」

「それは……」

パピルスの言葉が僕の心を直接揺さぶる。

今の台詞は確かに僕の記憶に残っている……だけど何故だかそれだけじゃないような気がする。

しかし……解らない、今の僕には答えに辿り着く事は出来ないようだ。

「ありがとう、それじゃあ行こうか？」

「ニヤハハ！そうだな、皆も待ってるからな！」

そう言ってパピルスは僕の手を引いて暗闇を歩き始めた。

—————

フリスクとパピルスがコアの中枢へ飛び込んでから一時間が経とうとしている。

その間キャラがずっと大人しかったのは以外だったけど未だ彼女達は戻って来ない。

僕はもしかしたらなんて不安からサンズに声を掛ける。

「サンズ……」

「何も言うなよ？俺だって冷静で居られる自信がねえんだ」



「う、うん……」

そう彼に凄まれた僕は開こうとした口を再び閉じた。

そうだ、彼だって心配で仕方ないけど。パピルスの言葉を信じて待つてるんだ。

なら僕がフリスクを信じないでどうするんだ。

僕は心に巢食う不安を霧散させ、コアの中枢を見つめる。

その時、コア中心が一瞬光を放った。

「今っ……」

「どうした、何かあったか？」

「いや、今コアの中心が光ったんだ」

「ああ？あそこは超高温だから光る位するだろ」

そういつて呆れたようにため息を吐くサンズ。

だけど僕にはそれが偶発的なものだとは思えなかった。

「サンズ！近くに誰か居ないか分かるかい？」

「はあ？まあソウルを持つてる奴なら分からなくは無いが、ここには俺とお前さんとそのガキしか……っ!？」

そう言つて周囲を見回していたサンズだったが突然動きが止まったかと思うと次の瞬間には彼は僕とキャラを抱えてその場から大きく距離を置いた。

「……おいおい、笑えねえぞコイツは」

「ははっ、正に化け物だな。」

サンズが殺意を滾らせて睨み付けるその先には紫のボーダーが一本入ったセーターに青いスカート、そして赤いマフラーと顔を隠さないように頭蓋骨をお面みたく斜めに掛けた僕よりも大人びた女性がその姿を現したのだ。

「あれは……フリスク？」

「だとしても不用意に近付ける状態じゃねえな」

サンズは口ではそう言っているものの、やっぱりパピルスの事が気に掛かるのか以前の様に先制を仕掛けるような事は無かった。

それにしても……僕には少し雰囲気が違うけど大人になったフリスクのように見えていた。

けれどサンズ達にはどう見えているんだろうか。

僕がサンズとフリスクと思われる女性を交互に見ていると彼女の方から話掛けて来た。

「サンズ? どうやら君の反応を見るに僕のLOVEは相当高いみたいだね」

「……そうだな、桁を数えるのが馬鹿馬鹿しくなる程にはな? ところで……冗談抜きで答えてくれ、パピルスは如何した?」

サンズは左目を青く光らせて彼女の体を浮かせた状態で訊ねた。

何時でも溶岩に落とされそうな状態でありながらも彼女は至って冷静に返した。

「パピルスの事なら心配しないでもいいよ。肉体は共有してるけれど意識ははっきりしてるから。ほら、パピルスからも答えてあげなよ」

彼女が右上に視線を移しながらそう言うと、お面の様に掛かっていた頭骨が突如動き出した。

「ニャーハッハッハッハ! 心配は要らないぞ兄ちゃん! 俺様はフリスクと一緒に居るからな!」

「なあ!? だ、大丈夫なのかパピルス……?」

「何も心配することはない! 今はフリスクが身体を動かしてるだけで俺様も動かせるからな!」

「あ、ちょ……パピルス!」

パピルスの言葉を証明するかの様に彼女は突然屈託のない笑顔で右手を大きく振り出した。

不意打ち気味に向けられた彼女の笑顔に僕は顔が熱くなるのを感じ、慌てて俯き顔を隠す。

「はあ……まあそういう事さ。彼は恐らく君の知ってる彼と変わってないから安心しなよ」

「そ、そうか……取り敢えずそれについては一先ず信じるでしょう。だがそのLOVEで説明も無しにお前さん自身を信じる程お人好しじゃあねえぜ? お前さんが俺達と一緒に居たフリスクだって証拠も

ねえしな？」

サンズの質問にフリスクは困った様な笑みを溢すと少し迷ってから答え始めた。

「残念だけど僕のLOVEが高い理由は僕自身解らないね。予想としては記憶と共にLOVEも受け継いでいるとかは考えられるけどね？」

「成程な……お前さんが解らねえつつうんじゃ俺達も知りようがねえな」

「そうだね。ついでに言えば僕が君達の知ってるフリスクである確信は僕自身持てないから……そうだね、取り敢えず僕の事はパリスとも呼ぶと良いよ」

「確信が持てないって……一体……？」

記憶が混乱しているから？それとも記憶が抜けているとか？

だけど彼女から語られたのはそのどちらでも無かった。

「F r i s k、本当に申し訳ないけれど今の僕には君との思い出は知識の一つでしかないんだ。だから君の知ってる僕とは言い切れないし、きっと別人の様に感じるんじゃないかな？」

「で、でもっ！パピルスは！」

「彼も同じだよ。違いがあるとすれば全ての世界線で彼自身の根っこが変わらなかつた事だろう。僕に不信感を抱いていた時だつて彼は僕への説得を諦めて居なかつたみたいだからね」

そんな……折角希望が見えてきたっていうのに……いや、違う。

フリスクは別に記憶を失ったわけじゃない……なら、彼女が僕が知っている彼女ならきつと取り戻す方法があるはずだ！

それにパピルスとフリスクがここまで頑張ってくれたんだ！

僕がこんな所で挫折してる場合じゃない！

「フリスク、君の事は僕が必ず何とかして見せるよ！」

「F r i s k……解った、でも先に解決する事があるんじゃないかい？その後でならお願いするよ」

僕の突然の宣誓に彼女は一瞬きよとんとしたたが、僕の言った意味

を理解すると柔らかい笑みで答えてくれた。

僕も彼女に応える様に大きく頷いた。

「ふふっ、じゃあサンズ。悪いけどgrillbysにいるキャラ達を結界の所まで連れて来てくれないかい？」

「はあ……もはやお前さんを信じられないとか言えるような空気じゃねえしな。分かったよ、来るようには伝えておくぜ」

「ありがとうサンズ。けどもし君が納得行かないなら僕は何時でも付き合うよ」

サンズは僕達を降ろすと、背中越しに気だるげに手を振りながら扉の前で姿を消した。

「それじゃ、僕達も結界に向かおうか」

「そうだね」

「勝手にするがいい、私はついていかんぞ」

「なに!?遠慮する事はないぞ!勿論キャラも一緒だ!」

「な!?おい馬鹿何をする!!離せ貴様あ!」

パピルスがキャラを連れていく為に彼女を右脇に抱えて歩き出す。

僕も苦笑しながら彼女達の後に付いていく。

「Frisnkもおいで?僕も近道を知ってるんだ」

近道……?

どこかで聞いたようなフレーズに首を傾げつつも僕は差し出された左手を握ると彼女は一気に駆け出した。

「ま、単純に次元を歪めてるだけだけどね?」

そんな彼女の説明を聞きながら僕達は目の前に突如現れた裂け目に飛び込んで行ったのだった。

けっかい

今の僕には強い想や願いを持つ事が出来ない。

きつとこれはガスターやパピルスと違い内面が全く異なる記憶群を保有してるが故に人格破綻を起こさない為の自己防衛本能なのだろうと考えてる。

それでもFriskの知っている僕は後悔してないだろう。

僕は本気で全ての僕と地下世界の皆を救おうと考えたようだ。

だからというわけでもないが記憶を見返せば他にも様々な考えのFriskが居るにも関わらず僕は僕を生み出した僕の願いを叶える事にした。

けど、僕は気付いて居たのだろうか？

その願いを叶えるという事の本当の意味を……。

-----

彼女に手を引かれて飛び込んだ裂け目の先には結界が立ちほだかっていた。

「到着つと。さて、彼らはまだ来てない様だし少しゆっくりしてると良いよ」

そう言っつて彼女は僕の手を離してから抱えていたキャラを地面に降ろすと結界へ向けて歩き出した。

そんな彼女に続く様に僕も結界へと向かった。

「……………」

僕は何か話そうとするも話題が見つからず、ただ結界を見つめる彼女を眺めている事しか出来ないでいると彼女の方から話を切り出さ

れた。

「ねえFrisk、君から見て今の僕は君が知ってる僕彼女だと思っかい？」

「え？ええ……と……」

僕は直ぐに肯定出来なかった。

「Friskはどんな姿でもFriskだ……そう思っているのにどうして？」

僕は彼女をFriskだと断言出来ない自分が悔しかった。

「だけど彼女はそんな僕の頭を優しく撫でながら話してくれた。」

「それが正しいよ。今の僕は記憶の受け皿みたいなものだからね。君や君の知る彼女とは全く別の存在なんだ」

「そ、そんな事……」

「良いんだFrisk、僕はこれでも満足してるみたいだからね。君が変わらずに居てくれたからこそ僕は彼女の想いを汲み上げる事が出来たんだ」

「……………」

でも……それでも……僕はそんな結末は絶対に認めない。

「これじゃあ最初の時と何も変わらないじゃないか！」

「Frisk、僕は絶対に君を連れ戻すからね！」

「……………うん、そうだね。その方がお互いの為かも知れない」

そうやって彼女は優しく微笑んだ。

そうしている内に後ろから物音が聞こえて来たので僕達は振り返ると、サンズの他にこの世界とは別のキャラ達三人も既に集まっていた。

「あれ？サンズは兎も角キャラ達はもう少し掛かると思ってたんだけど」

「あそこの骨が『急げよ？』とか言っただけながら消えたから時空を渡ってきた」

「……………つたく、ホント何なんだお前らはよお」

「あ、サンズがやさぐれてる。」

まあ自分の十八番がこともなげに使われてたらそうなるよね。

「煽るお前が悪い。それよりもその結界を割ればいいのか？」

キャラは不貞腐れるサンズを一蹴するとパリスへ訊ねる。

「というか後ろで明らかに警戒してる二人と違ってキャラは全然動かないんだね。」

「まあフリスクの姿が変わるのは日常茶飯事みたいに考えてるのかな？」

「僕の思考が少し脱線している内にもフリスクはキャラの質問に答えていた。」

「いや、この結界の力を使って地下の皆のエネルギーが漏れない様に補強しようと思う」

「補強？そんな事が出来るのか？」

「知識だけならあるよ。僕一人では出来ないけどね？」

「そうか、ならば力を貸そう。折角だ、お前も来い」

キャラはパリスの背に右手を当てると少し後ろでそっぽ向いている方のキャラに呼び掛けた

「私は手伝わんと言ったはずだが？」

「ああそうだな、であれば予定通り力づくで奪うとしよう」

「はあ!?………つたく、なんて横暴な奴らなんだ」

「ふっ、お前に言われたくはないな」

「もう……フリスクといいキャラといいどうしてそんなに悪役を演じたいのだろうか。」

結果として彼女は手伝ってくれる様になったとはいえ、そんな禍根が残る様なやり方しなくても。

僕はキャラの言動に呆れながらもパリスの背中に手を当てて心を落ち着かせる。

「うん、これだけの決意エネルギーがあればどうにかかなりそうだ。じゃあ行くよ？」

彼女は僕達の様子を見て頷くと再び結界の方へ顔を戻し両手を前に出した。

その瞬間、彼女に触れている手の先から何かが抜けていく様な感覚を覚える。

それに伴って目の前の結界が次第に強く輝き始めた。

「もうちよつとだから……」

目を閉じていても視界が真っ白になるほど輝き始めた結界はやがて大きな音を立てて弾けた。

「……パリス？」

「つ……これで大丈夫だと思う……どうかなサンズ？」

「へへっ、オイラはそもそも骨の髄まで怠け者だから分からないが、きつと成功してると思うぜ？」

サンズはそう言つて陽気に肩を竦めてみせた。

そんな彼の様子を見て満足気に頷いたパリスは今度はこの世界のキャラに声を掛けた。

「キャラ、ちよつとトリエルの所に行つて確かめて来てくれないかい？」

「なんで私が……？」

「君の記憶も持つてると言えば分かるかな？」

「……っ！余計な口を開いたら殺すからな」

彼女はそう言い残して地下に戻つて行った。

こっちのキャラは解つてる様だけど僕やアズリエル達は状況が掴めずにいる。

特にサンズは納得が行かないようでパリスへ問い質していた。

「アイツを一人で帰すつてのはどういう了見だ？まさかお前……」

「心配要らないよサンズ。彼女に口止めされてるから詳しくは話せないけど君が心配してるような事にはならないよ」

「ならいいがな」

そう言つて振り返り歩きだそうとするサンズをパリスは呼び止める。

「そうそう、もし彼女を監視しに行こうとしてるのなら止めた方がいいよ。これは彼女にとつてとてもデリケートな話だからね」

「……はあ、解つたよ。それで、これからお前らはどうするつもりなんだ？」

「そうだね、取り敢えずはガスターと接触してから考えようかな」



「呑気な奴だ、私は取り敢えずあの腐れ卵を全力でボコる。温厚な私でも流石に腸が煮えくり返りそうだからな」

「えっ、温厚って——」

「何か言ったかフラウイー？」

「……ナンデモナイデス」

キャラは随分と殺気立っている様だけど……どうしよう。

こんな状態でガスターと話し合うなんて出来るんだろうか。

僕が不安を感じつつ悩んで居ると突然背筋が凍るような寒気に襲われた。

「な、なにっ!？」

「F r i s k !」

僕は反応する間もなく黒い何かに捕えられてしまった。

「やあ、初めまして。いや、久しぶりと言うべきかな？」

けっつかい〜Re:Guster〜

Friskを捕らえた黒い何かは徐々にその姿を現す。

「ガスター……まさか貴様から出てくるとはな」

「おっと、私は君達と交渉しに来たのだ。彼を捕らえたのはその間の安全を確保する為に過ぎない」

ガスターはそう言って自身の身体からFriskの顔だけを出した。それでもキャラは拳を握ったまま一部の隙もなく様子を伺っている。

だが、その二人に割って入る様にパリスが一步前に出てきた。

「ガスター、話を聞こう。君の要望はなんだい？」

「なに、分かっているのだろう？君達がこれ以上他の世界線に干渉しない事だ。そうすれば私は彼らに干渉しない事を誓おう」

「皆をこの場所に留めておきたいって訳か」

「理解が早くて助かる。どうだね？君達にとっても悪い話ではないと思うがね？」

いつかフリスクが話していた事と同じ要求にパリスは少し考える素振りを見せるも、次の瞬間にはガスターの目の前に飛び込みその顔目掛けて掌底を突き出していた。

ガスターは咄嗟に後ろに下がり攻撃を避けるも、パリスはその隙にFriskを奪い返す。

「残念だけどその話には乗れないね。どうやらその彼らの中には僕とFriskは入っていないみたいだからね？」

「ふむ、やはり一瞬すら抑えておけないか……だが良いのか？確かに君達は排除しなければならぬが、その彼女達の安全は守られるんだぞ？」

「その必要はない。貴様が諦めれば良いだけだからな」

背後から聞こえる声にガスターは振り向こうとするがその身体は金縛りにあったように微動だに出来なかった。

「なんと……君達に私を諦めさせる事が出来るとでも？」

「勿論そのつもりだ。だがその前に……」

キャラはガスターの後頭部を掴むとそのまま地面に全力で叩き付けた。

「ぐうつ……い！」

「貴様に好き勝手に振り回された私の怒りを思い知るがいい！」

今度はそのままガスターを頭上へ放り投げるとポーチからおもちのナイフを取り出しガスターに全力で投げ付ける。

「ぐつ……」

「まだくたばるには早いぞ」

投げられたナイフがガスターを天井に突き刺した所で今度は空の銃に魔力を込めてガスターブラスターの様な極大レーザーを放つ。

それでもキャラは満足していない様子で今度はバレエシューズを履いて高く飛び上がり、自由落下するガスターの背に踵落としを見舞いそのまま地面に強く叩き付けた。

そして最後に既に満身創痍に見えるガスターの上に着地すると、取り出した本に魔力を込めて呼び出した蜘蛛の糸でガスターを簀巻きに仕上げ身動きが取れないようにした上でダガーナイフを首元に突き付けた。

「ちっ、死んで逃げられては困るからな。貴様にはこれをやろう」

そう言つてキャラはポケットから取り出したモンスターをあめを一粒だけガスターの口に放り込む。

「ぐつ……うつ……ふ、ふふ……力に任せたやり方で私を丸め込めるとも……？」

今にも力尽きそうな状態にも関わらず不敵な笑みを浮かべるガスターをキャラはヒールで踏みつけて答える。

「本当は直ぐにでもブチ殺したい所だがな」

「フフフ……ならば殺せばいい。例え今私を説得出来た所でもう遅いのだ。私の計画は既に最終段階まで来ているのだよ」

「なに？それはどういう事だ！」

キャラは語句を強めながらナイフをガスターに押し付けて聞いたのだ。

だがガスターは依然笑みを崩すことなく続ける。

「私が長年研究フエイタルエラーデバッガーを続けてきた成果が間もなく君たち異分子を世界から抹消するだろう」

「なんだ、そんなもの見つけ出して阻止すれば——」

「それも不可能だ。何故ならアレは既に私はおろか観測者にすら知覚出来ない段階へと入っているからな。君達は抗う事も出来ずに

UNDER TALE  
世 界から消え去るのだ」

「馬鹿なつ、幾ら貴様とて観測者に干渉出来るものか」

「干渉ではない。私を含め知覚している者が居なければ観測者へ情報は伝わらんのだ」

彼の話聞いていたパリスは共有した記憶からその話が事実であると理解し苦い顔を見せた。

それでもパリスは記憶の一つから望みがゼロでない事を把握していた。

「だが、奴のことを知覚しうる存在だけは私の手で消しておかねばならんのだ。なあジェノサイダー……いや、今はパリスと言っていたかな?」

パリスはその切り札をいつ何処で切るかを考えていたのだが、その考えを既にガスターは見抜いていた。

「……やっぱりそうなんだ。あれには彼の決意が組み込まれているんだね?」

「概ね正解だ。だから彼が目覚める前に私は君を殺す。勿論やり直しなんてさせないさ」

そう言うや否やガスターの体は突然輝きだした。

「うっ……ぐう!」

「キャラ!」

更にその光はエネルギーを伴って激しい衝撃波を放ちガスターを踏みつけていたキャラを壁の方まで吹き飛ばす。

「フハハハハッ!今の君を殺すにはこれくらいの準備は必要だろう?」

「おいおい……どうしてこう化物ばかりがオイラの周りに集結するかねえ?」

衝撃波を避けるためにショートカットで何処かへと離れていたサ  
ンズが目の中の光景をみてそう愚痴をこぼすがそれも仕方ない話で  
ある。

何故ならゆっくりと立ち上がったガスターだったものから漂って  
いる手の様なものには穴が空いており、そこにはそれぞれの色のソウ  
ルが嵌っている。

その無数に漂う手をなんと天使の羽のように展開し六色の輝きを  
見せながら羽撃かせていた。

「さて、時間も惜しいのでね？先ず君には死んでもらおうか」

そう言つてガスターは紫色のソウルを輝かせ全員の足を封じる。

「くっ……まさか全ての世界線から人間のソウルを!？」

「そういう事だ、幾らイレギュラーである君とて叶うまい」

「ガスター、それでは君の願いに反してゐるんじゃないかい？」

「フフ、無用な心配だ。核さえ残れば世界線など幾らでも増えていく」

ガスターは続けて無数の水色のレーザーをパリスの体に浴びせる。

「サンズっ、彼を頼む!」

「えっ、うわあああ!？」

「は？ちよ、おまつ!？」

パリスは咄嗟に脇に抱えていたF r i s kをサンズに放り投げて  
彼が巻き込まれるのを避けたが、話し合いで少しでも時間を稼ごうと  
いう作戦は今のガスターには効果が無かった。

「なに、心配する事はない。君の大切なF r i s kも君より後に消え  
るだけだ」

「彼は僕ほどイレギュラーじゃないんじゃないかな？」

「はは、面白い事を言う。自身のソウル一つで君をあの世界線へと  
送った彼がイレギュラーではないと？私としては彼こそが真の意味  
でイレギュラーな存在だと踏んでいるよ」

ガスターはパリスの周りに黄色のソウルと橙色のソウルの手を配  
置しながらそう答えた。

そして更に全方位にガスターブラスターを配置し、その周囲を緑色  
のバリアで囲った。

「さて、これだけ用意すれば君を殺せるかね」

「さあ？もしかしたら耐えられるかもね？」

「時間を稼ぎたいのだろうがそうはいかないさ」

パリスの挑発はガスターに見破られており、これ以上の時間稼ぎは望めそうに無かった。

「ではさらばだジェノサイダー。もう二度と会うことは無いだろう」

「だから僕はパリスだって——」

パリスが言い終える前にガスターは黄色の魔力弾、橙色のレーザー、そしてガスターブラスターを一斉に放ちパリスを視界から消し去った。

けっつかい vs Guste r

閃光が収まったその場所には彼女の姿は既に無かった。

嫌な想像が一瞬間を過ぎるが、僕はそれを振り払い彼女へ呼び掛け続けた。

「フリスク！ねえ聞こえてるんだろ！？フリスクってば！」

「ふふふ、心配する事はない。君も直に奴の所へ行けるのだからね」

そう言つて笑みを浮かべるガスターに対して僕の心は薄暗い何かに包まれて行く。

「ガスター……どうして……」

「どうして？障害は取り除かなければ不具合が起こる、当然の事だろう？」

「……僕は君と分かり合いたいのに」

「それは出来ない相談だね。私は君達を抹消しなければならぬ……それに君ももう私を赦せないのだろう？彼女を殺した私が憎くて堪らないはずだ」

憎い……そっか、これが誰かを憎むって事なんだね。

僕はフリスクにこんな気持ちをずっと抱かせてしまっていたんだ。

こんな胸が苦しくて吐き気がするような感情を……。

でも、これで彼女の気持ちが少しでも解るなら。

僕は憎しみに決意をみ——

「F r i s k」

「キャラ？」

「……ほう？」

背後から聞こえたキャラの声に振り向いた直後、彼女は僕の頬を思いつきり引つ叩いた。

「つ……！？な、なにを——」

「お前は奴の全て無駄にする気か？」

「でも……僕はずっと彼女にこんな辛い気持ちを押し付けて来たんだ」

「だからなんだ？今更そんな事されて奴が喜ぶとでも思ってるのか」

？」

「そんな事言われたって……彼女はもう……。」

「そんな僕の考えに気づいたのかキャラは再び僕の頬を平手で叩いた。」

「何故お前が真っ先に諦めてる、巫山戯るなよガキが」

「え……」

「私は奴が大嫌いだし、奴がしてきた事を赦す気はない。そんな私の方が奴を信じてるなど笑い話にもならんだろうが」

「僕はキャラのその言葉に鈍器で殴られたような衝撃を受けた。」

「そうか、僕は心の底では彼女の生を諦めてしまっていたんだ。」

「だからガスターに対してあんな感情が芽生えてしまったのだろう。」

「でもそれじゃ駄目だ。僕が彼女を信じないでどうするんだ！」

「フリスク達は大丈夫、なら僕は僕の出来ることをするだけだ。」

「サンズ、降ろして貰えるかい？」

「ああ、だが降ろした所で動けなくなるぜ？」

「大丈夫だから」

「僕はサンズに降ろして貰うとその場に立ち上がりキャラの目を」

「真っ直ぐ見て言った。」

「ありがとうキャラ。おかげで目が覚めたよ」

「そうか、なら行って来い」

「僕は頷くと皆に見守られながらガスターの所へと一歩ずつ踏み出していく。」

「ふむ……不屈のソウルを持っている彼女ならばと思ったが、まさか君も動けるとはね」

「ガスター、本当に僕達を消す以外に方法は無いのかい？」

「……私の話を聞いていなかったのかね？」

「勿論聞いているよ。」

「ガスターを説得してもデバッガーって奴を止めなきや結果は変わらないって事だろうか？」

「けどそっちはフリスクがきつとどうにかしてくれる。」

「だから僕はその後のためにガスターと分かり合いたいんだ。」



「聞いてたよ。でもそれとは別に君と確りと話し合いたいんだ」

「……もし他に方法があると云ったら、どうするかね？」

「あるのなら教えてほしい。出来る限り協力したいんだ」

するとガスターは呆れた様にため息を吐いた後、こう答えた。

「君達を元の世界線の初めの時間軸に戻す。それで君達が数ある世界線と同じ様に終わりを迎えば私が君達に干渉することはない」

「それって……」

「ああそうだ、君が一番初めに否定したルートだ」

ガスターは僕にそれが選べないだろうという確信を持って話したのだと思う。

何故ならそれは彼女との別れを意味するからだ。

「ごめん……確かにそれは出来ない」

「だろうね。ならばその彼の言葉を借りるとしよう。【この世界は、殺るか……殺られるか】だ」

その言葉を皮切りにガスターは僕へ無数のレーザーを放つ。

僕は彼女たちのように器用な事は出来ない。

だけど……だけどここの決意だけは誰にも負けない！

「む、この状況下でロードが出来るとは……やはり君はジェノサイダー以上の異常だよ！」

僕は以前キャラと戦った時と同じ様にセーブとロードを繰り返して当たる筈の攻撃を躲して行く。

「ガスター！話を聞いてよー！」

「もう話す事など無かろう？君は私の提案には乗れないと言ったじゃないか」

ガスターが緑色のバリアで僕を捉えるようとするがその前に左に大きく跳んでどうにか避けた。

「違うー！全てを拒否してるわけじゃない！僕は彼女と居れるのならそれでも構わない！」

世界の皆を救いたい。

確かにそれも僕の願いだ……だけどそれは彼女あつての願いなんだ。

だから僕はパリスから話を聞いた時に凄く後悔した。

僕のせいで彼女を失ってしまったんだと。

だけど僕はそれを認めないようにしていた。

それはここまでやってくれた彼女に対する重大な裏切りだから。

でも……それでも……。

「僕は彼女が居ない世界なんて考えられないよ！」

「……そうか、それが君の本来の人間性なんだな。だが残念だ、彼女を救うことは出来ないよ」

「っ！どうして!?!」

「既に全ての世界線に干渉出来る彼女が生き続ける。その事実が彼女をイレギュラーにしようからだよ。」

僕のせいで……僕が願いを彼女に伝えなければ彼女と歩める道があつたのに。

「……………」

「さて、そろそろ時間だろう。ああ良い忘れていたがキャラ、イレギュラーである君も彼らに最期の言葉を遺しておくといい」

「はあ?おいRotten egg! さっきと話が違うだろ!」

「無駄だ、フラウイー。奴が最初から私ではなくソウル達の事を言っていたのは解っていた。私とてジエノサイダーに関わり続けてきたんだからな」

「察しが良いね?ま、そういう事だから。最期の時間を邪魔するほど私は無粋じゃないよ」

ガスターはそう言ってその場を離れようとする。

だがその時、何処からか高らかな笑い声が飛び込んできた。

「ニャーハッハッハッハッハ!逃げようたってそうは行かないぞガスター博士!」

「パ、パリス!?!」

僕は咄嗟に声のする方へ振り向くと、そこにはポーズを決めて立っているパリスの姿があつた。

「逃げる?どうして私が?」

「隠したって無駄だぞ!グレートなパピルス様はフリスクから全て聞

いているからな！」

あれ、パピルスだけ？つて事はフリスクは一体……。

僕の不安そうな顔に気付いたのかパリスもといパピルスはこちらにサムズアップしながら笑顔で返してくれた。

「フリスクの事なら心配いらない！また後で戻ってくるって言ったからな！」

「ほんと……に？」

「ああ本当だ！」

フリスクは無事……よ、よかつたあ……。

僕は緊張が一気に緩みその場に膝から崩れていた。

だがそんな様子を不満げに見つめていたガスターはパピルスに尋ねる。

「ジェノサイダーから何を聞いたのか知らないが、私が逃げる理由などあると思うのかね？」

「そうだ！確か……そうそう、今のガスター博士はイ……イ……レギュラー？だからこの場には居られないって！」

イレギュラーの事かな？でも確かに言われてみれば今のガスターは誰がどう見ても普通じゃない。

とはいえガスターの切り札なのだからその辺りは考慮してある可能性は否めない。

実際にどうなのかは解らないけれど、ガスターはパピルスの話に肩を竦めて答えた。

「私のシステムはそんな小規模なものではないよ。なにせ世UNDER界TABLE全てを対象としてるのだからね？」

「えっ!?じゃ、じゃあ俺様は何をすればいいのだ？」

「だがまあ……私の邪魔をするのならば相手をしよう」

「パピルスっ！」

ガスターが無数の手を動揺してるパピルスへ向けて飛ばす。

しかしその全ての手に水色の骨によって落とされる。

更に落とされた手に付いているソウルは全て青くなり重力の影響を受けるようになっていた。

「ほう、流石にやるじゃないか」

「ほっ……ニヤァハッハッ！これがパワーアップした俺様のおおこっげきだ！」

ガスターは感心しながらもガスターブラスターを上空からパピルス目掛けて放つ。

対してパピルスは床から自身の身長程の長大な骨を呼び出してブラスターを凌いでいる。

「なるほど……お前も記憶を共有しているのだったな。ならば……」

パピルスの強さに納得したガスターは羽のように漂わせていたソウルを今度は全て自身の身体に取り込み初めた。

「ぐっ……ふう……はっ……」

「ガスター博士？一体何して……」

突然身体を丸めたかと思うと苦しそうに呼吸をし始めるガスターにパピルスは心配そうに近づく。

「ぐう……ふ、ふふ……良いことを教えてやろう……奴の言う通り私は早くこの場を離れなければならぬ」

「そ、それどころじゃないぞ!?!とととりあえず横になって——」

パピルスが慌ててガスターを介抱しようとする体に触れた直後、ガスターの身体から飛び出した黒い影のような物がパピルスの身体を貫いた。

「パピルスっ!?!」

「え……なに……が……?」

「だから、今の君と遊んでる暇は無いのだよ」

「ガ、ガスターアアアッ!」

倒れ込む彼を目の当たりにしたサンズは左目から青い気焰を滾らせガスターを吹き飛ばした。

そして壁に当たると同時に壁から骨を生やして串刺しにする。

更にはガスターブラスターでその周囲を囲み限界まで放ち続けた。その間にサンズは直ぐ様パピルスの所へ向かう。

「っはあ……はあ……パピルス!」

「うぐ……兄ちゃん……ガスター博士は?」

「大丈夫だ、暫くは動けない筈だ」

「カイン、頼めるか？」

キヤラも直ぐに駆け寄るとパリスの腹部に空いた穴を緑の光が包み込む。

僕はその光景を横目にガスターの方へと意識を向けていた。

未だ彼は閃光の中に包まれている。

それにサンズの左目が青く輝いているので暫くは抜け出すことも出来ないだろう。

だけど何故か嫌な感じがする……。

そう思っただけで近付こうとした直後、閃光の中から三本の影が飛び出てきた。

「危ないっ！」

狙いは僕以外？多分パリスの身体を此処で確実に仕留める為だ。

僕は急いで駆け出した。

お願い！間に合って！

全力で駆け出したその数瞬後、三本の影は僕の腕と胴そしてソウルを貫いた。

「ニヤッ!? Frisk!!」

「う……う……良かった……無事で」

でも……僕は駄目かな……。

ロードもリセットもする訳にはいかないからね。

ごめん……君を振り回しておいて……最期に君を置き去りにしてしまうなんて……最低だ……よね。

「邪魔が入ったか……だが次こそはっ!」

フリスク……また……会える……か……な。

## GENOCIDER TALE( END )

僕は今肉体をパピルスに任せて意識と僅かなソウルの欠片だけで何も無い空間を一本の糸を手繰り寄せる様に進んでいる。

何処からか感じる彼の僅かな気配だけを頼りに漂っていると不意に相手の方から声が掛かった。

\*初めまして、フリスク君。

初めまして。君の名前を覚えてくれるかい？

\*僕の名前はクリス。僕は君にずっとお礼が言いたかったんだ。

お礼？君は他の僕とは会っていないと思うけど、違ったかな？

\*それは間違いないよ。僕がお礼を言いたいのには僕が居た世界の皆を救ってくれたことさ。

皆……あ、そうか！確か君はあの世界で最初に落ちてきた人間なんだっけ。

\*そういうことだね。だからありがとう、本当に感謝してるよ。

君は彼に協力してる訳じゃないのかい？

\*いや、僕は進んで彼に協力してるよ。あの実験が皆にどんな影響を与えるかも理解した上でね？

どうして……って聞いても良いかい？

\*あれ？僕の事は共有されてないのかい？

うん……実験自体に不備があったか、彼が妨害してるんだと思う。君の事はあまり僕に伝わっていないんだ。

\*そっか……僕はね、根本的には君やFrisk君と同じ願いだよ。

僕達と？

\*そう、ただ一つ違うとすれば僕は観測者やプレイヤー達に干渉しない形でそれを行っている事だ。

それが今の君の状況に繋がるのかい？

\*そう、僕はあくまでも落ちてきた人間、それとプレイヤーの良心に訴えかける形で平和な世界にしようとしてきたんだ。

でもそれじゃあ……

\* そうだね、僕の言葉が彼らに届かない事もあるしそれによって救われない世界もある。

\* 現状と然程変わらない。でもそれは仕方ないと僕は思っていた。仕方ない？ 一体どうして……。

\* 何故ならこの世界はプレイヤーや観測者達あつての世界なんだ。

\* そんな彼らの決意を妨害し排斥するような事をすれば世界はたちまち創造神イビトによって終焉を迎えてしまう。

確かに世界が無くなつてしまつては元も子もないけど……でも。

\* ……本当の君はとても優しいんだね。けどこればかりは駄目なんだ。

そうなんだ……なら僕も手伝うよ。

\* ふふ、ありがとう。でも残念だがこの役目は譲れないな。だから後の事は僕に任せて君は君に戻ると良い。

僕に……それは出来ないよ。

僕はもう元の僕が解らないんだ。

\* それなら心配要らないよ。君はまだ自分を持つてる。今ならまだ君を掬い上げる事が出来るよ。

本来の僕を……？ 本当にそんな事が出来……るの？

\* 今ならまだね？

僕は……ぼくは……戻りたい……けど……そしたら君はまた一人に……

\* はは、僕は一人じゃないよ。

\* ま、ちよつと一人で暴走しちやつてる相棒に灸をすえてやらなきゃならないけどね？

クリス……

\* ささつ、僕がちよつとおまけしてあげるから。君は君を待つてる彼の元に帰るといいよ。

ありがとう……クリス、僕に手伝える事があればなんでも言うてよ。

\* そうだねえ……じゃあ一つお願いしようかな？

\* 君達の世界の皆を宜——しく——ね——





させて貰うよ。

僕はパピルスの上からどいて未だ動揺の色を隠しきれないガスターへと近寄る。

ある程度近付くとガスターは僕に気付いたのか、敵意剥き出して僕に黒い触手のようなものを伸ばしてきた。

だがそれは僕の上に届く前に彼によって悉く切り落とされる。

「貴様が……連れてきたのだな？」

ガスターの問いに僕は首を横にふる。

「彼自身の意思だよ。僕達を消すためとは言え君はやり過ぎたんだ」

「なっ……ありえん！奴はシステムに組み込まれただけで主導権など握れるはずが……」

そんなガスターの疑問に答えるかの様に彼は口を開く。

「ギジンカクプログラム……DELTA-K0103……Code name:KRIS……解ったかいガスター？」

「ク、クリス……!?まさかお前まで私の邪魔をするつもりか！」

「ガスター、話はもう済んだんだ。今の彼女にイレギュラー性は認められない」

「なに……？……お前は何も解っていない。ジェノサイダーの異常性だど？そんなものは前口上に過ぎん！」

そう言つてガスターは再びFriskへ触手を伸ばすもクリスと僕によってあつけなく阻まれた。

「私が本当に危惧しているのはもう一人の人間、Friskの方なのだ！」

「Friskが？それは何かの間違いじゃないか？」

僕はガスターにそう尋ねた。

確かに彼の決意は僕以上だけど、彼は虫一匹殺そうとしないし彼一人では世界に致命的な影響を及ぼせるとは思えない。

しかし彼はそうは思わなかったようだ。

「Frisk君か……確かに彼は世界を崩壊に導くだけの力を持っている。それは僕も認める所だ」

「クリス……？」

「フリスク君、きみには納得し難い話かも知れないけどこれは事実なんだ」

Friskが世界を崩壊に導くなんてにわかには信じられない。

だが彼が話を進めていくにつれ、それは段々と真実味を帯びていった。

「まず君を別の世界線へ飛ばした事についてだけど、君が会った中で他にそんな事が出来る存在を思い浮かべてくれ」

それはつまり世界線を越える事が出来る存在という事だ、となると……。

「ガスターとキャラ……くらいかな、他の皆はあくまで彼女達の力で越えてるだけだよ」

「そう、そしてその二人でさえ飛ばす際に自分以外のソウルの力を用いているが彼は自身の決意のソウル一つでそれが出来るんだ」

「確かに……けど逆に言えば他にソウルがあれば彼じゃなくても世界線を越えられるって事じゃないか！それだけで彼が危険だなんて」

「それだけならね？だが問題はそんな事が出来るほど彼の決意は計り知れない物だと言うことなんだ」

彼の決意の強さについては僕も思うところはある。

だけどそれもあくまで僕や彼らと比べて頭一つ抜け出ているだけだと思っていた。

しかしその予想は大きく裏切られる事となる。

「僕も初めの内はどうか出来ない程じゃないだろうと考えていた……だけどLOVEを得れば君の決意ですら7つのソウルを持ったガスターを一撃で倒せる程の決意なんだよ？そんな君を上回ってる時点で充分イレギュラーなんだけど……更に彼はLOVEを得る事無くそれ以上の事をやって退けた」

「それ以上の……事？」

「そうだ。と言ってもこれは今さっきガスターから共有した情報で僕が直接見たわけじゃない。だけど……凡そ数十億ものソウルを手にしたガスターが居るにも関わらず彼はセーブとロードの力を行使したそうだ」

「ま、まさか……………」

クリスの言った事が一瞬理解出来なかった……いや、理解することを拒んだ。

何故なら僕……いや、パリスがあのガスターと相対した時、絶対に勝てない事を悟ってしまった。

あの時は僕以外の僕の記憶があったからどうかあの場合から抜け出す事が出来たが、ロードやセーブはおろかキャラが行っていた肉体だけのロードですら行えなかったのだ。

クリスの言っている事が事実ならそんな正真正銘の化物すら上回る決意をFriskが持っている事になる。

もはや知識なんか無くても解るほどに危険な存在である事が解ってしまった。

UNDER TALE

「分かったかい？つまりこの世界は彼の気分一つで呆気なく終わりを迎える。それでも君は彼を生かしたいと願うかい？君は世界の命運を背負うだけの覚悟はあるのか？」

「僕は……」

Friskがどれだけ危険な存在なのか思い知らされた。

彼がその気になったら僕に止める術は無いのかも知れない。

それが即ち世界の崩壊に繋がるという事も。

「けど……だけど……そんな事は関係ない、彼は僕にとって掛け替えの無い存在だ！彼と居るためなら僕は例え全てを敵に回そうと構わない!!」

それが例え彼自身が望んで居なくなつて知った事か！

彼だつて我侭なんだから僕がそれ以上に我侭だつて良い筈だ！

「……………そっか、わかった。じゃあFrisk君の事は君に任せたいよ？」

「えっ……………」

予想以上にあっさり引き下がった彼に僕は思わず言葉を漏らした。

だが彼は特に気にする様子もなくFriskに近付き、彼の傷を塞いでいく。

「——これでよしと。ん？どうしたんだい？」

「え、いや……だって……いいの？」

「良いわけないだろう！クリス！お前は何を考えて——うぐっ!!」

当然クリスの提案にガスターは普段の余裕のある大人びた雰囲気  
を崩してまで猛反対してきた。

だがそれをクリスは鬱陶しそうに木の棒をガスターの腹部に突き  
入れて黙らせた。

「全く、君は気にし過ぎなんだよ。Frisk君の願いは彼女と生き  
る事なんだから彼女が居れば何も心配することなんてないってば」

「うぐぐ……しかし……イレギュラーを放置するなど……もしこの事  
がプレイヤーに伝われば……」

「それも大丈夫だろう？知覚するものが居なければ彼らの目には止まら  
ない、そうだろう？」

「いや……だが……」

「もう時間切れだ、帰るよガスター」

「待てクリスつ、まだ私は認めたくじゃ——」

「じゃあまたね？Frisk君の決意があれば君達も問題なくあの時  
まで戻れるからね。後は頼んだよフリスク？」

最後まで反対の意を示すガスターに業を煮やしたクリスは、ガス  
ターを引きずりながらそう言い残して目の前から去っていった。

と、その時。渦中の人物が漸く目を覚ました。

「んう……あれ……フリスク？僕ら死んじゃったの？」

「Frisk……大丈夫、皆生きてるよ」

「え……あれ……でも…………ほんとに!!本当にフリスクなの!!」

「わっ!!」

段々と頭が冴えて来たのかFriskは飛び起きて僕の両肩を掴  
んで聞いてきた。

僕は彼が元気そうな事に安堵しながら満面の笑みで答えた。

「うん、ただいまっ」

「あ……ああっ…………本当に……フリスクなんだね……おかえり  
…………おかえりフリスク……!」

「わわっ!?いきなり抱きついて来ないでよっ!」

流石に心の準備がまだっ……………ふう、全く仕方ないなあ。

声を震わせて涙ぐむFriskを僕は抱きしめ返すと彼が泣き止むまで優しく背中を擦ってあげたのだった。

## UNDER TALE

うぐう……僕達が泣き止んだ後、キャラからフライパンで頭を叩かれるという不当な暴力を受けた僕は頭をさすりながらクリスから聞いた世UNDER TALEの仕組みとF r i s kの事……そして僕らが居た世界のあの時間軸まで戻れば他からの干渉が無いようにしてくれるとクリスが約束してくれた事を全て伝えた。

「そつか……プレイヤーに創造神かあ。観測者さん達以外にも僕達の手が届かない所にはそんな人達が居るんだね……」

「うん、だからやっぱり君の願いは僕には叶える事が出来なかったんだ……ごめん」

本当は僕にも何か出来たのかも知れないけれど……僕はその道を進む事が出来なかった。

クリスにまだ間に合うと言われた時に僕は此処が最後の分岐点である事を理解した。

もうF r i s kに会えなくなる……少なくともフリスクとしては。その事が頭に過った途端に静まっていた筈の僕の心が形容し難い恐怖に打ち震えた。

今思えばクリスが僕にまだ間に合うと言ったのは僕自身の気持ちはまだパリスに残っていた事を見抜いていたからかも知れない。

そんな彼のおかげで僕はまたF r i s kに会うことが出来たけれど……代わりにF r i s kの願いを犠牲にしてしまった。

「僕にもつと覚悟があれば……」

だけどF r i s kは頭を下げる僕を今度は優しく抱きしめて言ったんだ。

「フリスク、君が謝ることなんて無いよ。僕の方こそごめん」

「なん……で？君こそ何も謝ることなんて無いじゃないかっ」

君は取り返しが付かなくなる前に僕を止めてくれた。

一方的に君を痛めつけた僕に恨み言一つ言わずに僕に全てを委ねてくれた。

なのに僕はその期待に答えられなかった……なのに……なんで

……。

それでも彼は首を横に振って続けた。

「フリスク、ずっと負担を掛けてしまつてごめん……僕は我儘で酷い人間だった。君と一緒に居る為に此処まで来たんだって事を君を一度失うまで忘れてしまつていたんだから」

「F r i s k……」

「だから……君が帰って来てくれて……本当に……よかつ……た……」

良かった……一緒に居たかったのは僕だけじゃなかったんだ。

心の奥底で燻っていた不安が解けていく感覚に僕は何度めか解らない安堵の息を吐く。

そして再び泣き出しそうになっている彼の頭を撫でながら僕は彼に言葉を返した。

「ありがとう……僕を待っていてくれて」

僕は未だ枯れぬ涙をまた零しながら互いに強く抱きしめ合った。

……今度こそ落ち着きを取り戻した僕達はこれからの事について話し始める。

「クリスが言うにはF r i s kの決意があれば僕達が初めて会ったあの時間軸まで戻れるらしいけど」

「リセットみたいなものか。だが私やアズリエル達はどうなる?」

そこが問題だ。

それぞれの世界線に戻れるのか?それとどのタイミングに戻るのか?

そういった諸々の問題が解決しない事には実践する訳には行かないだろう。

だが、そんな事を知っているのは……

『ヨビマシタカ?』

「!!?」

僕達が頭を悩ましている所に不意に響いた機械音声に慌てて振り向くとそこにはメタトンを連想させるような四角い金属ボディの機械がバランスを取るように左右にゆらゆらと揺れていた。

「き……きみは?」

「ワタシハフェイタルエラーデバッガーシステム、イレギュラーノハイジヨヲモクテキトシテソウゾウサレタソウチデス。カンソクシヤサマニハ【謎の機械】ヤ【例の機械】ナドトヨバレテオリマス」

「例の機械……?まさかお前が観測者が気にかけていた存在か」

どうやらキャラは心当たりがあるのかポーチからダガーナイフを取り出して警戒している。

僕は不思議な既視感を覚えつつも念の為、同じ様にダガーナイフを構えた。

「だけど僕の記憶が正しければあの機械の中には……。」

「ハハハ、その通りさ。チョつとマつてて。素体構成プログラム起動……。」

「え……?」

僕の心を読んだかのように答えを返すその機械は何かを呟くとその姿を徐々に変えていった。

そうして完全に姿が切り替わった時、そこに居たのは先程ガスターを引きずって消えていったクリスであった。

「や、さつきぶりだね? Frisk君とは初めましてだね」

「え、つと……はい」

「なんだただのフリスカか」

「キャラ?姿が変わる!!僕じゃないからね?」

僕のは人の身体を借りてただけ……ってそっちの方が良くないか。

まあそれは兎も角として、彼が来てくれたのは恐らく今の状況を把握しての事だろう。

だから僕は早速彼に聞いてみることにした。

「ねえクリス、僕らが元の時間軸に戻るとしてさ——」



「そうだねえ、その辺りは正直彼の決意を以てすれば大体の事は可能だろうさ」

「……質問が解つても言葉で話そうよ」

「はは、そうだね。ごめんごめん」

彼が割り込むように答えてしまったが、どうやらFriskの決意はそれくらい簡単にやってのけるらしい。

僕はFriskの決意の強さを改めて認識し思わず喉をならす。

「どうしたんだい?」

「なんでもないさっ」

そう、なんでもないんだ。

彼なら大丈夫だと信じている。

それに彼がそれを望むのなら僕は最後まで共に居る覚悟はもう決まっているのだから考える必要もない。

「……………ふんっ」

「?」

「ま、そういう事だからさ。あ、そうそうFrisk君。僕からも一つ頼んでも良いかな?」

「へ?えと……………なんでしよう」

「君達が救ってくれたこの世界をそのままにしてくれないか?」

クリスはそう言つてFriskに頭を下げた。

「あ……………その……………はいっ!」

Friskは突然の出来事に動揺していたが、クリスの思いを受け止めて力強く答えた。

それを聞いたクリスはゆっくりと頭を上げて彼に笑顔を返した。

「ありがとう!これでキャラちゃん愛の笑顔も守られるよ」

「へ?キャラ?」

「そ、君達のお蔭で彼女は漸くLOVEじゃなくLove愛を手に居れられたんだ。ありがとうね」

そっか……………彼女にも居場所が見つかったんだね。

僕はママと幸せそうに眠る彼女の姿を夢想し思わず笑みを溢した。

「ふんっ!」

「痛つつ!?!」

だが同じキャラとしてはそんな僕の姿が気に入らないのか、落ちていた石を拾い上げて僕に投げつけてきた。

「ちよ、石を人に投げつけたら危ないでしょ!?!」

「うるさいっ、貴様なんぞさっさと帰れ」

「あんなに一緒に居たのに酷くない!?!」

「あはは、女の子同士仲良くしなきゃ駄目だよ?それじゃあ僕も今度こそ帰るよ、じゃあね!」

僕がひたすら石を避けてる内にクリスは言いたいことを言っさつさと帰ってしまった。

せめて仲裁してからでも良いのに……

僕は心の中でクリスに愚痴りながら彼女を宥めるのであった。

彼女の近くにあった小石が大方こちらへ移った辺りで漸く彼女からの弾幕は終わりを迎えた。

といっても僕がちよくちよく余計な事を言わなければもう少し早く終わったんだろうけどね?

「はあ……はあ……わかった、もう余計な事は言わないし考えないよ」

「はあ……はあ……それで良いんだ。分かったらお前達ももう帰ると良い」

「そうだね……皆と少しだけ話したら帰るよ」

Friskはどうやら僕がキャラと石合戦(一方的)をしている間に皆と話していたらしく、今は息を切らせているキャラにスパイダーサイダーを手渡している。

僕は先ずはキャラの後ろに居る二人に声を掛けた。

「アズリエル、フラウイー。君達にも本当に酷い事をしてしまった。本当にごめん」

「僕は……今でも君を赦せない。君だって色々抱えていた事はなんとなく解ったけど……やっぱり今更仲良くは出来ないや」

アズリエルはそう言つて困つたような笑みを僕へ向けた。

和解出来ずに別れるのは悲しいけれど、やっぱり仕方ない事なんだ。

彼にとつて僕は親の敵であり平和を崩した張本人なのだから。

「うん……そうだね。ごめんねアズリエル」

「そうだそうだ！お前が幾ら反省したつて僕はお前のした事を永遠に忘れないからなジェノサイダー！」

「フラウイー……ありがとう。僕の事を忘れないで居てくれるんだね」

「は……はあ!?ち、ちげーし！お前なんか直ぐに忘れてやるからなバーカバーカ！」

フラウイーはそんな捨て台詞を吐いて地中に潜つていった。

僕はそんな彼の様子をみてふつと笑みを溢す。

ありがとうフラフイー。なんだかんだ言つても君は僕に付き合つてくれたし、キャラを此処まで連れてきてくれた。

最後まで素直じゃなかったけどそんなところも僕は好きだったよ。

僕は彼に感謝の念を伝え、次にスケルトン兄弟の所へ向かった。

「やあサンズ、君にも本当に苦勞を掛けたね」

「全くだぜ。本当に骨使いの荒い奴だよお前さんは」

「はは、返す言葉もないよ。だけどありがとう。君の協力が無くても今の結果には辿り着けなかったよ」

「はっ、そうかい。そりや骨を折つた甲斐があつたつてもんだ」

あはは、彼のジョークも今なら笑える気がするよ。

「後は、まあ……オイラからお前さんには感謝しなきゃならならねえな」

「サンズが僕に？」

「ああ、沈んじまっていたオイラ達の世界を救い上げてくれてありがとうとな」

「そのお礼なら Frisk に伝えて欲しい。僕は彼とパピルスの為に」

動いただけだからね」

「それでもだ……だからな、お前さんのLOVEについては気にしないで置いてやるよ」

そう言っただけでサンズは白い瞳孔を消し深淵のような眼窩を映して笑って見せた。

僕は彼の言葉を聞いてホッと息を吐いてお礼を述べる。

「ありがとうサンズ、そうしてくれると助かるよ」

「ま、他のオイラがどう反応するかまでは知らないけどな？」

ははは……まあ、それに関してはその時になってから考えるところ。

僕は苦笑いを浮かべながらパピルスの方へ向き直る。

「パピルス、記憶の方はどうだい？」

「あく、実はもうあんまり覚えていないのだ」

「まあそっか。でも色んな記憶があっても大変だからね。それにどの世界でもパピルスはパピルスだから何も心配は要らないよ」

「うむつ、それもそうだな！俺様はどの世界でもグレートだから記憶がいっぱいある必要など無いのだ！」

ふふふ、やっぱり彼と居ると元気を貰えるよね。

あ、そうだ！元の世界の彼は流石に僕の事を覚えてないかも知れないし今のうちにパピルス成分を補給しておかないければ！

「パピルス、最後に一つ頼みを聞いてくれないかい？」

「どうした？なんでも俺様を頼るがいい！」

「あの……ね？僕を抱いて欲しい、な？」

「……っ!!？」

その瞬間、場の空気が変わった。

全員の視線が注目する中、真っ先に声を上げたのは勿論サンズだった。

「おいてめっ、あんま調子乗んなよ！部屋でした約束を忘れたとは言わせねえぞー！」

はははやだなあ。僕が約束を忘れてる訳無いだろう？

僕がパピルスに変な事をしないなら僕の安らぎを邪魔しない。

だからサンズ、今は君こそがその約束を破ろうとしているんだよ。  
何故なら……………

「おおそうかつ！やっぱり貴様も寂しいんだな！案ずるな……………俺様もだからなあああああ!!」

そういつてパピルスは号泣しながら僕を抱き上げるとその長い腕で確りと抱きしめてくれた。

「ありがとうお兄ちゃん、僕が寂しく無くなるまでこのまま置いてほしいな？」

「うおおおおお!!俺様もずっとこうしていたいぞおおお!!」  
「……………このガキ」

ははははは、何を勘違いしたんだろうねえ？

僕はパピルスに抱きしめられる心地よさとサンズを出し抜いた優越感で至福なひとときを過ごした。

……………まあ、その後で顔を赤くしたキャラとの石合戦（一方的）第二ラウンドが始まったのは予想外だったけどね。

……………さて、いざ別れとなると名残惜しいものだけれど何時までもこうしている訳にも行かないからね。

僕はFriskの元に戻って彼と話し合いを始めた。

「Frisk、準備の方はどうだい？」

「うん……………ええと、この世界は今のままで……………キャラ達の世界はフリスクが来る前……………で良いのかな？」

「そうだな、フリスクが作り出した世界は私達の記憶とは異なる世界だからな。強いて言えばアズの戻る時間軸を私が落ちてくる前にしてくれると助かるな」

「うん……………複雑な心境だけど……………やっぱりパパとママ居ない世界は嫌だな」

「解った。後は僕達だけ……………」

Friskは意見を求める様に僕の方を見る。

僕は少しだけ考えてから2つの案のメリットとデメリットを彼に伝えた。

「結界を壊した後に戻ればママ達を地下から解放する事が出来る。ただその先の世界が幸せだという保証はない。結界を壊す前に戻れば少なくとも未知の苦難や恐怖が待ち受けている事は無いし不幸が訪れる事もほぼないかな？そのかわり未体験の喜びや楽しみも限られてくるけどね」

僕は実際の所そこまで外の世界にこだわりがある訳じゃない。

ただそれがママ達の願いだったから叶えたかったんだ。

けどRiskと一緒に外の世界もまた見え方が変わるかも知れない。

だから僕は彼に任せる事にしたんだ。

そして彼は悩みに悩んだ末に遂に答えを出した。

「僕は君と……皆と……外の世界を生きたい！」

## UNKNOWNABLE TALE

先ずは何処の世界から見ていこうか……そうだね、君達にだけは彼女のその後を見せても良いかな？

じゃあ行くよ？ NERVELESS TALEのその後へ……

---

さて、此処はニューホームだね。

あの後キャラを養子に取ったトリエルは自分の気持ちを見つめ直してアズゴアとよりを戻したそうなんだ。

そうして今は家族三人でニューホームで仲睦まじく暮らしてるみたいだね。

おっと、そう言っている間に彼女が帰ってきたようだ。

「ただいまっ！」

「おかえりキャラ。今日は随分とやんちゃしてきたようだねえ……楽しかったかい？」

アズゴアは無邪気な笑顔で飛び込んできたキャラを抱き上げると優しい笑顔で尋ねた。

「うんっ！今日はパピルスとアンダインの三人で料理の特訓してきたの！でも今日はアンダインのおうち燃えなかったよ？」

「おお、燃えなかったのかっ。それは良かった、皆料理が上手になってきたんだね？えらいえらいっ」

アズゴアはキャラを褒めながら脱がせた靴を下駄箱にしまい、彼女をフロアリングに降ろして優しく頭を撫でた。

「えへへ、いつかパパとママに美味しいご飯作って上げるんだから！」  
キャラは顔をほころばせながらそう言って親指を上にした。

「ああ、ママもパパも楽しみに待っているよ。それじゃあママがご飯を作って待つてるから手洗いうがいをしたらリビングに行こうか？」  
「うんっ！今日のご飯はなんだろう？」

「今日はハンバーグみたいだよ。それにデザートはシヨコパイだ！」

「わぁーいチョコだぁっ！やったぁ!!」

そうしてキヤラは期待に胸を膨らませながらアズゴアと一緒に洗面所へと入って行つたよ。

ふふ、今君達はきつとこう思ってるんじゃないかな？

【俺の知っているキヤラちゃんじゃない……気がする】

大丈夫、僕も彼女の変わりようには初めは驚いたよ。

だけど考えて見ればあれこそが本来の彼女なんだ。

彼女は生まれてから一度も誰かに愛を受ける事なくLOVEの犠牲になりこの地下へと落ちてきた。

そんな状態で自分の気持ちに蓋をして何百回もモンスター達を殺し続けてた。

そのせいであんなスレた子になってしまっただけで本来彼女は寂しがりやで甘えん坊の年相応の少女だと言う事だよ。

ま、あくまでも此処の彼女の事であつて全てがそうだって訳じゃないけどね？

さて、そうしてる内に夕飯を食べ終えた彼女が部屋に戻ってきたよ。うだ。

折角だしちよつと挨拶してこようか。

\*クリスっ！過度な干渉は避けるべきだ。我々が観測しているこの状況ですら奴らに気付かれるリスクがあるのだぞ。

え、仕方ないなあ……じゃあ一言掛けたら次に行くよ

\*あ、おいつ！

「幸せにね、キヤラちゃん」

「っ!?だ、だれ!だれだっ!?」

あははっ、慌てふためく彼女が見れたしもう満足だ。

それじゃあ次に行こうか？

\*はあ……全くだい興味だな。



さあ、次はアズリエルくんだね。

彼の所は概ね君達を知ってる通り楽しくやっている様だよ？

ただ一つ大きな違いがあるとすれば彼が君達が知ってる彼より強い気持ちを持っていたってところかな？

結果としてキャラもアズリエルもまだ生きているし、アズゴアも落ちてきた人間を殺しはしなかったんだ。

けれど結局外には出れないものだから今やトリエルさん家は大家族になってるよ。

おっと、こっちはどうやら夕飯が終わった所みたいだね。

「ごちそうさま(でした)っ！」

「はい、お粗末様。みんなっ、ちゃんと順番に歯磨きするのよ？」

「はーい！」

ご飯を食べ終えた八人はトリエルに元気の良い返事をして順々にリビングを後にする。

だが他の皆が洗面台の列に並ぶ中、アズリエルとキャラだけは地下を降りて大きな扉の前に居た。

今はトリエルによつて閉じられているその扉に二人はもたれ掛かり何をするでもなく天井を見上げる。

「……………」

「……………ねえキャラ？」

僅かな沈黙の後、先に口を開いたのはアズリエルの方であった。

キャラは上を見上げたまま何も答えない。

それでも聞いていると判断したアズリエルはそのまま話を続けた。

「君はまだ人間への復讐を諦めてないのかい？」

「……………結界を壊すのはママ達を解放する為だ」

「うん、それも君の本心なのは解ってる。だけど君の願いは人間との共存ではないんだろ？」

キャラはその問いには答えない。

だがアズリエルはその沈黙が肯定である事を知っている。  
だからこそ尋ねる。

「でもさ、君や彼らを見ていると僕には人間全てが悪だとは思えないよ」

「……アズっ」

キャラはアズリエルをキツと睨みつけるが彼は一つ頷いて続けた。  
「キャラ、確かに君に酷い事してきた奴らは赦せない。だけど相手の事を知ろうともせず人間というだけで一纏めにしてしまうのはそんな奴らと同じじゃないかな」

「おまえ……っ！私を奴らと一緒にだと言いたいのかつ!!」

アズリエルの発言に激昂したキャラは彼の襟を両手で掴み上げて扉に叩きつけた。

「ぐう………！だって君は彼らと過ごしてるのに未だ人間を滅ぼそうとしてるじゃないか！」

「当たり前だ！あいつらだって不遇の果てに落ちてきたのだぞ！それがどういいう事か解るかっ！」

「う……ぐ……解らないよ！例えそういう人間が多くても全てじゃないじゃないか！キャラ……君はそういう人達も殺そうって言うのかい？」

「う……うるさいっ！人間は善人ぶるのが特技なんだ！そんな少数の為に甘ったるい事をしてたら足元を掬われるだけだ!!」

キャラは感情に任せてアズリエルを突き飛ばすと振り返り部屋に帰ろうとする。

そんな彼女に聞こえるようにアズリエルは呟いた。

「多数決で少数を切り捨てるなんて……やっぱ奴らと同じだよ」

「アズっ！貴様まだ……っ！」

「キャラ！僕は君が好きだ!!」

「……なっ？」

「君を愛してる……だから君には君に酷い事してきたそいつらみたいな事をしてほしくないんだ……」

そう言ったアズリエルの瞳から一筋の雫が零れた。

「アズ……」

「お願いだよキャラ……君や僕達だつてこうして話せるんだから……」

「……ふんっ！私はもう帰る」

キャラは彼の気持ちを受け止めきれずに逃げるように歩き出す。

だが彼女は突き当りを曲がる直前にアズリエルに聞こえるか聞こえないかの声で呟いた。

「……………お前が私を守ってくれるのなら考えてやる」

それだけ言うと彼女は顔を赤くしてさっさと帰ってしまった。

だが、アズリエルはそんな彼女の言葉を聞き漏らさなかった。

「キャラ……！分かったよ。僕ももっと強くなってどんな奴からも君を守れるようになるよ！」

アズリエルは固い決意を胸に歩き始めるのだった。

うくん、青春だねえ！

僕には縁のない話だけど同じ男の子としては頑張つて貰いたいね！

彼らの今後も気になるところだけれどそれは君達の想像にお任せするよ。

それじゃあ次に行こうか！

お次は最初からフリスクを止め続けた立役者。もう彼女が主人公で良かったんじゃないかなつてくらい行く先々で仲間恵まれたキャラちゃんがいる世界だよ！

\*おいお前、何しにやって来た。

わあ!?!まさか話しかけて来るとは思わなかったよ。

というか君はFrisk君に頼んで身体を用意して貰わなかったのかい？

器は流石に作れずともそれくらいは出来たはず。

\*ああ、一度死んだ人間が生き返っても何かと面倒だからな。  
なるほどお……でも一人ですつとこんな所に居ても寂しくない？

\*心配ない、あいつらには私が見えているからな。

そういつて薄く微笑む彼女の視線の先を見るとそこには植木鉢に入れられたフラウイーとその部屋で好き好きに寛ぐ六人の子供がいた。

あれ？でも彼女達って確か……。

\*ああ、フリスクが作り出した世界線……本来アズリエルが戻った世界の人間なんだがな……どうしてもこつちに来たいというのでな。

キヤラは苦笑いを浮かべながら人差し指で頬をかく。  
なるほど……随分気に入られたみたいだね。

だけどそれなら尚更君も身体を得て一緒に居た方が彼女達も嬉しいだろうし良かったんじゃないかい？

\*そうかもな、だからこれは私の我儘みたいなものだ。  
わがまま？

\*ああ、此処ならあいつらを見守っていられるからな……それに  
ジエノサイダーみたいな奴がまた来ないとも限らんだろう？

……はは、そういう事にしておこうか。

\*む……引つ掛かる言い方だがまあいい、用が済んだらさっさと帰れ。実際此処も奴らに見つかる訳にはいかんのだろう。

まあそうだね、此処も彼の影響下にある世界だから見つからないに越したことはないよ。

「あれえ？キヤラちゃん何処行つたんだろ……？」

「あら、そういえば居ませんね」

それにそつちも呼ばれているみたいだしね？

\*ああそうだな、じゃあなクリスマス。もう二度と会う事はないだろう。  
う。

つれないなあ……まああながち間違いでもないから困っちゃうね。  
それでも僕は別れる時には必ずこう言うよ、またねっ！

\*………ああ、またな。

キヤラは背中を向けながらも一言そういつて去っていった。

ふふ、やっぱりまた逢えるかもしれないって思ってる方がワクワクするよね？

さあさあこのまま彼等の所へ向かっても良いんだけど、その前にちよつと休憩かな？

それじゃあ皆、次こそが本当のファイナーレだからね！

最後まで見てくれる事を願ってるよ！またねっ！！

# UNKNOWNABLE TALE side フリスク

結界が壊された。

出口近くの広めの空洞で僕はモンスター達と Frisk が目覚めるのを待っていた。

そんな僕に真っ先に声を掛けたのは当然といえば当然だがサンズだ。

「オマエ、何者だ？」

彼の反応から察するに僕の LOVE はジェノサイダーの時のままなんだろう。

僕は振り返らずに両手を上にあげて戦う意志が無い事をアピールしながら答える。

「僕はフリスク、皆が覚えているか知らないけれど最初に落ちてきた人間だ」

「フリスク……まさか……」

「フリスクっ！あなた本当にフリスクなの!？」

「おばさんっ、近付いちゃ駄目だ!」

僕の名前を聞いてママは真っ先に駆け寄ろうとしたがサンズによつてそれは阻止された。

パパもママも僕の事を覚えて居てくれた……Frisk が初めて二人に会った時の反応からも察しては居たけどやっぱり嬉しいものは嬉しい。

僕は直ぐにでもママに飛びつきたい気持ちを抑えつつ振り返り、ママに返事をした。

いま突発的な行動を取ったら即串刺しにされそうだからね。

「そう、僕は一度死んだ。そして決意だけの存在としてこの世界に留まり続けていた」

「あ……ああ……！フリスク……ごめんなさい……私が……私があるの時にちゃんと見ていれば……」

「フリスク……済まない……」

ママ……パパ……違うんだ。二人のせいじゃない。

けど理由を話したら二人はきつともっと自分を責めてしまう。

「ケツイだけの存在……確かに良く見ればお前さんのソウルは器が無いんだな」

「そうだね、だから存在としてはフラウイーと似たようなものさ」

彼の場合はアルフィーに人工的にケツイを注入されたから正確には違うんだろうけど。

僕は少し青褪めて震えるアルフィーとそんな彼女の方を確りと抱いて落ち着かせているアンダインに一旦目を向けると視線をサンズに移して本題に入る。

「それで、君が僕を警戒してる原因についてだけ……詳しく話すと長くなってしまいうし君も聞かせたくない事もあるだろうから過程については割愛させて貰うが、恐らく君の想像通りさ」

「……そうかよ。じゃあ質問を変えよう、お前さんは救いようの無い悪党でも変われると思うか？努力さえすればだれでも良い人になれると思うか？」

それは嘗て僕が無視し続けて来た質問であった。

あの時は考えるまでも無かったけれど今は違う。

僕はこれまで培ってきた長い経験をもつて漸く辿り着いた答えを彼に伝えた。

「人は簡単には変わらないよ。ましてや努力なんかで変わるようなものじゃない」

「そうか……そうかもな」

「それでも人は他人との関わりで変わって行けるものだと思おう」

あつちのキャラや僕がそうであったように。

「……そうかい。お前さんは変わったのか？」

真剣なサンズの表情に僕は真っ直ぐ答える。

「ああ、けどこれは変わったからと言って忘れて良いものじゃない。だから僕は死んでもこの罪を背負っていくつもりだ」

「……………へっ、いいぜ。そこで眠りこけてるガキンチョに免じ

「て信用しようじゃねえか」

「…………ふふっ」

「サアアアアアンズ……………まで、そんなに面白く無かったぞ？」

「そ、そうかつ？可笑しいな……………キレツキレなギャグだと思ったんだけどな」

「ママはこっそり笑ってるけどね。」

「ん…………んう…………ん？」

「「F r i s k !」」

「サンズが滑ってる間にF r i s k が目を覚ましたようだ。」

「ああよかった、気が付いたみたい！」

「あ、あれ？ここは……………」

「おはようF r i s k、此処は出口前の空洞だよ」

「え…………と…………？」

「何時まで寝ぼけてる！心配しすぎてどうにかなるかと思ったぞ！」

「うぐっ!？」

「アンダインが状況が掴めずに呆けているF r i s k の背中を割といい音がるくらい強めに叩く。」

「F r i s k は背中を擦りながらアンダイン達に頭を下げた。」

「皆心配かけてごめん……………」

「そ、そんな謝らなくてもいいよっ!?!確かにし、しし心配したけど……………」

「こんどからは昼寝をする時は先にそう言ってくれ！」

「う、うん……………」

「パピルスなんかさつきまでギャンギャン泣いてたしな」

「なに！パピルス様は泣かないぞ!……………目に何か入っただけで」

「何が入ったんだ？」

「涙だっ！」

「僕はF r i s k の隣で二人の漫才を懐かしみながら見ているとママが近付いてきてそつと尋ねてきた。」

「ねえフリスク？あなたもあの子の知り合いなのかしら」

「どうやらF r i s k も聞いていたらしく僕の方を横目にチラチラ



と見ている。

そんなFriskの様子に悪戯心が芽生えた僕は含みのある笑みを浮かべて彼を一瞥するとママに答える。

「ううん、知り合いじゃないよ?」

「えっ!?!」

「あら……そうなの?」

僕はニンマリと笑みを浮かべると驚愕の表情のまま固まっているFriskに手を引いてひっそりと抱きついてこう続けた。

「僕の大切な人さ!」

「ふ、ふえ!?!な……なあっ!?!」

「あら……ふふっ、そういう事ね?」

僕の答えにママは満足そうにそう言うと、突然の事に顔を赤くして狼狽えているFriskの頭を優しく撫でて一言彼に伝えた。

「Frisk、これからもこの子の事を宜しく頼むわね?」

「え、ええと……はいっ!」

ママは彼の返事に満足そうに頷いた。

「え、ええとつまり二人は親公認のカカカカップルって事になるのね!?!」

「なににい!?!そうなのか!良かったじゃないかFrisk!!」

何時の間にか僕達の会話を聞いていたアルフィーとアンダインが唐突にそんな事を言い出した。

あ、でも皆Friskに注目してたんだしこうなるのは当然か。

しまったなあ……流石に恥ずかしいってレベルじゃないよ……。

終いにはパパまで『娘を必ず幸せにしてやってくれ』なんて言い出す始末だし。

僕が顔を真赤にしながら火消しにまわって漸く皆が落ち着いてくれたよ。

……そんな僕を少し離れた所で愉快そうに眺めていたあの笑うゴミ袋には今度ハンバーガーケチャップ抜きを口に詰め込んでやる。

——つと、少し話がそれてしまったけれど僕達は地下を出る前に皆に挨拶して回る事にしたんだ。

船は使わずに皆に話しかけて周りながらF r i s kと思い出話にも花を咲かせていた。

そんな旅もやがて終わりを迎え遂に彼の待つ始まりの場所へと辿り着いた。

僕は此処である事を思い出したので、F r i s kに声を掛けた。

「ごめんF r i s k、やっぱ気まずいからさ。君一人で会ってくれないかい？」

「え？なんでいきなり……」

「ほんとごめんっ、じゃあ近くで待ってるから！」

そう言っ僕は彼に後を任せてもと来た道に戻って行った。

UNKNOWNABLE TALE side Frisk

フリスクが突然帰ってしまった……なにがそこまで気まずいんだろう？

とは言え戻ってしまったものは仕方ないので僕は一人でアズリエルの所に向かった。

「Frisk……僕の事は心配しないでいいよ、誰かが花の世話をしなきゃ駄目だからね」

「アズリエル……本当に一緒に来ないの？」

「……うん、戻ったらまた皆を傷つけちゃう。もう皆とは合わない方が良いんだ。だからFrisk……僕の事は放っておいてよ」

アズリエルは寂しそうに笑って言った。

彼は諦めてるけれど僕は彼一人を置いてけぼりになんて出来ない。

僕は彼の手を握ったままじっと見つめた。

「……どうして行かないの？君は……」

アズリエルは僕の目を見てため息を吐くと僕に問い掛けて来た。

「ねえ、君はどうしてこの世界に来たんだい？君もあの伝説はしってるよね？」

【イビト山に登った者は二度と戻らない】

もちろん僕は此処に落ちてくる前からその伝説の事を知っていた。

「……知ってたから来たんだよ」

「そっか……」

彼は僕の言った言葉の意味を理解したんだろう。

悲しそうに目を伏せてそう呟いた。

「実はね、フリスクが落ちてきた理由もあんまり良いものじゃなかったんだ」

僕も詳しく聞いたわけじゃないけれど彼女も僕と似たような境遇

だったと聞いている。

「F r i s k、君には本当の事を教えてあげる。フリスクは表には殆ど出さなかったけど人間の事をとて憎んでいたんだ。彼女から直接聞いた訳じゃないけどその憎しみが凄く強いって事は僕にも分かった」

フリスクが……？

彼女がそんな素振りなど見せた覚えが無かった僕は暫く呆然としていた。

しかしこつちの事情を知らない彼は僕の反応を別の意味で捉え慌てて弁解を始める。

「あ、ええと……同じ名前だけど君の事じゃないからね？」

「え？ああうん大丈夫っ、続けて」

「えつと……うん、実はね？その事に気付いたのはもうフリスクが毒を飲んで死んでしまった後だったんだけれど……フリスクと僕の魂を一つに融合させた時に身体を動かす力も二人に別れちゃったんだ。そして彼女は魂の抜けた自分の身体を持って結界を抜けたんだ」

そして人間の村に着いた彼女はアズリエルに声を掛けたらしい。

「一人残らず殺してしまおう」と……。

アズリエルは涙を堪えながら続けた。

「でも僕は彼女にそんな事させたくなかった……違うね、僕が嫌だったんだ。だから反対した……そのせいで僕達は……僕は……」

「アズリエル……辛いなら無理に話さなくても良いんだよ？」

僕は心配になり彼の言葉を遮るが彼は首を横に振る。

そして涙を拭くと、笑顔を作り大丈夫だと僕に告げて話を続けた。

「今思えばフリスクは君とはまるで違かったんだ。名前とか服の趣味とかは似てるけど……彼女は強い憎しみを持っていたし……正直立派な人間とは言えなかった。どちらかと言えば……酷い人間だったのかも知れない」

違う……！フリスクはそんな子じゃない！

彼女が導いてくれたから僕はここまで頑張つてこれたんだ。

「彼女はママ……トリエルさん達の願いを叶えようと諦めずに頑張つたんだ！それこそ僕なんかよりずっとずっと皆の為に心をすり減らしてきたんだ！なのにどうして君は彼女の事……はっ、ぐ……ごめん」

彼女の思いが否定されたような気がして僕はついカツとなつて言い返してしまった。

アズリエルは面食らつたような顔をしていたがやがてフツと薄く笑うと口を開いた。

「……そうだね、僕が彼女を悪く言う資格はないね。僕は今でこそあの時の選択が正しかつたんだって言えるけど……結局彼女の想いを裏切つたのは事実だからね」

「……」

なにをやつてるんだ僕は……。

アズリエルを救いたいの自分で彼を慰められない状況を作つてしまった。

「……」

「Frisk、僕の話聞いてくれてありがとう。さあ、君はもう仲間の所へ戻らなきゃ。外の世界ではくれぐれも気を付けてね。地上は皆が思つてる程平和な場所じゃないから。フラウイみたいな奴も沢山いる。【良い奴】で居るだけじゃ解決できない事もある」

彼は逡巡した後、精一杯の笑顔で伝えた。

「アズリエル……僕は……」

「Frisk……うまく生きるには【殺さず殺されず】だよ。それをモットーに頑張つていればきつと大丈夫。それじゃあね」

僕では彼を救う事は出来ないのだろうか。

フリスク……君なら彼を救えるだろうか？お願いだよフリスク、彼を……。

僕は今はその場に居ない彼女に心の中で祈つた。

と、その時。扉の方から小さな足音が洞窟に反響して僕等の耳に届く。

気付けば僕とアズリエルは同じように扉へと視線を動かしていた。  
「あくあ、折角アズが人の悪口を言ってる所を飛び込もうと思ったのになあ〜」

「へ？フリスク……どうして此処に？」

「あ………あ………ああ………」

なんと扉の奥からフリスクが不満そうに頬を膨らませながら入ってきたのだ。

気まずいからって戻ってっただけなのはどうして……。

突然の登場にアズリエルなんかは顔真っ青にして全身を震わせているのにフリスクはお構いなしに理由を話し始める。

「いやだからさ、どうせアズの事だから何時もの様に僕の悪口を言ってるんだろなって思ってた。その現場を抑えてやろうって思ったんだけどさ？君が……そ、その……あんな風に言ってくれるなんて思わなくて……」

フリスクは顔を赤くしてモジモジしながらそう答えた。

「えーと……つまりアズリエルを驚かせようと僕一人に行かせたけど出るタイミングを逃したと」

「そ、そうだねえ？」

はあ………全く、僕が真剣に悩んでたって言うのに君は。

僕は未だに震えている彼に声を掛けてこっちの世界に引き戻そうと試みる。

「アズリエル？まず目を瞑って深呼吸して」

「う、うん………すう………はあ………あ、ありがとう」

「落ち着いた？そしたらゆっくりと目を開いて」

「うん………うわあああっお化けだあ!?!ふ、フリスク！やめてっ！僕が悪かったから呪わないでえ!?!」

………そっか、そうだね。

死んだはずの人間が出てきたらそれは驚くだろうね。

結局僕がフリスクの事情を確りと説明してどうにかアズリエルは落ち着きを取り戻してくれた。

「……ごめん、二人共」

「今回は仕方無いよ。何も聞かされずに突然だったんだもん」

「あくあ、シヨックだなあ……お化けとか案外的を得てる事言われたのがシヨックだなあ」

フリスクは傷心中……の振りをしてアズリエルを弄っていた。

「ごめんってばあく……」

「自分だってお化けフラワーのくせにい」

「はうっ！ううく……」

「フリスクっ、良い加減にしなよ。それ以上やるとパピルスに嫌われるよっ。」

「うぐっ……はあ、仕方ないな。それじゃあF r i s k、アズ、さっさとママ達の所に帰るよ」

そう言つてフリスクは立ち上がつて歩き出そうとするが、アズリエルが待ったを掛ける。

「フリスク、彼には言ったけど僕は皆の所には戻れないんだ。僕はどう皆を傷付けたくないよ……」

アズリエルははずれ花の姿に戻ってしまう。

そしたらまた優しさや思いやりを失ってしまう。

だからそれを何とかしなければ彼は此処を離れようとはしないだろう。

「うくん、そうだねえ……皆のソウルの残滓が器として機能してその状態だとしたらF r i s kの決意の力でも解決出来ないだろうしなあ」

僕の力……そっか！

「ねえ！器が無くても今のフリスクみたいに姿を留めて置くことなら出来ないかな？」

「うーん……出来なくな無いけど、クソ花ならぬクソモフが出来あがるんじゃないかなあ？」

「自分の姿でフラウイみたいになるのは嫌だよ……」

そっか……そっかだね。

でもそうすると他に方法が……。

「あ、そう言えばクリスが言つてたおまけつて何なんだろう？大体予

想はついてるけどもしあつてるならまだ実感は無いしなあ」

「おまけ？・クリスさんと何か話したの？」

僕がフリスクにそう尋ねようとしたその直後、大きな音を立てて空間の一部がガラスの様に割れた。

と、同時に見覚えのある人が出来た亀裂から飛び込んできた。

「僕を呼んだかな？」

「え……えっ!？」

「クリス……どうしたんだい？前にあつた時はもう少し落ち着いて無かったかい？」

「何とかガスターから15分だけ許可が降りたからね、派手に登場しようと思っただ」

啞然とする僕と状況に追い付けずオロオロするアズリエルを置いて二人は何やら話し始めた。

「時間が時間が無いのか。じゃあ早速本題に入るけれどさ、あの時言っただおまけの内容と既に僕に適用されてるのかを教えてくださいんだけど。あ、念の為耳打ちで教えてもらえるかい？」

「なるほど、単純明快な質問だね。分かった………つて所だね」

「なるほどねえ……クリス、君は本当に良いのかい？」

どんな内容なんだろう……気になるけど態々耳打ちで聞くくらいだから教えてくれないんだろうなあ。

「僕は問題ないよ。僕には有って無いようなものだから」

「へえ〜？そんなんだ〜。じゃあさ、そのおまけアズに与える事は出来る？」

「え？出来るけど……どちらかにしか渡せないよ？」

渡す？一個しかないもの……う〜んなだろう。

僕が頭を悩ませているとその様子に気付いたフリスクが一言だけ伝えてくれた。

「アズを救えるとおきざり」

「本当に良いのかい？」

「大丈夫さ、だから早く頼むよ。君が此処に居られる時間も限られて



るんだろ?」

「……分かったよ。後悔しても遅いからな?じゃあおいでアズ」

「え……う、うん」

クリスマスさんに手招きされたアズリエルはおずおずと彼に近付く。

アズリエルがクリスマスさんの前まで来ると彼はアズリエルの胸元に手を翳した。

アズリエルを救うとっておきとは……。

僕は不安半分期待半分でその様子を眺めていると突如クリスマスさんの手が眩いくらいに瞬いた。

そして光が収まり目を開いた頃にはクリスマスさんの姿は何処にも無かった。

まさかとっておきと……クリスマスさん自身!?

『時間切れだってさ、ギリギリ間に合って良かったよ。またね〜!』

だがどうやらそれは違ったらしくそんな彼の声だけが彼の居なくなつた部屋にこだましていた。

「危ないなあ……まあ間に合ったなら良いけど。じゃあ改めてママの所に戻るっか?」

「え……うん」

アズリエルは何かが変わつた事を実感したのか生返事だけを返してフリスクの後を歩いていくのだった。

行きと違い帰りは船を使い寄り道せずに帰つたので行きの6分の1位の時間で帰つて来た……とおもう。

実際に時間を測つた訳じゃないので解らないけどそんな感じで帰つて来た僕達は皆に帰つて来た事を伝えた。

「ただいまママ、パパ!」

「おかえりな……アズリエル?」

フリスクに気付き顔を上げたトリエルはアズリエルに気付き表情を一変させる。

「ママ……みんな……その………ごめん……なさい」

恐る恐る前に出てきたアズリエルは震える声を絞り出して謝った。

トリエルはそんな彼に駆け寄り優しく彼を包み込む。

「ごめんなさいアズリエル……貴方達を助けてあげられなくて……本当に……」

「アズ……ずっと辛い思いをさせてしまったね……本当に済まない」

そう言つてアズゴアも二人を力強く抱き止める。

そうして二人の愛に包まれたアズリエルは遂に堰を切ったように泣き始めた。

そんな三人を微笑ましく見つめていたフリスクに僕はからかい半分でせつついてみた。

「良いんだよ？君も行つてきなよ」

けれど彼女は悲しい目をしながら首を横に振った。

「僕は彼等を不幸な目に合わせた加害者だからね、流石にあの輪には入っていけないよ」

フリスクの気持ちは痛いほど解る。

けど……それでも彼女が悲しむ顔をいつまでも見ていたくない。

そう思った時、僕は咄嗟に彼女を抱きしめていた。

「へっ!? Frisk? どど、どうしたんだい急に!」

「大丈夫だよフリスク。何があっても僕はずっと君の味方だからね?」

「Frisk……うん、ありがとう」

僕は優しく微笑み返す彼女の瞳から涙が溢れなくなるまでずっと抱きしめ続けた。

「……よし、それじゃあ皆準備は良いかい？」

先程までの彼女達はもう居ない。

フリスクは皆へ最終確認すると先陣切って歩き始める。

僕とアズリエルもその後につき皆もその後を付いていく、

そしてやがて見えてくるルインズの扉に似た形の大きな扉。

それをアズゴアの魔法によって開くとその先は真っ白に輝いていた。

フリスクは再び歩き出そうと一歩踏み出した所で足を止めた

後ろに続いていた僕も彼女にぶつかりそうになり慌てて足を止める。

「フリスク？」

僕は彼女にどうしたのかと尋ねると彼女はこちらを振り返り自然な笑顔のまま僕に話しかけた。

「Frisk、僕は何があっても君のそばにいるよ。これからも……この先も……ずっと君と一緒にだからね」

「フリスク……うんっ、当たり前じゃないか。僕達はこの先もずっと一緒に」

僕がそう返すとフリスクは屈託のない笑顔のまま正面へ振り返った。

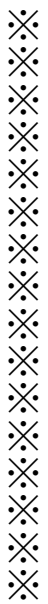
そして彼女は再び歩みを進める。

その光景が僕に言い知れぬ不安を与えた。

僕は慌てて彼女の手を掴もうとしたが僕の手が彼女に触れる直前で光に包まれて消えてしまった。

「フリスク……っ！」

僕は彼女に追い付こうと急いで光の中へと入って行った。



扉を抜けるとそこには夕焼け空が広がっていた。

だけど今の僕にはそんなものを見ている余裕なんて無い。

僕は一目散に先に来ている筈の彼女の姿を探した。

右も左も後も後ろも上も下も見える所は手当たり次第探す。

後から出てきたアズリエルや皆に聞いても中には居ないと答えが帰ってくる。

実際に入ってみてもその姿は見当たらない。

「サンズ！お願いだ！中にフリスクが居ないか見て来てよ！」

「お、おう分かった。だが奴は確かに此処を通った。だからあんまり待すんなよ？」

サンズはそう言っただけで直ぐに探しに行ってくれた。

僕は彼が帰ってくるのを待ちながらフリスクの言葉を思い起こす。

僕は何があっても君のそばにいるよ……何があっても？

つまり彼女は何かある可能性を知っていた。

じゃあ何故……あつ、おまけ!?

僕は直ぐ様彼に確認を取る事にした。

「アズリエル！クリスマスさんが君に渡したおまけってなんの事だか解るかい？」

アズリエルは僕の剣幕にたじろぎながらもおまけの正体について考え始める。

「え……と……僕に残っていたソウルの残滓が上手く定着してるから……多分……その……器の代わりになるような何かだったん……じゃない……かな？」

器の代わりになる何か？そんなものが作れるのなら僕にも出来るはず。

だけどそれなら態々クリスマスさんが一つしかない物を渡さなくても

良いはずだ。

まっつて……一つしか無い。それにフリスクが確かクリスさんに本当に良いのかって確認を取ってた。

つまりクリスさんが持っていた又はクリスさん自身の何かを渡した。

それは何か……器の代わりになるようなもの……違うっ！器そのもの、つまりクリスさんのソウル!?

でもそんな事って……いや、それよりもそれはアズリエルが持っていてフリスクは持っていない。

つまり彼女はあの時と同じ状況のまま……。

「うそだ……嘘だっ！信じない……信じられないよ……」

「F r i s k ! ? 大丈夫かい？」

アズリエルは心配そうに声を掛けてくるがそんな事はどうでも良かった。

そうだ……まだサンズが中を探してくれている………きっと地下に居るはず。

だがそんな儂い願いも直ぐに打ち砕かれる事となった。

「つち、駄目だ。行ける所全て探したが見つからねえ。やっぱコツチ側にいんじゃねえのか……っておい！お前さん大丈夫か!？」

地下にも居ない……外にも居ない……じゃあやっぱり………。

でもそしたらどうすれば……何のために此処までやって来たんだ。そうだ……もう一度リセットすれば………。駄目だ、

それは彼等との約束を破る事にもなるし……何よりフリスクはそんな事望んでいない。

でも、どうすればいいんだ……君が居ない世界に僕だけ居たって仕方ないじゃないか。

僕はその場に崩れ落ち空を見上げると、太陽は既に姿を隠しそこには月と星だけが世界を照らす闇が広がっていた。

お願いします……僕はどうなってもいい。

だから……だからフリスクを返して！

僕の願いに応えるかのように一筋の流れ星がキラリと光を放って

空に消えていった。

「おいFrisk、てめえなにしようど……」

「Frisk！駄目だよっ！」

何かに引かれるように僕は崖に向かい歩き出していた。

後ろではサンズとアズリエルが僕を止めようとするが、彼らでは僕の決意を阻む事など出来ない。

君と居れないのなら僕は……

\*ありがとう、Frisk。

GENOCIDER TALE & TRUE END

いままでだったらきつと帰って来れなかっただろうね。

だけど僕はもう以前とは違う。

ママやパパ、アズ達と一緒に生きて行きたい。

何よりRiskが呼んでる……僕は彼と一緒に生きていくと決めたんだ。

だから今の僕には……未練しかない!!

扉を潜り抜けた僕は飛び出すようにRiskのもとまで駆け出し離さないように彼を確りと抱きしめた。

けれどその勢いを直ぐに殺すなんて出来る訳ないので僕は当然Risk諸共宵闇の空へと放たれる。

「オ……オイイイイツ!? テメエも何してんだあコラア!!」

はは、サンズはボケよりツツコミの方が向いてるんじゃないかな？  
とは言えこのままじゃ本当に不味いので僕は彼に目を合わせて叫んだ。

「ヘルプミーサアアアアアアンズ!!」

「バカかテメエはあぁっ!?!」

サンズは僕に罵声を浴びせながらも重力操作で無事僕達を地面へ引き戻してくれた。

「はは、助かったよサンズ!」

「ぜえ……つぜえ……『助かったよサンズ!』じゃねえよ馬鹿! 届かなかったらどうするつもりだったんだ!」

「大丈夫さ。もしそれが届かなくても君なら幾らでも助ける方法があったでしょ?」

ま、届かない事があるなんて初めて知ったけどね?

僕はRiskを地面に降ろしホツと一息吐いていると色んな方角から刺すような視線が飛んできた。

「……………まあ、そうなるよねえ。」

僕は覚悟を決めて一番視線が痛い F r i s k の方へ向き直る。

「……………F r i s k ? その……………」

「……………バカフリスク」

彼のストレートな罵倒が心に突き刺さる。

「どうしてあんな無茶したのっ!」

「あれは……………助けるのに必死で……………」

「そっちじゃないっ!」

F r i s k は今までとは比べ物にならない位怒っていた。

だがそれも当然だろう。

僕はまだ何処かで自分の価値を軽く見ていた。

だけど彼はそんな僕の事を何よりも必要としてくれていた。

それを考えれば僕の行動がどれだけ無思慮で浅はかだったかが分かる。

「……………ごめん、F r i s k 」

僕は余計な弁明は全て言い訳にしかならない事を悟り、頭を下げてただ一言だけ謝った。

「君は……………本当に馬鹿だ……………大馬鹿だっ……………」

「……………」

F r i s k は罵りながら僕に飛びつくときと苦しいくらいに締め上げて泣きじやくった。

僕はそんな彼を何も言わずに抱きしめ返すと、彼が泣き止むまでその背中をさすってあげた。

しばらくして F r i s k も落ち着きを取り戻し、僕から離れた。

しかし、僕はまた叱られる事になるのだろう。

僕は続いてママ達の方へ振り向き、一歩ずつ近付いて行く。

「……………」



「……ママ、パパ」

僕は眉を吊り上げる二人に伏し目がちに見上げる。

あの様子だとアズリエルから僕の計画の事を全て聞いたのだろう。「フリスク、私達があなたとアズリエルを失ってどれだけ悲しんだか解っているのかしら？」

あの時の僕は結局の所自分の事しか考えられていなかった。

だけど、僕とアズの二人を一度に失った後のママ達を見て僕は後悔していたんだ。

だから僕は初めてF r i s kと結界を壊して皆が外に出れた時、やっと二人の願いを叶えてあげられたと思っていたんだ。

でも……ママもパパも、アズもF r i s kも……だれもそれを良しとしなかった。

……結局僕一人が独りよがりで満足しようとしてただけなんだって、今なら認める事が出来る。

「本当に……ごめんなさい、ママ……パパ。僕のせいでアズまで……っ」

「……はあ、もういいわフリスク。後でたっぷりお説教しますからね。」

「あ……とで……？」

「そうさ、私も一緒に怒られてあげるよ。だから帰ろう……いや、行く。私達の新しい家へ」

パパはそう言って優しく微笑んだ。

それって……つまり……でも……本当に、いいの……かな。

アズもいるし、それにF r i s kだって……。

僕がF r i s kの方を振り返ると彼は笑顔で頷いた。

それでも僕が迷っていると不意にママが僕を抱き上げて囁いた。

「何も悩む事なんて無いでしょう？ 私達はずつと前から家族なのだから。それとF r i s k？ あなたさえ良ければこれからもこの子の為にも一緒に暮らしてくれないかしら？」

「うんっ！ママ、パパ！アズリエル、フリスク！これからも宜しくねっ！」

ママからのお願いにFriskは二つ返事で答えた。

「Frisk……僕は……」

「大丈夫、これからは皆一緒だよフリスク」

僕は……僕は皆といっても良いんだ。

結界を壊して皆をこの地下世界から解放したい……それは長年僕が求め続けてきた願い。

だけどそれは僕が本当に求めていたものでは無かったんだ。

僕はずっと……ずっと皆とこの瞬間を過ごす為に頑張ってきたんだって、そう思ったらすつかり弱くなってしまった僕の涙腺からは枯れることのない雫が再び頬を流れ落ちていたんだ。

「ありがとう……みんな……うう……」

「ふふ、泣き虫だなあフリスクは」

「うう……君だって泣き虫じゃないか……」

「あつ、あれは君が……っ!」

「ほらほら、喧嘩出来るくらい元気なら早く新しいお家を見つけに行くわよ?特にフリスク、あなたとは《たつぷり》話す事があるんですからね?」

「うっ………はい」

ママは僕を降ろしながらそう言っつて優しく笑うと僕とアズの手を取って歩き出す。

「Frisk。これからもよろしくねっ」

僕はそう言っつて空いている右手を彼に差し出すと彼は逡巡した後ニツコリと笑みを浮かべて僕の手を取るところ言っつた。

「うんっ、ずっと一緒だよ!フリスク!」

みんなの手を繋いで歩き出す最中、家族五人で見上げた夜空は僕達の新たな始まりを祝福するかのように無数の流星が降り注いでいた。

流星は願いを叶える力を持っている。

僕はそんな何処で聞いたかも覚えていないお話を思い出し、流れる星にそつと呟いた。

「皆といる幸せな日々がずっと続きますように……」